

パイプライン

—新東京国際空港航空燃料パイプライン
事業用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

1981

新東京国際空港公団
財団法人千葉県文化財センター

パイプライン

—新東京国際空港航空燃料パイプライン
事業用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

1981

新東京国際空港公団
財団法人千葉県文化財センター

序にかえて

千葉県には先人の残した遺跡が約1万2千カ所存在しています。特に印旛沼周辺は、先土器時代から現在に至るまでの遺跡が数多く存在するところとして知られています。

ところで、新東京国際空港に係わる航空燃料輸送のパイプラインは千葉市から四街道町、佐倉市を経由し、成田市に至るものであり、千葉県にとっては勿論のこと、国の重要かつ、緊急な事業であります。一方、文化財保護の立場からは、印旛沼南岸の埋蔵文化財の宝庫を通過するという問題があります。そこで県教育委員会は関係諸機関と慎重に協議した結果、事業の性格上、遺跡の全面保存に困難性が認められるので記録保存の措置をとることになりました。

その結果昭和53年1月、当センターに県教育委員会からパイプライン埋設工事に先立って記録保存を目的とし発掘調査を行うよう依頼があり、関係機関と協議のうえ当文化財センターでは昭和54年4月から約1カ年を要し発掘調査を実施しました。

この度その成果をとりまとめた発掘調査報告書を上梓する運びとなりました。この報告書が印旛沼南岸の歴史ばかりでなく千葉県の歴史を解明する資料として広く御活用いただければ幸いです。

最後に、発掘調査の実施に当たり御協力いただいた関係機関に厚くお礼申しあげる次第であります。

昭和56年3月31日

財團法人 千葉県文化財センター

理事長 今井 正

例　　言

1. 本書は新東京国際空港公団による、新東京国際空港航空燃料パイプライン事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は財団法人千葉県文化財センターが新東京国際空港公団の委託をうけ、千葉県教育庁文化課の指導のもとに実施した。
3. 発掘調査は昭和54年度事業として行われ、整理作業及び報告書の刊行は昭和55年度事業として実施した。
4. 発掘調査、整理作業には、矢戸三男・池田大助が従事した。原稿は矢戸・池田が協同で執筆し編集は池田が行った。
5. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、千葉県教育庁文化課・新東京国際空港公団の関係各位をはじめ多くの方々から御指導・御助言をいただいた。深く感謝の意を表する次第である。

お世話になった人々・機関（敬称略）

カ地点…岡本睦男、戸村力藏、佐倉市立和田小学校、佐倉警察署、佐倉市教育委員会
ケ地点…大塚正一郎、東関東自動車道酒々井サービスエリア売店、佐倉警察署
イ地点…鈴木とく、栗原正敏、佐倉警察署
オ地点…桧貝金一、桧貝三郎、石田ふじ、石田翠、石田敬、藤方正二、藤方喜一郎、佐倉警察署

目 次

序にかえて

例 言

第1章 発掘調査の経緯

第1節 調査に至る経過..... (3)

第2節 発掘調査の経過..... (4)

第2章 佐倉市八木 蒲田谷津遺跡

第1節 遺跡の位置..... (11)

第2節 遺跡の概要

1 調査の経過と方法..... (11)

2 遺跡の層位..... (14)

第3節 遺構とその遺物

1 住居跡..... (15)

2 火葬跡..... (58)

3 土壙..... (64)

4 溝状遺構..... (67)

5 包含層出土の遺物..... (71)

第3章 佐倉市天辺 内山遺跡

第1節 遺跡の位置..... (77)

第2節 調査の経過..... (77)

第3節 遺構とその遺物

1 住居跡..... (81)

2 柱列..... (97)

3 火葬跡..... (99)

4 溝状遺構..... (99)

5 土壙..... (102)

第4章 酒々井町墨 古沢遺跡

第1節 遺跡の位置..... (105)

第2節 調査の概要

- 1 調査の経過.....(105)
- 2 遺跡の層位.....(108)

第3節 遺構とその遺物.....(109)

第4節 その他の遺物.....(118)

第5章 その他の遺跡の調査

第1節 佐倉市大篠塚 郷ノ台遺跡.....(123)

第2節 富里村七榮 新開遺跡.....(125)

第3節 四街道町 高掘遺跡.....(130)

小結.....(133)

挿 図 目 次

第 1 図 周辺地形図及び周辺主要遺跡分布図(1).....	(6)
第 2 図 周辺地形図及び周辺主要遺跡分布図(2).....	(7)
第 3 図 蒲田谷津遺跡・内山遺跡地形図 (1/5,000)	(12)
第 4 図 八木蒲田谷津遺跡・地形図及び造構配置図 (1/1,000)	(13)
第 5 図 土層図.....	(14)
第 6 図 1号住居跡実測図 (1/60)	(16)
第 7 図 1号住居跡炉跡実測図.....	(16)
第 8 図 1号住居跡出土遺物拓影 (1/2)	(18)
第 9 図 1号住居跡出土遺物実測図及び拓影 (1/2)	(19)
第 10 図 2号住居跡実測図 (1/60)	(21)
第 11 図 2号住居跡カマド実測図 (1/30)	(22)
第 12 図 2号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	(24)
第 13 図 3号住居跡実測図 (1/60)	(27)
第 14 図 3号住居跡カマド実測図 (1/30)	(28)
第 15 図 3号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	(29)
第 16 図 4号住居跡実測図 (1/60)	(30)
第 17 図 5号住居跡実測図 (1/60)	(31)
第 18 図 5号住居跡カマド実測図 (1/30)	(32)
第 19 図 5号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	(33)
第 20 図 6号住居跡実測図 (1/60)	(34)
第 21 図 6号住居跡カマド実測図 (1/30)	(35)
第 22 図 6号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	(36)
第 23 図 7号住居跡実測図 (1/60)	(38)
第 24 図 7号住居跡カマド実測図 (1/30)	(39)
第 25 図 8号住居跡実測図 (1/60)	(41)
第 26 図 8号住居跡カマド実測図 (1/30)	(42)
第 27 図 8号住居跡出土遺物実測図 (1/4・1/2)	(44)
第 28 図 9号住居跡実測図 (1/60)	(45)
第 29 図 9号住居跡カマド実測図 (1/30)	(48)
第 30 図 9号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	(49)
第 31 図 10号住居跡実測図 (1/60)	(50)
第 32 図 10号住居跡掘り方検出状況図 (1/60)	(51)
第 33 図 10号住居跡カマド実測図 (1/30)	(52)
第 34 図 10号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	(52)

第 35 図	11号住居跡実測図 (1/60)	(53)
第 36 図	11号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	(54)
第 37 図	12号住居跡実測図 (1/60)	(56)
第 38 図	12号住居跡カマド実測図 (1/30)	(57)
第 39 図	12号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	(58)
第 40 図	火葬跡 (No 1) (1/30)	(59)
第 41 図	火葬跡 (No 1) 炭化物・焼土検出状態.....	(59)
第 42 図	火葬跡 (No 2) (1/30)	(61)
第 43 図	火葬跡 (No 3) (1/30)	(61)
第 44 図	火葬跡 (No 4) (1/30)	(63)
第 45 図	火葬跡 (No 5) (1/30)	(64)
第 46 図	M-4, D-1, D-2, D-3, D-4, D-5, D-6 実測図 (1/60)	(65)
第 47 図	D-7 (土壤) 平面図及び断面図 (1/40)	(67)
第 48 図	出土石器実測図 (2/3)	(72)
第 49 図	八木蒲田谷津遺跡出土遺物 (縄文土器) 拓影 (1/2)	(73)
第 50 図	グリッド出土遺物実測図 (1/4)	(74)
第 51 図	M-1 出土遺物実測図 (1/2)	(74)
第 52 図	内山遺跡遺構配置図 (1/600)	(79)
第 53 図	1号・2号住居跡実測図 (1/60)	(82)
第 54 図	3号住居跡実測図 (1/40)	(83)
第 55 図	3号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	(83)
第 56 図	4号住居跡平面図及び断面図 (1/60)	(84)
第 57 図	4号住居跡カマド平面図及び断面図 (1/30)	(85)
第 58 図	4号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	(87)
第 59 図	4号住居跡出土遺物実測図 吹子口 (2/3)	(88)
第 60 図	5号住居跡実測図 (1/60)	(89)
第 61 図	5号住居跡炉跡実測図 (1/30)	(89)
第 62 図	5号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	(90)
第 63 図	6号・7号住居跡平面図及び断面図 (1/60)	(91)
第 64 図	6号・7号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	(92)
第 65 図	8号住居跡実測図 (1/60)	(93)
第 66 図	8号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	(94)
第 67 図	9号住居跡・M-3号跡実測図 (1/60)	(95)
第 68 図	10号住居跡実測図 (1/60)	(96)
第 69 図	柱列 (No 3) 実測図 (1/60)	(98)
第 70 図	火葬跡実測図 (1/30)	(99)
第 71 図	井戸状遺構実測図 (1/40)	(100)

第 72 図 井戸状遺構出土遺物実測図「元豊通宝」(原寸)	(101)
第 73 図 M-2 実測図 (1/60)	(101)
第 74 図 土壌実測図 (1/60)	(102)
第 75 図 古沢遺跡地形図 (1/1,500)	(106)
第 76 図 調査区域及び遺構配置図 (1/500)	(108)
第 77 図 001号跡平面図及び断面図 (1/60)	(109)
第 78 図 002号跡平面図及び断面図 (1/60)	(109)
第 79 図 002号跡出土遺物実測図及び拓影 (1/3)	(110)
第 80 図 003号跡実測図 (1/60)	(111)
第 81 図 004号跡実測図 (1/60)	(112)
第 82 図 006号跡実測図 (1/60)	(112)
第 83 図 005号跡実測図 (1/60)	(113)
第 84 図 005号跡出土遺物拓影及び実測図 (1/3)	(114)
第 85 図 005号跡出土石器実測図 (1/3・2/3)	(115)
第 86 図 007号跡断面実測図 (1/40)	(117)
第 87 図 酒々井古沢遺跡表採資料実測図 (石器)	(119)
第 88 図 大篠塚地形図及び調査区域 (1/3,000)	(124)
第 89 図 馬土手及び溝実測図 (1/40)	(127)
第 90 図 盛り土内出土遺物実測図 (2/3)	(129)
第 91 図 遺跡周辺地形図 (1/5,000)	(131)
第 92 図 土層図・調査区配置図	(132)

図版目次

- P L 1 蒲田谷津遺跡 遺跡近景（西側より）
蒲田谷津遺跡 遺跡遠景（南側より）
- P L 2 蒲田谷津遺跡 1号住居跡全景
蒲田谷津遺跡 2号住居跡全景
- P L 3 蒲田谷津遺跡 2号住居跡調査状況
蒲田谷津遺跡 2号住居跡カマド内遺物出土状況
- P L 4 蒲田谷津遺跡 3号住居跡全景
蒲田谷津遺跡 4号・5号住居跡調査状況
- P L 5 蒲田谷津遺跡 6号住居跡全景
蒲田谷津遺跡 6号住居跡カマド断面
- P L 6 蒲田谷津遺跡 7号住居跡全景
蒲田谷津遺跡 7号住居跡カマド
蒲田谷津遺跡 6号・7号住居跡全景
- P L 7 蒲田谷津遺跡 遺跡東側部分造構配置状況
蒲田谷津遺跡 溝状造構状況
- P L 8 蒲田谷津遺跡 遺跡北側部分近景
蒲田谷津遺跡 8号住居跡全景
- P L 9 蒲田谷津遺跡 9号住居跡全景
蒲田谷津遺跡 9号住居跡カマド断面及びカマド内遺物出土状況
- P L 10 蒲田谷津遺跡 10号住居跡全景
蒲田谷津遺跡 10号住居跡（貼り床除去後）
- P L 11 蒲田谷津遺跡 10号住居跡カマド調査状況
蒲田谷津遺跡 10号住居跡壁周及び掘り方
蒲田谷津遺跡 10号住居跡掘り方断面
- P L 12 蒲田谷津遺跡 11号住居跡全景
蒲田谷津遺跡 12号住居跡（造構確認時）
- P L 13 蒲田谷津遺跡 12号住居跡土層断面
蒲田谷津遺跡 12号住居跡全景
- P L 14 蒲田谷津遺跡 №1, №1灰・火葬骨検出状況
蒲田谷津遺跡 №2, №2竹・灰・火葬骨検出状況
蒲田谷津遺跡 №3, №4, 火葬跡状況
- P L 15 蒲田谷津遺跡 土壌D-1, D-3, D-6, D-7
- P L 16 蒲田谷津遺跡 1号住居跡出土遺物
- P L 17 蒲田谷津遺跡 遺物

- P L 18 蒲田谷津遺跡 遺物
- P L 19 蒲田谷津遺跡 遺物
- P L 20 蒲田谷津遺跡 遺物
- P L 21 蒲田谷津遺跡 遺物
- P L 22 蒲田谷津遺跡 遺物
- P L 23 蒲田谷津遺跡 遺物
- P L 24 内山遺跡 遺跡近景
内山遺跡 1, 2号住居跡全景
- P L 25 内山遺跡 3号住居跡・4号住居跡全景
- P L 26 内山遺跡 5号住居跡・6号住居跡全景
- P L 27 内山遺跡 7号住居跡・6・7号住居跡切り合い状況
- P L 28 内山遺跡 8号住居跡遺物出土状況 西より
内山遺跡 8号住居跡 全景 東より
- P L 29 内山遺跡 9号住居跡・10号住居跡全景
- P L 30 内山遺跡 M-1全景, 柱列(P-3)
- P L 31 内山遺跡 M-2(全景)火葬跡No1(全景)
- P L 32 内山遺跡 井戸状遺構
- P L 33 内山遺跡 遺物
- R L 34 内山遺跡 遺物
- P L 35 内山遺跡 遺物
- P L 36 古沢遺跡 遺跡近景
古沢遺跡 調査地点(調査前), 001号跡
- P L 37 古沢遺跡 002号跡遺物出土状況
古沢遺跡 002号跡完掘時
古沢遺跡 002号跡出土石器
古沢遺跡 003号跡・004号跡
- P L 38 古沢遺跡 005号跡(住居跡)
古沢遺跡 006号・007号跡
- P L 39 古沢遺跡 005号跡出土土器
- P L 40 古沢遺跡 遺跡及び周辺表探石器
- P L 41 大篠塚遺跡 遺跡調査地点
- P L 42 新開遺跡 調査前状況, M-1, M-2掘り上り状況
- P L 43 新開遺跡 土手(A)断面, 土手(B)断面
- P L 44 高掘遺跡 調査状況

第 1 章

発掘調査の経緯

第1節 調査に至る経過

新東京国際空港公団は新東京国際空港開設に伴い航空燃料を輸送するため、貨車輸送にかえバイブルайнによる方法を検討していた。この一環として昭和53年2月15日付で空港公団から埋蔵文化財の所在の有無等について照会があり、県教育委員会では現地踏査を実施し、発掘調査による記録保存をするもの5カ所、遺跡の可能性のあるもの6カ所、用地外に所在するもの1カ所を確認した。その後、公団及び県教育委員会では協議をかねて遺跡の可能性のある地点に試掘調査を行い、1カ所が埋蔵文化財包蔵地であり、3カ所には埋蔵文化財が包蔵しないとの結論に達した。その結果、最終的には発掘調査による記録保存をするもの6カ所、工事中に立会いを要するもの2カ所となることが確認された。

記録保存をする6カ所については新東京国際空港公団及び県教育委員会の間で協議した結果県文化財センターにおいて発掘調査することとなった。

当文化財センターには県教育委員会からバイブルайн計画用地内の6カ所について発掘調査することで新東京国際空港公団と細部について協議されたい旨の連絡があった。これを受け文化財センターは空港公団と協議をかねる一方、関係機関と発掘調査実施に当つての調整を進めた。

発掘調査は新東京国際空港公団との委託契約に基づき昭和54年4月から実施することになった。

バイブルайн計画用地内遺跡の取扱いについて

番号	所在地	工事内容	面積	遺跡の種類	調査内容	備考
シ	千葉市檀橋	立杭	(約2000m ²)	土師器散布地	不要	テスビットの結果 遺構なし
ア	千葉市大日町	保安設備	(約1400m ²)	?	〃	〃
①	四街道町物井	~	200m ²	溝状遺構	本調査	
ウ	佐倉市大篠塚	~	20m ²	土師器散布地	不要	テスビットの結果 遺構なし
②	同上	側道拡幅	1000m ²	先・縄・土師	本調査	
③	佐倉市天辻	~	600m ²	土師器散布地	〃	
④	佐倉市八木	用地造成	2000m ²	土師器散布地	〃	
キ	同上	~			不要	事業地区外
ク	酒々井町墨	側道拡幅	150m ²	土師器散布地	〃	テスビットの結果 遺構なし
⑤	同上	~	200m ²	縄文時代 中・後期散布地	本調査	
⑥	富里村七榮	~	100m ²	馬土手	〃	
サ	同上	~	120m ²	~	不要	テスビットの結果 遺構なし

第2節 発掘調査の経過

昭和54年4月、調査開始の指示とともに調査準備に着手、器材・人員等の調達とともに、現地の状況から佐倉市蒲田谷津遺跡より調査をはじめることを決定する。4月16日に現地に入り草刈り、重機による抜根、表土除去後遺構精査にかかり、8月21日には現地調査を終了した。

8月6日～8月8日まで同時併行して大蘇塚郷ノ台遺跡を行う。狭くて長い調査区のため、おりからの暑さも加わり特に苦労の多い調査であった。

8月22日からは酒々井町古沢遺跡に着手する。発掘区を設定するが、発掘区域が狭いため不整となる。遺構発掘・図面作成・写真撮影を行い、埋戻した後9月7日に終了する。

引き、9月17日から富里村新開遺跡に着手し、草刈り、発掘区設定を行う。発掘区域全域を一度に掘ることとし、図面作成・写真撮影後埋戻しを行い、9月20日終了する。

11月6日～11月9日まで四街道町高掘遺跡にかかる。発掘区を設定するが、発掘区域が狭く区域内で排土を処理しなければならず、1/4区画ずつの発掘・埋戻しとなった。

昭和55年2月18日より内山遺跡の調査を行う。狭い調査区内に多数の遺構が検出され、路線内調査の困難さを感じた。3月17日は器材の搬出も完了し、調査は全て終了し直ちに整理に着手した。

No.	遺跡コード	遺 跡 名	遺跡所在地(発掘地点)	番 号
1	212-018	蒲田谷津遺跡	佐倉市八木字蒲田谷津964-957他	カ
2	212-002	大蘇塚・郷ノ台遺跡	佐倉市大蘇塚字郷ノ台970-2他	エ
3	324-001	七栄馬土手遺跡(新開遺跡)	印旛郡富里村七栄字新開322-2他	コ
4	321-001	高掘遺跡	印旛郡四街道町栗山字高掘667-1他	イ
5	322-001	古沢(花之作)遺跡	酒々井町墨字花之作1421-1他	ケ
6	212-003	天辺・内山遺跡	佐倉市天辺字内山162-3他	オ

注1) 蒲田谷津遺跡については参考文献1の寒風遺跡と同地点である。古墳1基住居跡2が調査されている。

注2) 大蘇塚郷ノ台遺跡についても参考文献1にある大蘇塚遺跡と同地点であり51の古墳～奈良時代の住居跡が検出されている。ほぼ全域にわたり重複している。

注3) 参考文献2において、天辺の鐵冶遺跡として知られている。

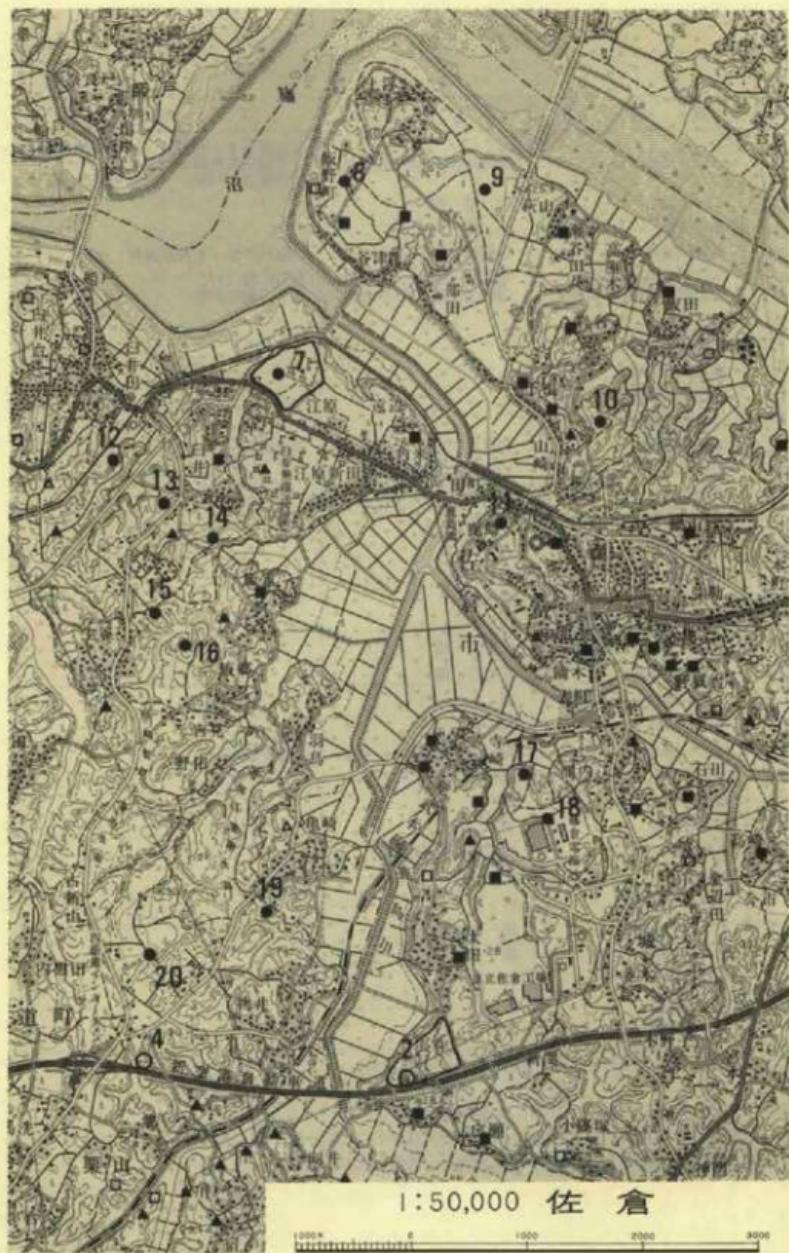
No	遺跡名	時期その他	文献等
7	江原台遺跡	集落址(縄・弥・奈・平)	「江原台Ⅰ」1977, 「江原台Ⅱ」1980 (十箇郡文化財センター) 「江原台」1980, (江原台調査団)
8	丁遺跡	包藏地	
9	新山遺跡	包藏地	
10	天神前遺跡	包藏地(縄・弥・古)	
11	国立歴史民俗博物館 予定地内遺跡(佐倉城址)	集落址・城址 (縄・弥・奈・平・中近世)	杉原莊介他「天神前遺跡」1974 石田広美 1977 森尚登 1976
12	白井南遺跡		
13	間野台貝塚		
14	飯重新畑遺跡		
15	生谷堆塚遺跡		
16	吉見台遺跡		
17	大崎台遺跡	包藏地(弥・古・奈)	1980調査
18	前原遺跡	包藏地(縄文)	
19	千代田遺跡		「千代田遺跡」1972
20	千代田振格台遺跡		
21	大木戸遺跡		
22	花輪内遺跡	縄・歴	
23	過替遺跡	縄・歴	
24	向原遺跡	古	
25	南大留袋(Ⅲ)遺跡	先土器・縄	
26	南大留袋遺跡	先土器・縄	
27	中ノ台遺跡	縄・古	
28	南内町遺跡	縄・古	
29	総合公園遺跡	縄(早~後期)	報告書1980
30	千台遺跡	縄・歴	
31	藤株遺跡	縄	
32	古沢南遺跡	縄	
33	古内古墳	前方後円墳・円墳	
34	梅作遺跡	歴	
35	樅台第2遺跡	古・歴	
36	古井戸第1遺跡	弥・古・歴	
37	樅台第1遺跡	縄・古	
38	駒込遺跡	古	
39	仲ノ台遺跡	古	
40	一ノ台遺跡	弥・古	

縄=縄文時代・弥=弥生時代・古=古墳時代・歴=歴史時代

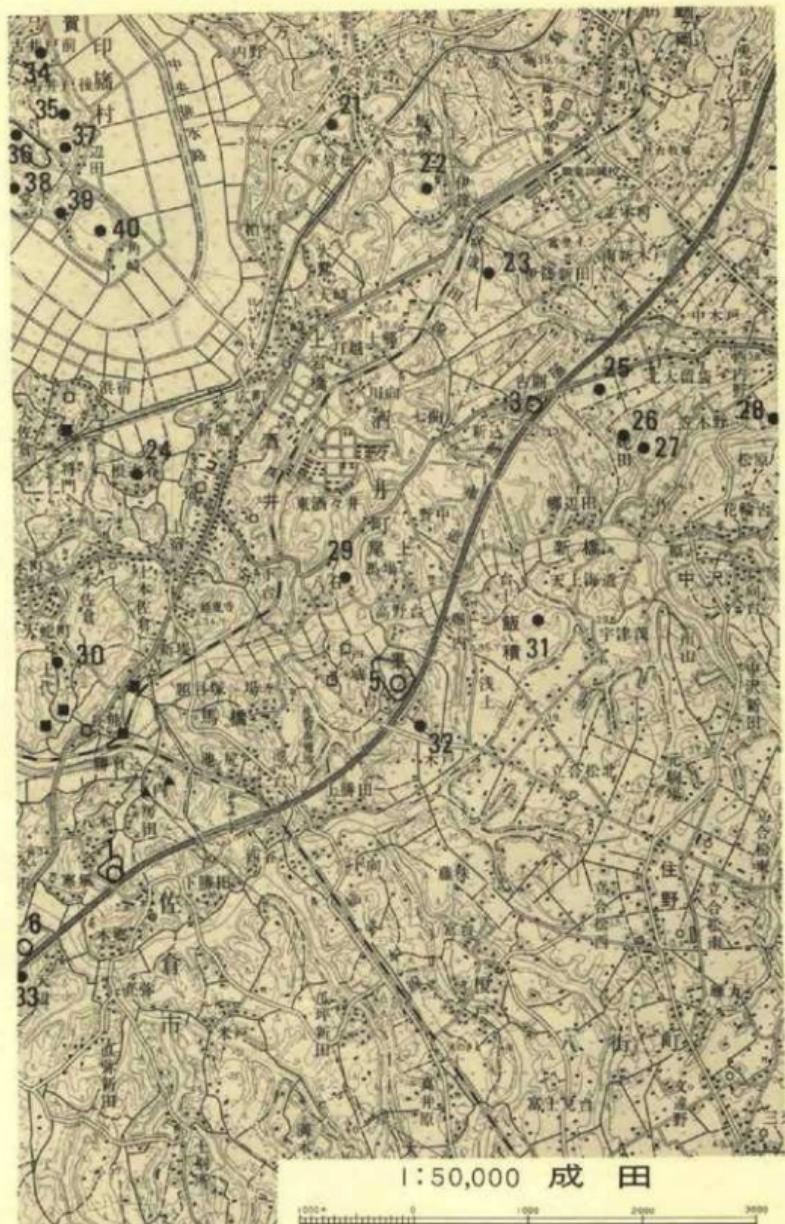
(▲) (□) (●) (■)

(あくまでも大まかな分けかたである。各遺跡がどの時代を代表させるかである。)

注 分布地図上には印旛沼及び高崎川、鹿島川の流域を中心に報告されている遺跡等を中心にのせてあり、本来はもっと多くの遺跡が周辺に所在し、報告されている。



第1図 周辺地形図及び周辺主要遺跡分布図(1)



第2図 周辺地形図及び周辺主要遺跡分布図(2)

第 2 章

佐倉市八木蒲田谷津遺跡

第1節 遺跡の位置 (第2・3図)

蒲田谷津遺跡は佐倉市八木字蒲田谷津954—957他にかけて所在する。遺跡の所在する台地は、高崎川の主流及び支谷に狭まれた台地上に位置し、台地北側は主流からの樹枝状の支谷が入り込んでいる。小支谷が両側から入るため周辺はどちらかと言えば全体として広い台地面は少なく、やや、やせた感じのする台地となっている。高崎川をはさんで直線距離 1.5 km で長熊庵寺を望むことができる。

第2節 遺跡の概要

1. 調査の経過と方法 (第4図・図版1)

本遺跡の調査は、昭和54年4月16日から8月21日まで行った。

調査区域は遺跡の所在する台地の東側に位置し、新設される道路敷の範囲内であるが、実際には地形上からみてあるいは排土場所との関係から、概ね標高33mより上の台地面を調査の対象とした。

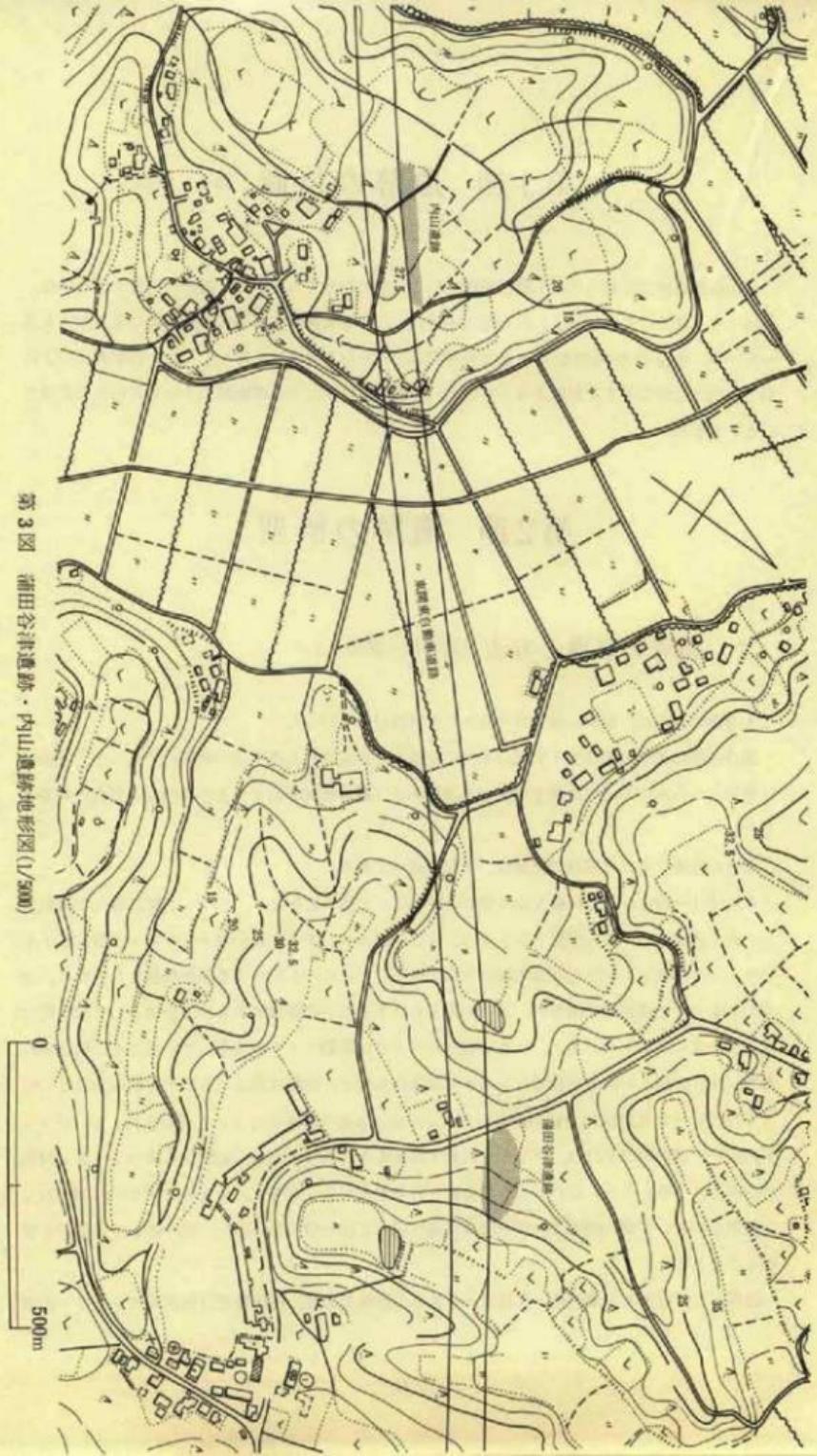
調査の経過ならびに方法の概要是、下記の通りである。

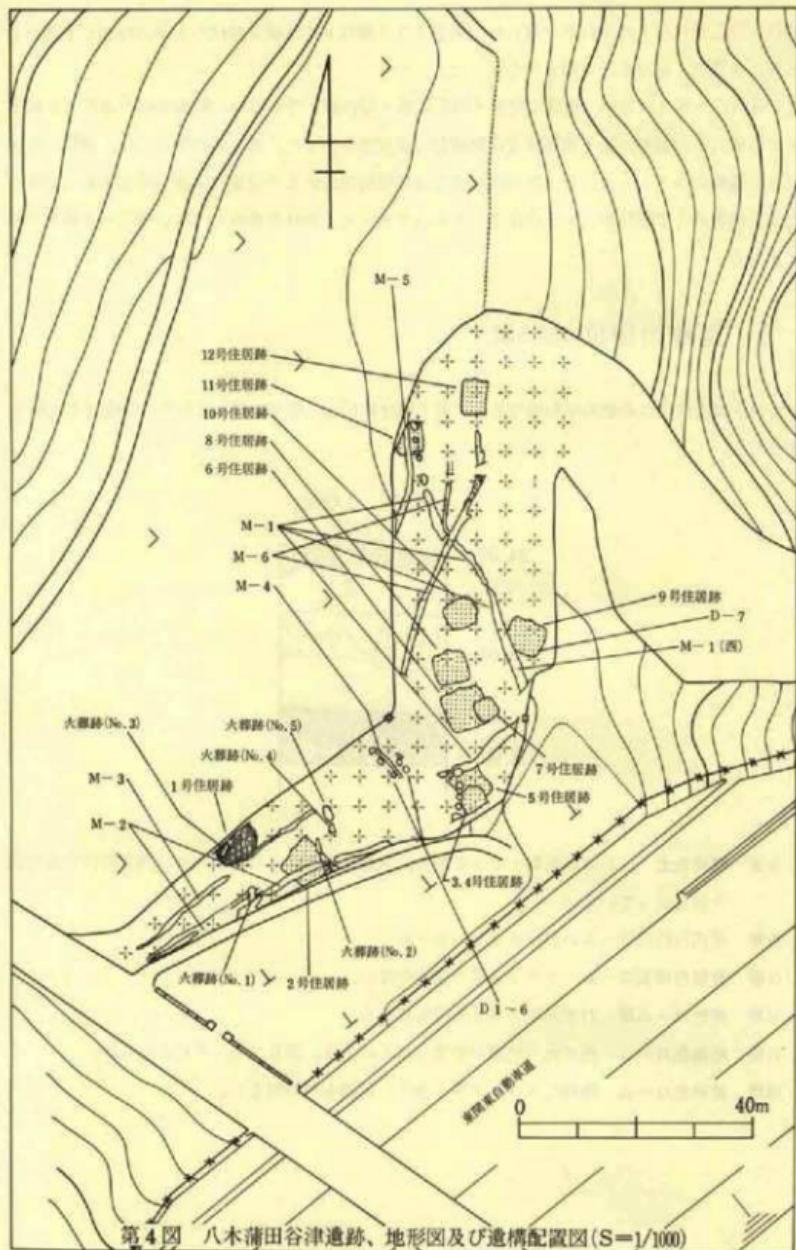
(4月16日～19日) 器材搬入並に草刈り後グリッド基準杭を打ち、グリッド軸に沿った試掘トレンチを設定する。この試掘トレンチは、3B00列トレンチ・3A50列トレンチ・2B50列トレンチ・2B00列トレンチの4本で幅は2mである。これらのトレンチを順次発掘したところ、全てのトレンチに遺構が検出され、3B00列トレンチでは一部重複するものの全体としては密度は高くなかった。また、3A50列トレンチでは新时期テフラが遺存していることが確認されたが、3B00列トレンチや他のトレンチでは認められず、南側に限られることが明らかとなった。

(4月20日～5月20日) 上記の結果からユンボによる表土剥ぎを行うこととも平行して、グリッドの設定・遺構確認を行う。グリッドは40×40mを大グリッドとし、北側から南へ1～3・西側から東へA～Cとした。これによって表わされる各大グリッドを4×4mの小グリッドに細分し、北西隅を00として東へ09まで、以下同様に南へ向って10～19・20～29……90～99までの番号を付けることとした。

遺構としては溝・土壤の他、火葬墓らしきものが検出され。住居址では弥生時代のもの・古墳

第3図 潘田谷・内山遺跡地形図(1/500)





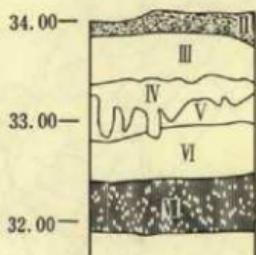
時代～平安時代のものの存在が窺われ、新期テフラ層以下では縄文時代のものの存在が予想される等、多様性に富むことが明らかとなった。

(5月21日～8月21日) 遺構の発掘・図面作成・写真撮影等を行い、順次南側に遺存する新期テフラ層以下の調査、先土器時代文化層確認の試掘等を行った。縄文時代関係では、遺構の検出はなく遺物のみであった。先土器時代関係では期間的都合により試掘は不十分なものものであったが、境界近くで剝片が二・三点出土したのみであった。器材を撤収し、次の地点への移動準備にかかる。

2. 遺跡の層位 (第5図)

台地上調査区内の西側の平坦地である。表土層は約10cmの厚さが残っていた。図面は表土除去後である。

第5図 土層図



II層 暗褐色土 いわゆる新期テフラである。下層及びIII層との境あたりは縄文時代の遺物包含層となっている。

III層 黄褐色軟質ローム いわゆるソフトローム

IV層 黄褐色硬質ローム クラック帯の発達少ない。

V層 褐色ローム層 わずかにスコリア等含まれる。

VI層 暗褐色ローム 他に比べ色調やや黒っぽくみえる。第IIブラックにあたるか。

VII層 暗褐色ローム 微細なスコリア多く含み、色調もやや明るい。

第3節 遺構とその遺物

本遺跡における遺構は住居跡12軒、土塙7基、溝状遺構6条、火葬跡5基である。（第4図）

1. 住居跡

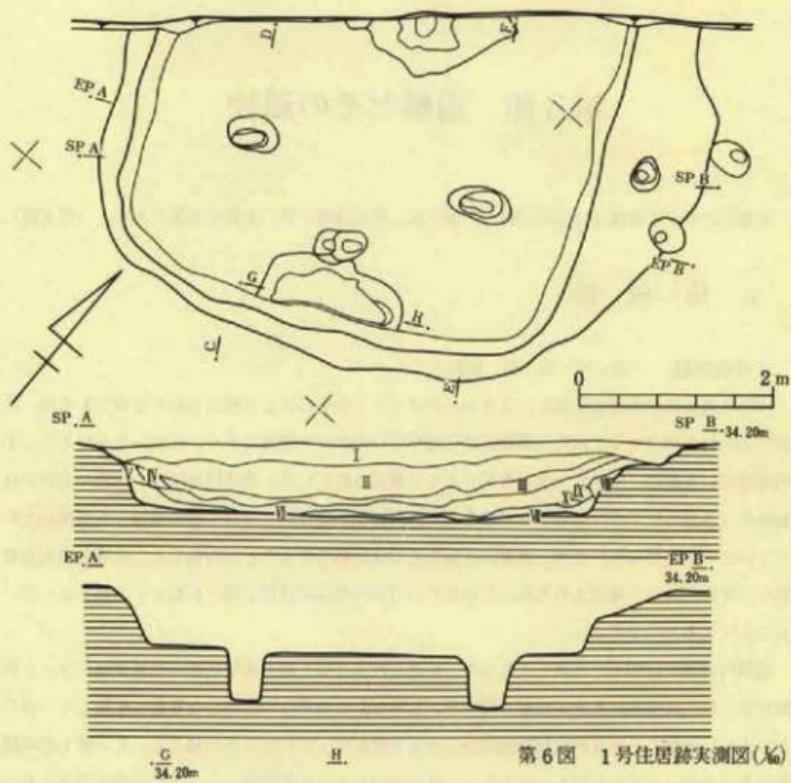
1号住居跡（第6図・第7図 図版2）

本跡は調査区南西側に位置し、3A44、45グリッドを中心にして検出されたものであるが、住居跡の約1/4に相当する北西側は調査区外に延びているため未調査である。なお、3A44グリッド内北西側に火葬跡（No.3）が覆土を掘り込んで構築されている。遺構検出時は、南西—北東に長軸をもつ不整形なプランをもつ住居跡と考えられたが、結果的には最上層に堆積した黒褐色土のプランとは全く異なり、北西—南東に主軸をもつ住居跡であることが判明した。遺構の検出は新期テフラ面において確認されたが、これはこの付近の層序が耕作土層—新期テフラ層となっていることによるものである。

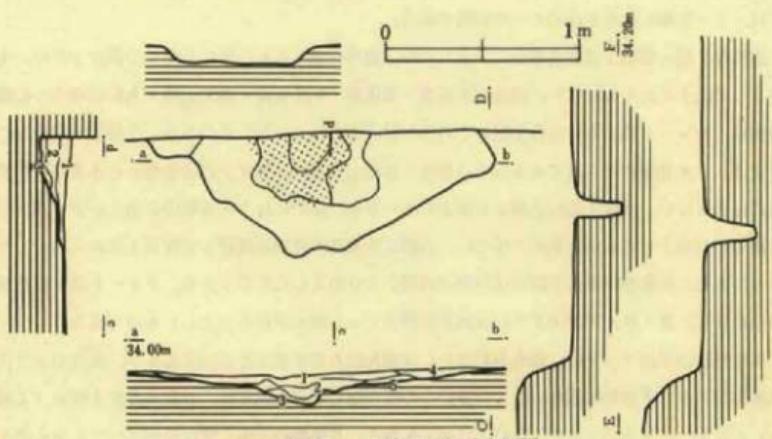
遺構内の層序は図示した通りであるが、前述したようにI層の堆積状況は遺構平面プランと合致せず、特に北東側に大きく広がっている。しかし、この部分の広がりもIV層が堆積していることにより、少なくともIV層堆積以前からテラス状になっていたことが窺える。その後I層堆積前にさらに掘り下げられたものであろう。住居内中央より北東壁側から南東壁側中央部分にかけては、I・II層を除き全体的にやや硬質である。

遺物はI層～Ⅴ層までの各層から出土したが、器形を窺えるものはなく全て小破片であり、まとめて出土したものはない。遺物は土師器・須恵器・弥生土器・縄文土器・土製紡錘車・石鐵の他に、チャート質あるいは石英質の小石片が數点出土している。このうち、土師器・須恵器の出土は、I・II層に限られており以下の層からは出土しない。縄文土器は各層から出土したが量的には多くない。弥生土器は各層より出土しているが、量的にはI・II層中の出土が多く、床面に密着して出土したものは極めて少ない。石鐵は南東壁中央部の壁近くでIV層上部から出土したものである。土製紡錘車は炉跡の南西側でⅤ層中より出土したものである。チャート質・石英質の小石片は、III・IV・Ⅴ層中あるいは南東壁際のピット埋土中から出土したものである。

本住居跡の平面プランは、隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈するものであるが、前述のように北東側が大きく不整形に張り出している。この張り出し部分を除けば、NE-SW 4.87m (4.49m)・NW-S E 3.35 + α m (3.17 + α m) を測る。北東側張り出し部は東側コーナーから徐々に張り出し、最大幅は1.09 mを測る。この張り出し部分は住居跡内に向って傾斜するもので、壁



第6図 1号住居跡実測図(%)



第7図 1号住居跡炉跡実測図

1号住居跡土層説明

- | | |
|---|--------------------------------|
| I. 黒褐色土 所々に焼土を若干含む。 | V. 暗褐色土 3・4区の壁底下では硬質。 |
| II. 黒 色 土 ローム粒若干。 | VI. 暗褐色土 ローム粒若干、ローム土若干混入、硬質、NE |
| III. 黑褐色土 ローム微粒少減、S E面では褐色味が強い。
跡:黒褐色土、やや硬質。 | ～SE面では若干黑色味帯びる。 |
| IV. 棕 色 土 若干の黒褐色土混入。 | VII. 暗褐色土 S・F・Lを多く含む。 |
| V. 棕 色 土 ローム土(蟹の崩土)少減。 | VIII. 暗褐色土 ローム粒若干、硬質やや黑色味帯びる。 |
| 1号住居跡土層説明 | IX. 暗褐色土 硬質。 |
| 1. 暗褐色土 炭化物粒、焼土粒子若干。若干黑色味。炭化材
片を少數含む。 | 3. 暗褐色土 (淡褐色味強い)焼土粒を含む。灰が若干混入。 |
| 2. 暗灰黒褐色土 焼土粒子を少量含む。炭化物粒を若干含
む。灰若干混入。 | 4. 暗褐色土 ローム土若干、硬質(暗色) |
| | 5. 暗褐色土 ローム土若干、やや硬質。 |

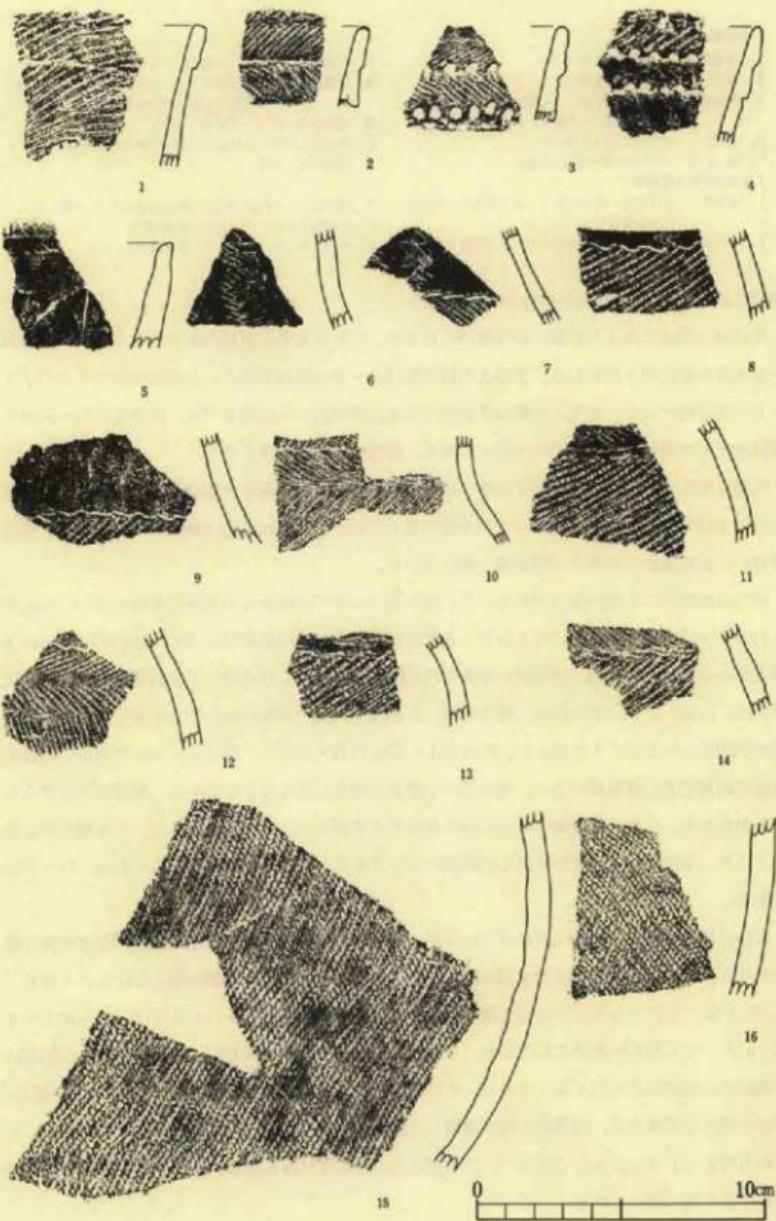
際での床面との比高差は34~41cm前後を測る。

住居跡の掘込みは上方で緩やかな傾斜となるが、これが本来の掘込みとは考えられず、中段以下が本来の掘込みと思われる。上端と中段の幅は9~30cm前後を測る。上端と中段ラインのブラン上の差は殆どなく、各辺とも概ね直線的である。検出面から床面までは、南西壁で61~58cm・南東壁で57cm前後・北東壁で60~64cmを測る。壁面は比較的硬質である。

床面は壁際を除き全体に硬質である。床面は南西壁側及び北東壁北側が高く、炉跡周辺から柱穴付近を経て東側コーナーにかけてやや低くなっている。その比高差は最高で9cmを測る。壁溝はない。炉跡東側の床面の一部が赤く焼けている。

柱穴は南西側の2個が検出された。P₁はN E-S Wに長軸をもつ長円形を呈し、67×36cm(35×11cm)・深さ54cmを測る。P₂とN E-S Wに長軸をもつ長円形を呈し、50×35cm(35×13cm)・深さ50cmを測る。この他に南東壁の中央寄りにP₄が位置し、これに接して北西側にP₃a・bが位
置する。P₃aが22+α×25cm、深さ12cm、bが32×28cm、深さ21cmのやや不整な円形を呈する。時間的関係はbが古くaが新しい。P₄は150×48cm(118×37cm)・深さ14~16cmを測る。P₄は北東側に暗褐色土の硬質層があり、他の部分の埋土と硬さが異なるところから、新旧が存在するものと思われる。なお、北東側張り出し部に存在する3個のピット(P₅~P₇)は、その埋土が黒色土であり、本住居跡には伴わず新しい時期のものである。深さはP₅-60cm、P₆-71cm、P₇-69cmを測る。

炉跡は調査区境界外に約1%が伸びているが、検出された位置からして住居跡内のはば中央付近であると思われる。炉跡は床面を掘り窪めた地床炉である。炉跡の外側の掘込みは大きくN E-S W 178cm、N W-S E 63+αcmを測り不整形を呈する。この掘込みの中央部は、さらに1~2段にわたって不整形に掘込まれており、N E-S W 65cm、N W-S E 37+αcmを測る。内側掘込み侧面から底部は赤く堅く焼けており、その範囲はN E-S W 49cm、S E-N W 35+αcmを測る。炉跡の埋土は暗褐色土。黒褐色土層が堆積し、焼土粒子・炭化物・灰が少量含まれているが、いずれも層をなすほどのものではない。炉跡掘込みの深さは15cmを測る。また、炉跡東側の床面の一部が赤く堅く焼けている。



第8図 1号住居跡出土遺物拓影(劣)

1号住居跡出土の遺物 (第8・9図、図版16) (212-018-002)

本跡からの出土遺物は、弥生式土器、紡錘車、石鏃、土製品、土師器、須恵器、繩文式土器等がある。土師、須恵器の出土は、第Ⅰ・Ⅱ層であり、第Ⅲ層以下の出土は認められない。繩文式土器は第Ⅰ～Ⅶ層の各層で出土したが、量としては極めて少ない。紡錘車は第Ⅷ層の出土で床面より若干浮いて出土した。石鏃は、いわゆるアメリカ式石鏃と称呼されるもので、第Ⅳ層上部で出土した。覆土最下層出土のものである。弥生式土器は各層からまんべんなく出土しているが器形全体を窺えるものではなく、すべて小破片である。

遺物

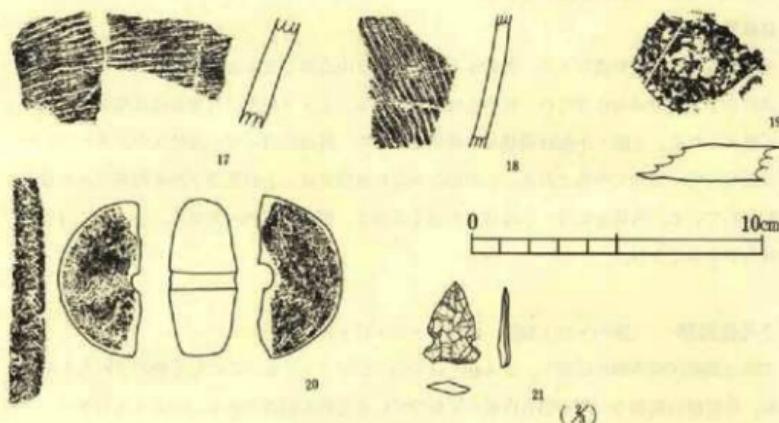
口縁部 (1～5)

(1)～(4)は甕あるいは壺形土器の口縁部。(5)は器形は不明。

(1)は複合口縁を呈し口唇部、口縁部、頸部の全面に単方向の繩文が施文されている。

(2)～(4)は2段 (あるいはそれ以上かもしれないが) の複合口縁を呈するものである。(2)は口唇部、口縁部に繩文が施文される。口縁部繩文は、上段と下段とでは羽状構成をなす。(3)も頸部繩文は上段と下段とで羽状構成をなす。口唇部は内外からの押捺により小波状を呈し、上段口縁部の上部は無文となっている。口縁部各段下端には、半截竹管もしくは棒状工具による刺突刻目が施される。(4)は口唇部及び口縁部の上段に繩文が施文されるが、下段及び頸部は無文である。口縫部各段下端には、(3)と同様な工具による刺突刻目が施される。

(5)は単純口縁を呈し、口唇部はやや内傾する。口唇部及び内外面は無文である。外面は口唇部



第9図 1号住居跡出土遺物実測図及び撮影(左)

下約 0.9 cm の幅で横ナデが施され、以下は斜位のヘラナデが施される。

頸部～胴部 (6～10) 頸部ならびに頸部から胴部への部位のものである。

(6)～(8)は、頸部に櫛歯状工具による縦位の波状文が施文される。このうち(6)・(7)は近接してもう1条が施されており、2条一組の文様単位が想定される。(8)も 2.2 cm 離れてもう1条の波状文が施されているが、1条1単位の施文かもしれない。(7)・(8)は頸部と胴部の境に1条の結節繩文が施され、胴部は繩文が施文される。

(9)は小破片のため断定はできないが、頸部は無文である可能性が強い。胴部との境は1条の結節繩文が施され、胴部は繩文が施文される。

(10)は頸部から胴部にかけて全面繩文が施文される。頸部から胴部にかけては羽状構成をなすが、胴部は単方向の斜繩文が施されるようである。

頸部 (11～18)

(11)～(14)は胴部上方のもので、いずれも繩文が施文される。(11)・(12)・(14)は羽状構成をなす。(9)も2条の結節文の上方に僅少ながら下方とは異方向の繩文が見出せ、羽状構成をなすものと思われる。

(15)～(18)は胴部中位以下のもので、いずれも単方向の繩文が施文される。繩文は(17)が横位に近い方向に施されるが、他は斜方向である。また、本跡出土土器を含め大半が付加条繩文であるが、(14)のような撚糸的な施文も僅少ながら認められる。

底部 (19)

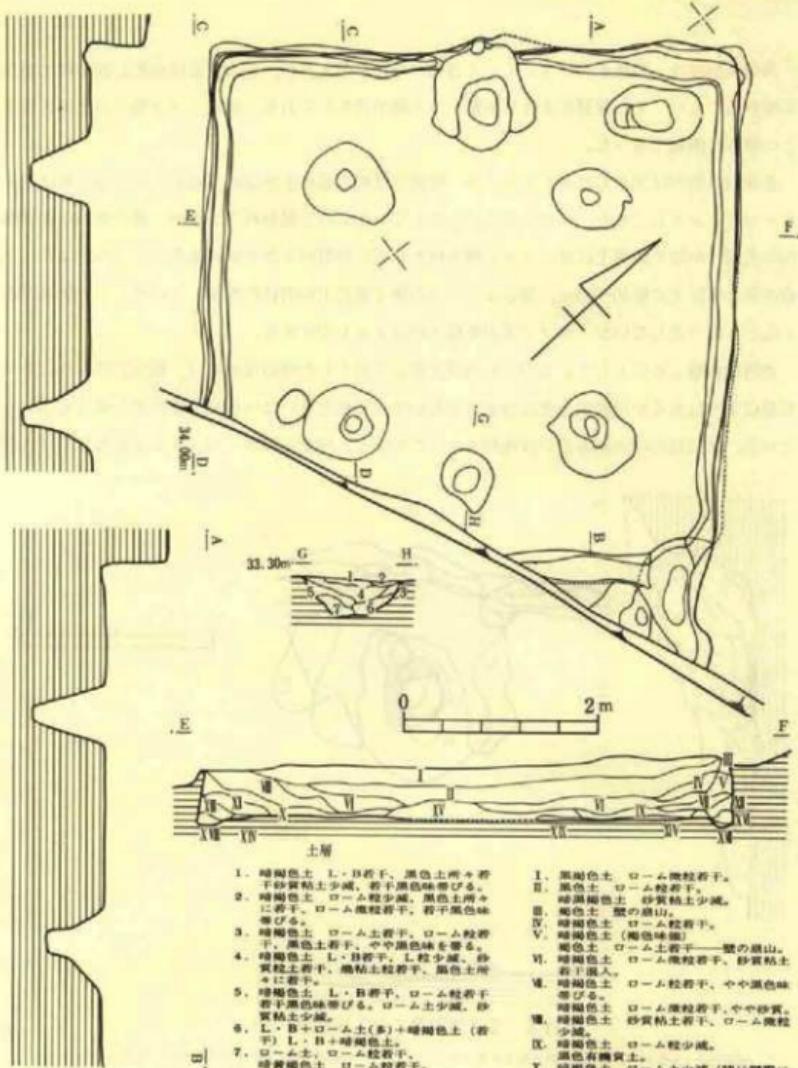
胴部下半から底部への部位は図示に耐え得るものもなく、底部資料として本例を示した。底部は平底で、外面に木葉痕が認められる。

紡錘車 (20)

土製のもので約 1/2 が遺存する。径約 5.3 cm、厚さは中心部で 2.3 cm、外周部で 1.4 cm を測る。孔は約 0.7 cm で焼成前に穿たれ、孔内面は滑沢である。上・下面及び外周面には櫛歯状工具によって施文される。上面・下面是同様な文様構成をもち、外周に沿って小波状文が、また中心から外縁に向って小波状文が施される。この中心からの波状文は、上面及び下面を四等分されるように配されている。外周面には、小波状文が施文される。色調は褐色～黒褐色。胎土中に白色微粒物質をやや多く含む。

2号住居跡 (第10・11・12図、図版2・3・17・18)

本跡は調査区南西側に位置し、3 A 46・47・56・57 グリッドを中心にして検出されたものであるが、住居跡の一部が調査区域外に伸びていて未調査である。なお 3 A 47 グリッド内や東側に火葬跡 (No. 2) が本跡の壁及び覆土を掘込んで構築されている他、南側に溝 (M-3) あるいは擾乱壙がある。これらは、擾乱壙を除き床面までには至っていない。



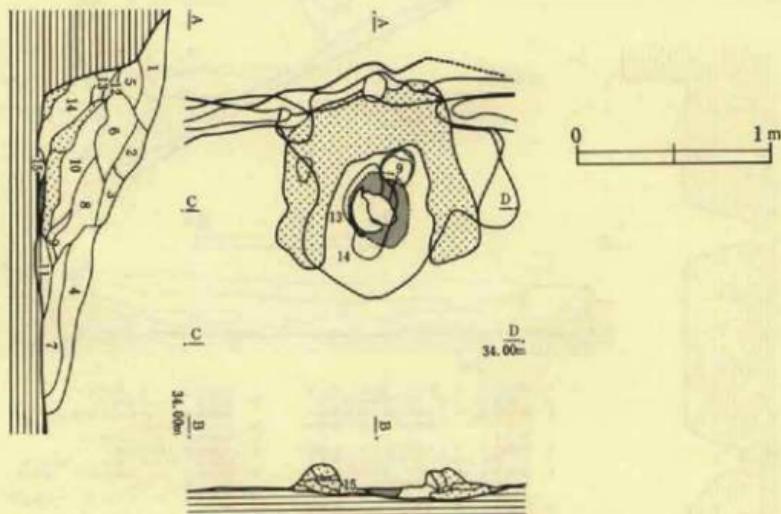
1. 暗褐色土。L・B若干、黒色土若干
少々黒褐色帶びる。
 2. 暗褐色土。ローム土若干、黒褐色土若干
若干黒褐色帶びる。
 3. 暗褐色土。ローム土若干、ローム微粒若干。
若干黑色味を帯びる。
 4. 暗褐色土。L・D若干、L・E少々、D
黒褐色土若干、黒粘土微粒若干。黑色土所
に若干。
 5. 暗褐色土。L・D若干、ローム粒若干
若干黑色味帶びる。ローム土少々。少
量粘土少々。
 6. L・B+ローム土(多)+暗褐色。(若
干)、D+暗褐色土。
 7. ローム土、ローム粒若干、
暗褐色土。ローム粒若干。
- I. 黑褐色土。ローム微粒若干。
 - II. 黑褐色土。ローム粒若干。
 - III. 黑褐色土。ローム土若干、少々黒褐色帶
びる。
 - IV. 黑褐色土。黒の崩山。
 - V. 黑褐色土。(崩山峰面)。
 - VI. 黑褐色土。ローム土若干—黒の崩山。
 - VII. 黑褐色土。ローム粒若干。少
量粘土若干。
 - VIII. 黑褐色土。ローム粒若干、やや沙質。
少々。
 - IX. 黑褐色土。ローム粒少々。
 - X. 黑褐色土。ローム土少々(特に壁間に
多い)若干黑色味。
 - XI. 暗褐色土。ロームアロック(床面近く
)ローム粒若干含み、やや沙質。
 - XII. 暗褐色土。ローム土若干。若干黑色味
有。
 - XIII. 暗褐色土(暗褐色土との混入層)。
 - XIV. 暗褐色土。黒色土若干混入、ローム土
少々。
 - XV. 暗褐色土。ローム粒若干、ローム土含。
 - XVI. 黑褐色土。少々黒褐色土。少々
40~60cmで入る。
 - XVII. 暗褐色土。砂質粘土でアロックを多く
含む——カマドの流れか。
 - XVIII. 暗褐色土。ローム粒少々。
 - XIX. 暗褐色土。ローム土若干。黒褐色土少
々。
 - XX. 暗褐色土。ロームアロック、ローム土
がよく混入する。
 - XXI. 暗褐色土。ロームアロック(床面近く
)黑土(健脚含む)。

第10図 2号住居跡実測図(1/10)

遺構検出時は、黒色土の存在によって遺構の存在が窺えたが、この付近は地形が南東側に緩かに傾斜しており、また深耕によって新期テフラ層が消失しており、新期テフラ層下の土層と覆土との識別が困難であった。

遺構内の層序は図示した通りであるが、壁側では壁の崩落土が認められる。壁は現状では若干オーバーハングしており、当初はさらに内傾していたものと思われる。また、北西側から住居跡内中央部にかけて床面上には、カマド構築材としての砂質粘土が多量に流失している。なお、壁溝内側の床面上に幅40~60cm、厚さ4~7cm前後で黒色土が帶状に堆積している。この層は厚さ・幅ともに一定しないが、カマド周辺を除き四周するものである。

遺物は各層より出土しているが、北西壁北側から出土した壺のなかには、層位的にみればI・II層以下ではあるが比較的上部に含まれるもので、完形あるいは $\frac{1}{2}$ 前後の接合する破片も出土している。住居跡内中央部あるいは南側では、このように埋土上部から出土する完形もしくは大形



第11図 2号住居跡カマド実測図(%)

1. 暗褐色土 砂質粘土及び焼けた砂質粘土を若干含む。
2. 砂質粘土で暗褐色土が若干混入する。
3. 暗褐色土で砂質粘土が若干混入する。
4. 暗褐色土で砂質粘土が少量、炭化物粒子、ローム粒子が若干混入する。
5. 暗褐色土でローム土が少量、砂質粘土及び焼けた砂質粘土が若干混入する。
6. 砂質粘土で黒色を呈するものが若干混入する。
7. 砂質粘土で暗褐色土が若干混入する。
8. 暗褐色土で砂質粘土が若干混入する。砂質粘土で赤紫色に焼けている。
9. 暗褐色土で、焼けた砂質粘土が少量混入する。
10. 暗褐色土で砂質粘土が少量混入する。
11. 暗褐色土で砂質粘土を少量含む。
12. 暗赤褐色を呈する砂質粘土。
13. 砂質粘土にローム土と暗褐色土が若干混入する。
14. 暗褐色土を呈する砂質粘土。
15. 暗褐色土で砂質粘土と炭化物粒子、焼けた砂質粘土が若干混入する。

の破片はみられず、床面近くに限られるようである。出土した遺物のうち、小破片のものは各層で出土するが、大形の破片あるいは完形もしくは完形に近いものは、図示したようにカマド右側及びカマド周辺にかけてが多い。特にカマド右側では、先述のように環④・小形甕の完形品⑨もしくはまとまった破片が壁上より落込んだ状態で出土している。この他カマド内からは、支脚・甕⑩・小形甕⑪が横転した状態で出土しているが、甕は胴部を欠失し、小形甕は口縁から胴部下半にかけて約1/2を欠失している。この両者に接合する破片は検出されていない。この他東側柱穴南側より出土した甕は床面に置かれた状態で正位で出土している。

本住居跡は比較的整った方形プランを呈し、NW—SE 5.40m (4.88m), NE—SW 5.49m (5.00m) を測る。

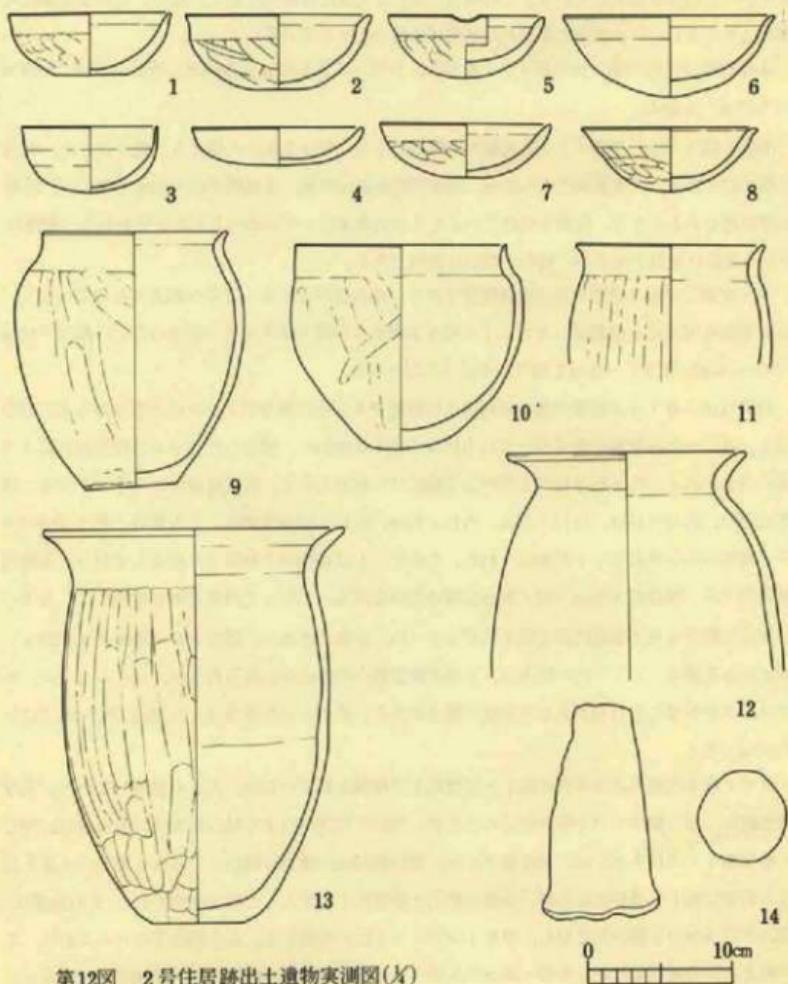
造構の掘込みは、各壁ラインとも概ね直線的である。壁は全体に内傾する。壁の高さは、北西壁側で62~71cm、北東壁側で42~63cm、南東壁側が48cm前後、南西壁で46~60cmを測るが、地形が傾斜地であることと、深耕を受けていることから本来はやや高かったものと思われる。壁面はローム部分は硬質であるが、褐色土部分は軟質である。

床・壁溝 床面は壁際を除き全体硬質であり、南西側が若干高くなるが顯著なものではなく、ほぼ平坦と言える。壁溝は、カマド下を除き全周するが幅・深さとも一定ではない。幅37~16cm (22~14cm)、深さ4~11cmを測り、床面は平坦となる。

柱穴は壁より1.5m前後内側で対角線上に位置する。柱穴掘方のプランは不整ながらも円形を呈し、径70~95cm前後を測るが、これら柱穴の埋土は軟かく、検出したプランは柱抜取りによるものと思われる。P₂・P₃は柱穴上部が広く掘広げられたもので、柱穴は途中から小さくなる。柱穴底径は、P₁ 16×19cm, P₂ 13×21cm, P₃ 17×16cm, P₄ 19×20cmを測る。この他P₂, P₃を結ぶラインの壁寄りの中央にピットが検出された。このピットは住居跡中軸線上に位置しており、不整円形を呈する。径は47×56cm (24×29cm)、深さ32cmを測る。また、北西壁北寄り壁際には、NE—SWに長軸をもち不整長円形を呈するピット (P₅) が検出された。径は100×56cm (31×29cm)、深さ35cmを測る。ピット内の埋土は、上部に砂質粘土の流込みがみられるが、ローム土・ロームブロックを多量に含む層があり不自然な埋土である。各ピットの深さは、P₁ 74cm, P₂ 59cm, P₃ 67cm, P₄ 60cmである。

カマドは北西壁のはば中央に粘土・砂質粘土で構築されているが、大きく崩壊している。現存部上面は、赤く焼けている部分が認められた。現状では煙出口より焚口端までの長さ114cm、同じく袖部端までの長さ100cm、袖部幅106cm、焚口幅54cm、煙出の径15×11.5cmを測る。火床と言える明瞭な焼土の遺存はないが、少量の焼土と砂質粘土の混入した層が認められた。その範囲は、30.5×37.5cmの不整円形を呈し、厚さ4cmでレンズ状に堆積する。この層の下のローム面は、この層と大部分重複しながらも49×28cmのNW—SE方向に長い不整形を呈す範囲が焼けており、この部分が本来的な火床であったものと考えられる。煙道は燃焼部奥より急激に立上るが、壁下

に砂質粘土がありこのため多少角度の差が生じている。粘土より煙出口に向っては約75度前後の角度をなし、これ以下では約40度前後の角度である。カマド掘方は、幅122cm・長さ103cmの範囲で、床面を2~6cmの深さで掘込まれるが、極めて不整な掘込みである。南西側の掘込み部分はそのまま焚口としている。壁面に対する掘込みは僅少であって、上方で幅41cm奥行11cm、下方



第12図 2号住居跡出土遺物実測図(ノ)

で幅21cm奥行6cmの三角形状に施されている。このような掘方に対してカマドが構築されるが、両袖の基底部分には白色粘土を用いており、その上に砂質粘土を積み上げている。なお、袖部からみ出した掘方については、白色粘土または暗褐色土に白色粘土を混入する土で埋土している。

2号住居跡(212-018-003)出土遺物一覧

番号	器形	遺存度	法量			内 容	備 考
			口径	高さ	底径		
1	坏	完 形	11.0	4.0	5.0	赤褐色 黒はん少しあり胎土中に白色粒子多い焼成良。肩部へラ削り肩一口縁ヨコナデ内へラミガキ加える。 底部にヘラ先による木薙を作っている。	
2	坏	%	13.0	5.0	4.5	黄褐色 内面黒色気味。胎土中に白色砂粒多い、焼成や良。いくらか肩部深めか	
3	坏	%	9.5	4.5	5.5	暗茶褐色 胎土、焼成とともにやや落ちる。内・外ともにへラ削り+ミガキ加える。肩・胸の区分けはほとんどなし。多少意識して整形は施してある。	
4	壺?	%	11.5	2.5	7.0	黄褐色 外スス付着、内・外へラケズリ器内厚く胎土焼成はほどよいとは思えない。灯明皿の使用物か。	
5	坏	完 形	10.5	4.0	4.0	赤褐色 胎土中に砂粒多く含み焼成いくらか甘そう外へラ削り口縁はヨコナデ口唇いくらか外反気味になる。 口縁部に一部切りかきを設け片口状にしてある	
6	坏	完 形	14.5	5.5	2.5	赤褐色 胎土中の白色砂粒目立つ、焼成良。 外へラ削り、口縁ヨコナデ内面ていねいなへラミガキ。底部丸底のわりに厚みをもたせてあるため安定良好	
7	坏	完 形	12.0	3.5	4.0	黄褐色 胎土中に白色砂粒含む。荒い、焼成良、外へラ削り。肩部の腹はほとんど目立たないようナデ加える。 内へラミガキ。	
8	坏	完 形	12.0	3.0	2.5	黄褐色 外へラ削り+ナデ、内へラミガキ胎土良、焼成良好	
9	甕	½	12.5	17.0	6.5	黄茶褐色 内赤褐色、有機質のスス状付着あり、胎土中に白色砂粒目立つ。二次焼成によるものが焼き甘い感ある。肩一口縁つけたし様の口縁ヨコナデ胸へラケズリ+全面ナデ内ミガキ入る	カマド内
10	甕	完 形	14.5	14.0	4.0	暗茶褐色・内黄褐色 胎土中に白色砂粒含む 外・へラ削り・ナデ・内・口縁部ヨコナデ、下半へラナデ、肩下半より底部にかけ急につばむ	
11	甕	口縁½	13.0	×	×	黄褐色 黒はんあり、胎土、焼成良好外へラケズリ・口縁ヨコナデ・内へラナデ	
12	甕	胸上½	16.5	×	×	黄褐色 黒はんあり、丸みのある胸へラケズリ、口縁部外内横ナデ、口縁大きく外反して口唇までゆるく屈曲している	
13	甕	½	20.5	26.5	6.0	暗茶褐色 黒はんみられる。胎土焼成良、外へラケズリ、表面やや荒れ気味 口縁外・内横ナデ、内面よく磨かれている	
14	土製 支脚	完 形				赤褐色 手づくね へラによる荒い面取りを施す	カマド内

3号住居跡 (第13・14・15図、図版4)

本跡は調査区中央南東側に位置し、3B22・23グリッドを中心にして検出されたものであるが、住居跡の南東側は調査区域外に延びているため未調査である。この付近は新期テフラ層は消失しており、遺構検出面は暗褐色土層中であった。本跡の北西コーナーはピットによって破壊されており、また、このピット近くから東側は5号住居跡と重複しており、プランの検出に手間取った。本跡は005号跡の壁・覆土を掘込んで構築している。

埋土は、床面直上から検出面まで暗褐色土であるが、南西壁側では壁崩壊土を含むものがあり、カマド周辺ではカマド構築材である砂質粘土の混入する層が認められる。北東側では褐色土を斑状に混入する層が認められる。005号跡埋土との識別は上面では困難であるが、下方では005号跡埋土が褐色味を帯びており識別される。

遺物は、土師・須恵器・鉄製品・土製支脚・石がある。土師・須恵器はまとめて出土したものではなく、破片が住居跡内に散在して出土した。これらは層位的にも各層より出土しており、復元結果完形もしくは完形に近くなることはなかった。小形甕(1)は、接合した破片のうち一点は009号跡から出土したもので、一部の破片は貼床下より出土したものである。鉄製品は、北西コーナー近くで床面より若干浮いた状態で出土した。これらの遺物出土状況からみて、支脚・鉄製品を除き本跡に伴うか疑問であるが、時期的にはさほどどの隔たりはないものと思われる。ただ小形甕(1)は、本跡より少し古くなるものであろう。

本跡は南東側が未調査であるが、隅丸方形を呈するものと考えられる。その規模はN E—S W 3.54m (2.98m), N W—S E 2.97+ α m (2.76+ α m) を測る。

住居跡の掘込みは、各辺とも垂直に近いが、南西コーナーはやや緩やかな傾斜となる。また南東コーナーについては未調査ではあるが、北東辺の状況からして隅のかなり丸いものと思われる。

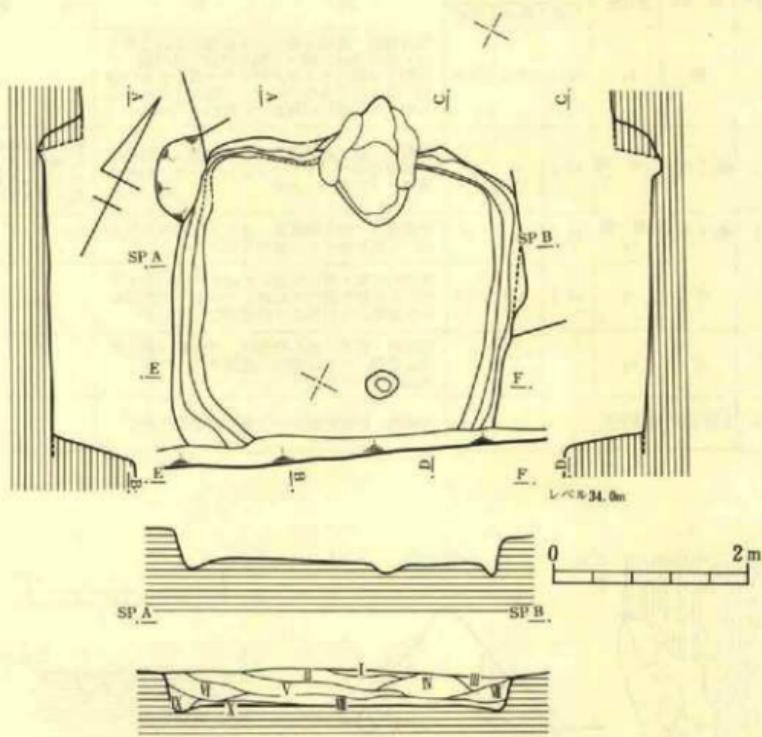
壁はローム面を壁とする部分は硬質だが、005号跡覆土を壁面としている部分は軟質であり覆土との差はない。壁の高さは、北西側で38~40cm・北東側で25~36cm・南西側で30~34cmを測る。

床面は、住居跡内中央から北西側あるいは東側にかけて005号跡覆土を掘込んで床としている。壁際及びカマド両側を除きほぼ全面にわたって堅緻であるが、細かな凹凸が著しい。壁溝はカマド部分を除く各壁下にめぐる。幅・深さともさほどではないが、幅33~13cm (15~3cm), 深さは3~10cmを測る。

ピットは南西寄りに1個検出された。長径34cm, 短径27cmを測るやや不整円形を呈し、深さ9cmである。この他には検出されなかった。

カマドは北壁中央部に位置し砂質粘土を中心材として構築している。煙道口より焚口先端まで120cm, 同袖先端まで90cm, 袖部最大幅100cm, 焚口幅60cmを計る。火床より煙道に近くなると煙道が急角度で立ち上り、段を持っている。カマドに使用する粘土は全体としてあまり良質なもの

のと言えず砂質粘土（黄色味のあるもの）に白色粘土を少量混入させてあるものである。

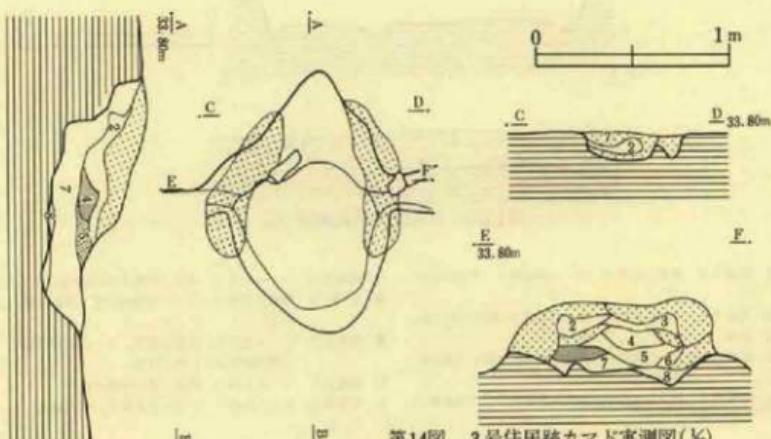


第13図 3号住居跡実測図(16)

- | | | | |
|----------|--------------------------|------------|-----------------------------------|
| I. 暗褐色土 | 燒粘土粒若干、ローム微粒若干（黒色味帯びる） | V. 暗褐色土 | ローム粒若干、燒粘土粒若干（黒色味帯びる） |
| II. 暗褐色土 | ローム微粒やや多、C粒若干（黒色味帯びる） | VI. 暗褐色土 | 燒粘土粒若干、ロームの微粒若干（黒色味帯びる） |
| III. 硫灰 | | VII. 暗褐色土 | ローム粒若干、燒粘土若干、ローム微粒少減（黒色味帯びる）やや硬質。 |
| IV. 暗褐色土 | ローム微粒若干、褐色土斑状に若干（黒色味帯びる） | VIII. 暗褐色土 | ローム土若干、軟弱（黒色味帯びる） |
| V. 暗褐色土 | 砂質粘土若干、ローム微粒若干（黒色味帯びる） | X. 暗褐色土 | ローム粒若干、ローム土若干、やや硬質。 |

3号住居跡(212-018-004A)出土遺物一覧

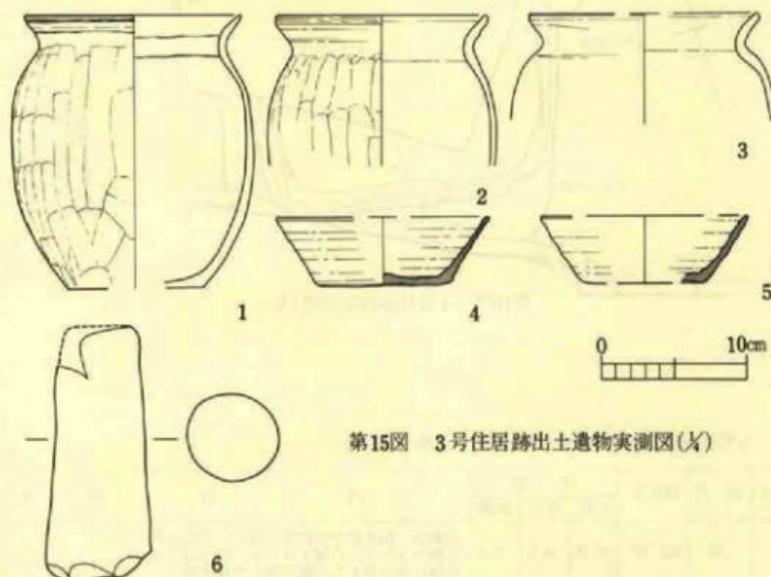
番号	器 形	遺存度	法 量			内 容	備 考
			口径	高さ	底径		
1	壺	½	14.5	18.5	9.5	暗茶褐色 黒はん及びスス付着みられる胎土良・焼成良好。胴へラ削り口縁・外内横ナデ内胴へラ削りナミガキ肩でやや丸みをおび胴以下はさほど丸みめだなく底部あたりでゆるやかにしほむ口唇直下に沈線が入る。	
2	壺(小型)	口縁一部 1割 分	14.5	×	×	暗褐色 胎土砂粒目立つ、焼成良スス付着あり胴縦線のへラケズリ+粗いヘラナデ口縁内外横ナデ内胴へラナデ	腹部に焼成後 の刺印「三」 が認められる。 意味不明
3	壺(小型)	口縁一部 ¼	14.5	×	×	暗茶褐色 胎土焼成良、外スス付着みられる胴へラ削り後ナデ口縁内外横ナデ	
4	环	½	14.5	4.5	9.5	部分的に灰・黒色に近く焼成やや弱い胎土中にロクロ整形底部外周静止へラ削り底部回転へラ底部から口唇まで直線的な形をなす	
5	环	½				明灰色 石英、長石粒含む、やや荒い胎土焼成は普通、ロクロ整形、底部外周へラ削り底部手持ちへラ削り	
6	土製支脚	ほぼ完形				赤褐色 粒質が強いへラ削りで面取り施す	



第14図 3号住居跡カマド実測図(3)

- 1. 黄褐色土 黄色がかった砂に粘土を中心に入れる部分的に火を受け赤變成している。
- 2. 黄褐色土 大半が赤變成している。
- 4. 黄褐色土 砂土がブロック状に入る。
- 5. 黄褐色土 ロームブロック及び焼成粘土を含む。多少灰っぽい土が入っている。
- 6. 黑褐色土 黒褐色の砂土を含みやや赤っぽい。
- 7. 黄褐色土 90%の層土に比べいくつ分明らしい土。大小さまざまのローム粒子及び焼成粘土粒子を多く含む。
- 8. 黑褐色土 3-10%程度のローム粒子含む。火穴、床成形につめてあるものか。

4号住居跡 (第16図 図版4・19) (212-018-004B)



第15図 3号住居跡出土遺物実測図(1/4)

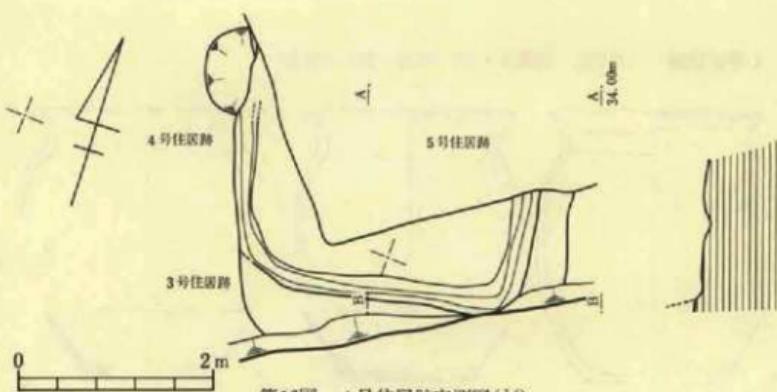
本跡は、3号住居跡貼床を剥がした段階で壁溝が検出され、遺構の存在が判明したものである。従って3号住居跡より古いものであるが、3号住居跡より一回り小形であり、住居跡方向も一致し、南西側壁溝は3号住居跡と共有していること等から、4号住居跡から3号住居跡への拡張と考えられるものである。

本跡のプランは、5号住居跡と重複した部分で検出できなかったため北側が不明であるが、検出された部分からすれば、隅丸方形を呈するものと思われる。規模はN E - S W 3.06 m (2.70 m), NW - S E 方向の長さは不明であるが、004-A号跡のそれを超えるものではないかと思われる。

床面は細かな凹凸が著しく荒れた状況を呈し、さほど堅緻ではない。壁溝は幅30~16cm (11~7cm)、深さ2~3cmを測る。

柱穴は検出されなかった。

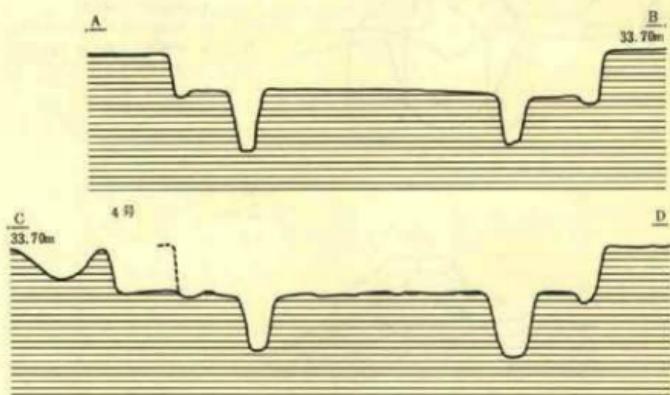
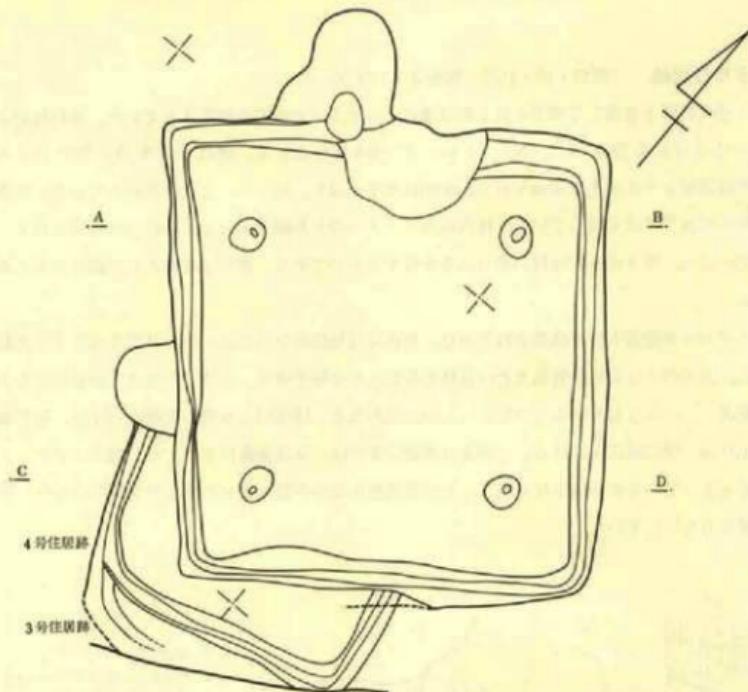
カマドは構築されていたものと思われるが、その状況については不明である。



第16図 4号住居跡実測図(4)

5号住居跡(212-018-005)出土遺物一覧

番号	器形	遺存度	法量			内 容	備 考
			口径	高さ	底部		
1	杯	完 形	10.0	4.5	3.0	赤褐色 胎土中小砂粒少し含む、焼成良好へラケグリナデ、口縁ヨコナデ、内ヘラミガキ全体に丸みをもち口縁で少し外反する	
2	杯	%	12.0	4.0	2.0	赤褐色 胎土中に小砂粒含む焼成良好へラケグリ粗い 内へラミガキ施される	
3	蓋	完 形	14.5	4.0	10.0	青灰色 胎土中に小砂粒含む良好焼成良、ロクロ整形	
4	杯	完 形	14.5	3.5	10.0	青灰色 胎土中に石英粒等含みあまり良くなき焼成もやや甘いロクロ整形、全体にイビツ口唇でやや外反する。	
5	甕	%	16.0	×	×	茶褐色 外面黒はんあり、胎土中に小砂粒多く入り焼成やや甘い。外へラケグリ、口縁ヨコナデ、内ヘラミガキ	
6	高 杯	完 形	15.0	8.5	8.5	赤褐色 胎土中に小砂粒等多く含む焼成もあり良好とは言えない。外へラケグリ、内よく磨かれてる。全体に難な作りを削りと磨きで整形してある。	
7	瓶	%	21.0	27.5	11.0	赤褐色 黒はん及び外面ススの付着みられる胎土 やや粗い 焼成は良。外へラケグリ、口縁内外ヨコナデ 内へラケグリ、ヘラナデしまりのない体部、底部で急にしまる。	
8	甕	%	23.5	34.0	8.0	暗褐色 小砂粒、金雲母等含みられる。焼成良好下半を中心につき全体にみられる。外 脊上半へラケグリナデ、下半あらいへラケグリナデヘラミガキ 内へラミガキ ナデ口縁ヨコナデ、肩を最大幅として口縫外反口唇直立する。	



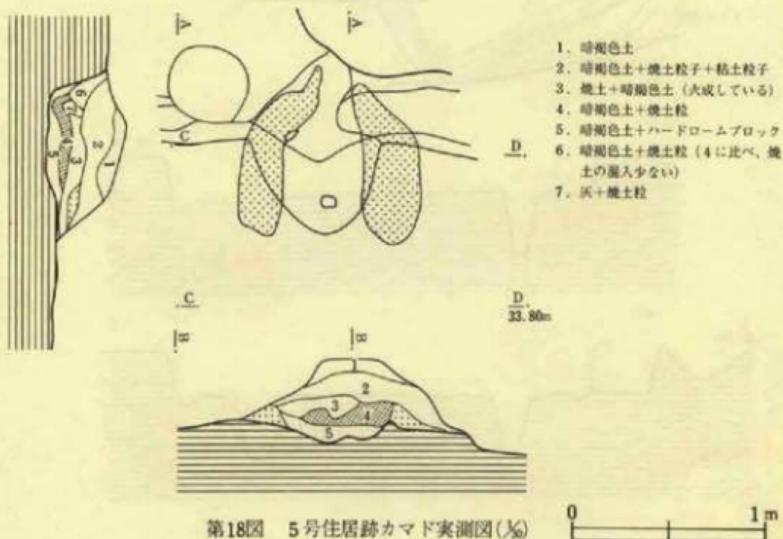
第17図 5号住居跡実測図(%)

0 2m

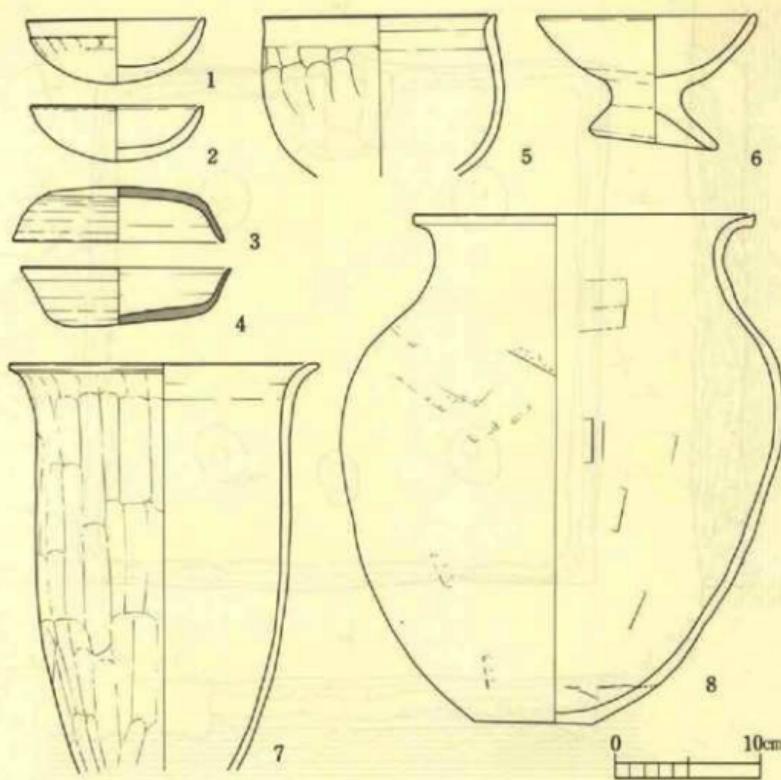
5号住居跡 (第17・18・19図 図版4・19・20)

4号住居跡と重複して検出され北側は溝によってカマド部分を擾乱されていた。本住居跡のプランはほぼ正方形を示し、N-S4.5m, E-W4.5mを計る。壁はほぼ垂直に掘り込まれており確認面より床面まで50cmを計る。床面は水平を保ち、貼り床、よく踏み固めている。周溝は幅30~50cmではば全周している。柱穴は各コーナーの対角線上から4本の柱穴が確認されている。径30~50cm、深さ50~70cm程の掘り込みを有するものである。遺物は全体として破片が多くみられた。

カマドは北側壁中央に構築されており、現状では袖部及び落ち込んだ天井部を残してくずれていた。基本的には黄色砂質粘土と白色粘土を混入させ袖を構築。天井部等は黄色砂質粘土を中心に使用し、かなりもろいものでなかったかと思われる。煙道口より焚口先端は100cm、袖部最大幅100cm; 焚口幅50cmを計る。火床より煙道口までは、ほぼ垂直に立ち上る。焼土はブロック状にまとまっている部分は少なくほとんどが暗褐色土をやや混入させた様なやや落ちつかない感じの残り方を示していた。



第18図 5号住居跡カマド実測図(%)

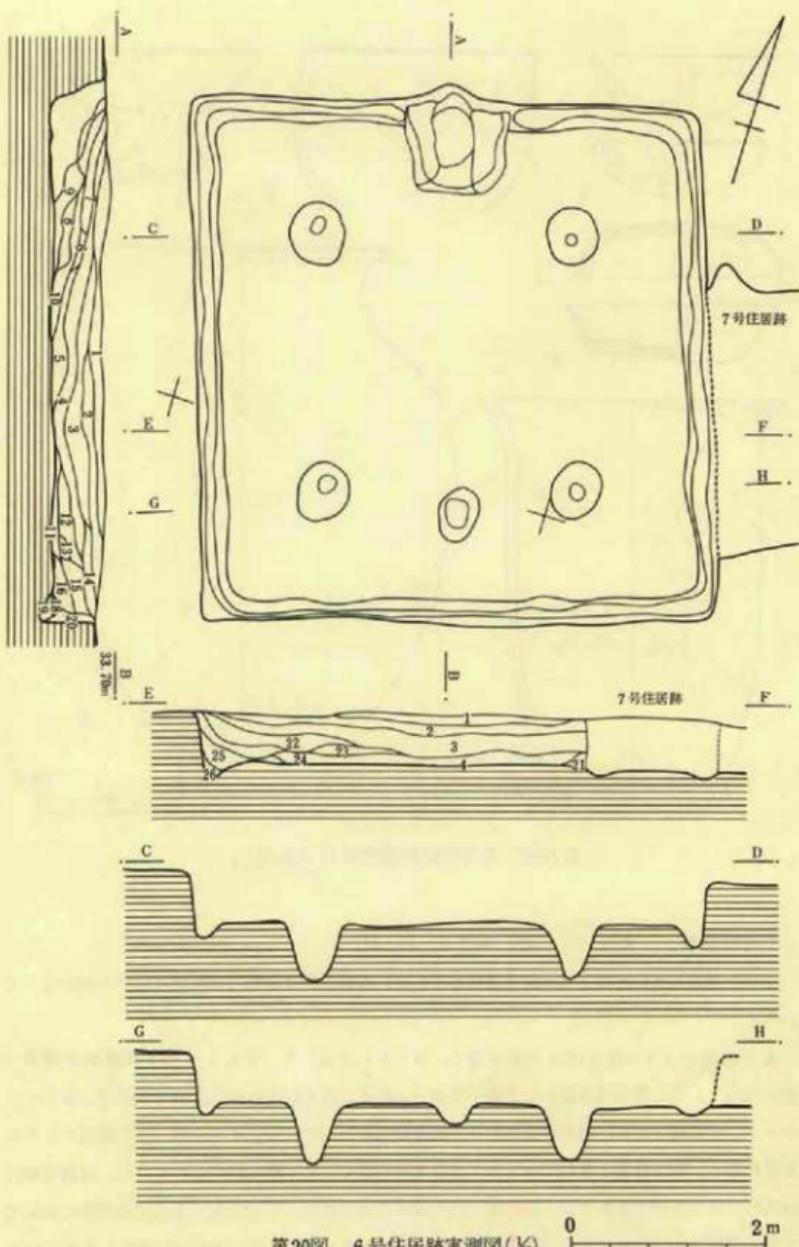


第19図 5号住居跡出土遺物実測図(×)

6号住居跡 (第20・21・22図 図版5・20・21)

7号と重複し8号とは1m程度と近接している。この三軒は主軸方向もほぼ近いものとなっている。

本住居跡のプランはほぼ正方形に近く、N-S 5.3 m, E-W 5.2 mと本遺跡検出遺構中最大規模である。覆土は全体として微少なローム粒子の混入がみられる。特に南側壁はややオーバーハング気味であり、周溝付近においては大粒のロームブロックもみられ、壁の剥落であるかと思われる。壁は外面より約60cmを計りほぼ水平に近く、よく踏み固められていた。周溝は幅10cm内外ではば全周するがカマド部分掘り込み両端で途切れる。このことは本住居跡構築においてカマド位置を十分考慮した上で周溝が設けられたとも考えられよう。主柱穴と考えられるものは



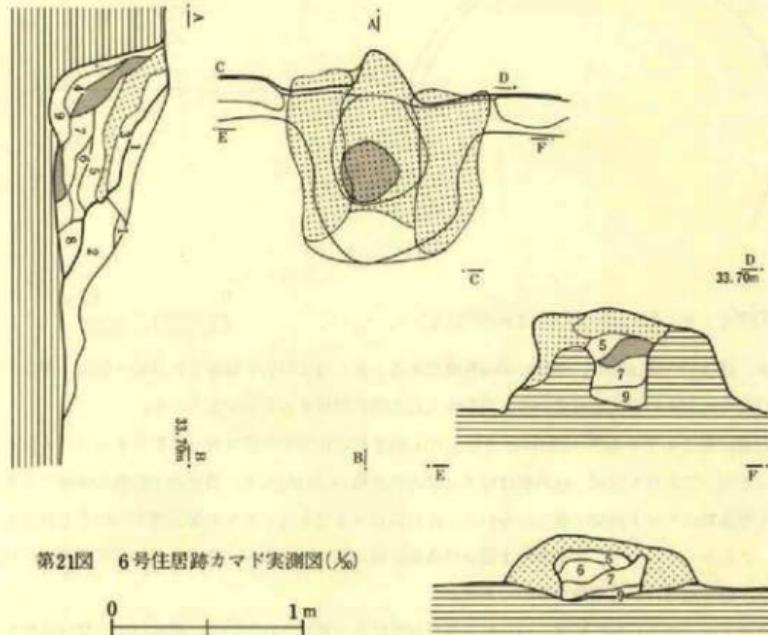
第20図 6号住居跡実測図(%)

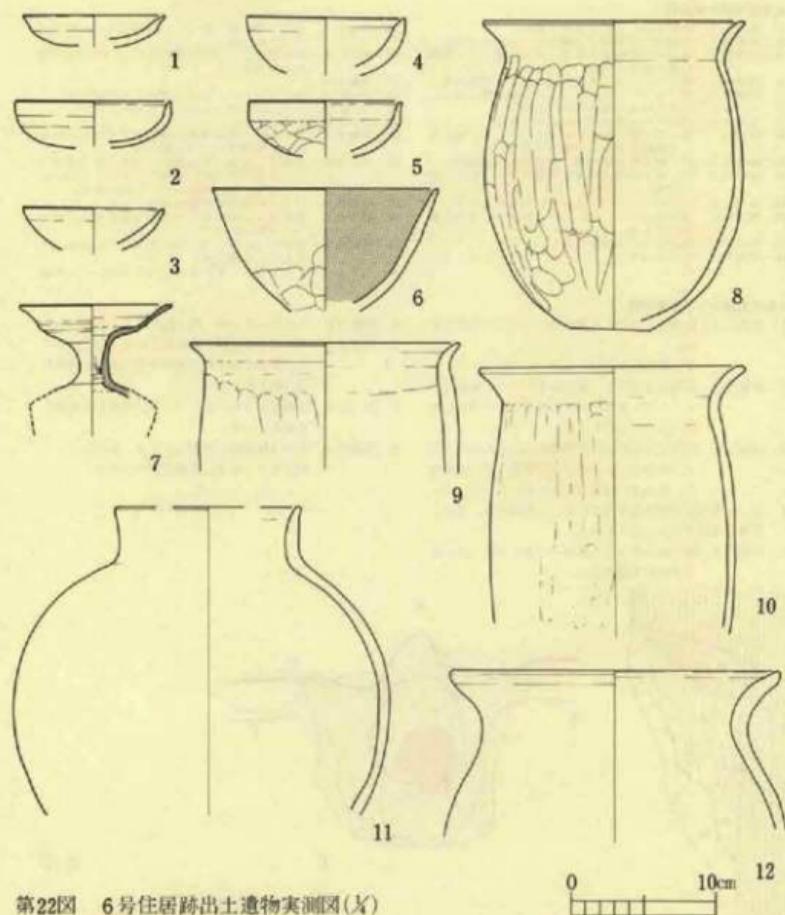
6号住居跡十層説明

1. 黒色土 微細なローム粒子を多く含む。
2. 喀褐色土 色調はかなり暗く、細かいローム粒子を含む。
3. 喀褐色土 2よりやや明るくなる。ローム粒(5~10%程度)を多く含む。
4. 黒褐色土 2よりくらい。1cm程度のローム粒を含む。
5. 黑褐色土 サラサラしたやわらかい土、混入物少ない。
6. 5にカマド流出の粘土と焼土の混入した層。
7. 5にカマド流出の粘土と焼土の混入した土。
8. 喀褐色土 6・7の種類の人物あまりみられない層。1~2%程度のローム粒子を含む。
9. 喀褐色土 砂、粘土等の焼出層、茶色のローム粒子(10~30%)みられる。
10. 国色土 大粒のローム粒子を大量に含む土上の層。
11. 黑褐色土 磚中等の焼出層、大粒のローム粒子のくずれた様なのが入る。
12. 黑褐色土 黑褐色土でローム粒子多く含む。
13. 喀褐色土 1~2cmぐらいいのロームブロック入る。3に近い。
14. 喀褐色土 2よりくらいのロームブロック入る。3に近い。
15. 喀褐色土 目立つ様な混入物なし。微細なローム粒子バラバラみえる。
16. 黒色土 まっ黒な土。ソフト状の土(ローム)の流れ込みみられる。
17. 喀褐色土 16にソフトロームのくずれこんだ様な土。
18. 黑褐色土 17にカマドのロームのくずれ込み。
19. 喀褐色土 フチ側のロームのくずれ込み。
20. ローム焼却層のむきか。
21. 喀褐色土 3に近いが2の黑色の強い層で分かれている。
22. 3に黒色土が混入した土。3全体バサバサした土だが(ローム混入のため)あまりバサついてはいない。5%~1cm程度のローム粒である。
23. 喀褐色土 黒み暗く、混入するローム少量ながら大粒のハード粒子入る。
24. 喀褐色土 黒み暗く、27に比べ混入するローム粒少しおりである。5%程度。
25. 喀褐色土 26に近いが2の黑色の強い層で分かれている。
26. ロームブロック一塊のくずれか、ソフト及びハードの流れごみ。

6号住居跡カマド土層説明

1. 喀褐色土 住居土上面の土に黄色粘土ブロックを混入する。
2. 黄色粘土ブロック
3. 喀褐色土 住居土上面の土に黄色粘土ブロックを混入する。ただし1などの混入度ではなくブロック状に入りこんでも小粒。
4. 喀褐色土 住居土上面の土に黄色粘土はほとんどみられず、微細なローム粒子及び砂っぽい土を含む。白っぽい砂及び粘土を多く含む。
5. 喀褐色土 焼土粒子を多量に含みやや赤みがかったり。多少砂粘土等を含む。
6. 喀褐色土 やや白っぽく砂、焼土粒子を多く含む。
7. 喀褐色土 やや白っぽく砂、焼土粒子を多く含む。6に比べ微細な焼土の混入は少ないが5~10%程度の焼土粒を含む。
8. 褐色土 砂粘土を含む。またこの砂、粘土とも次第に赤変している。
9. 黑褐色土 上面は焼土化し赤変している。小粒のローム粒子もみられる。底面成形のためか。





第22図 6号住居跡出土遺物実測図(1/4)

0 10cm 12

4本、径は50~60cm程度、深さは60cm程度である。または住居中軸線上に径40×60cm、深さ20cm程度のビットが検出されている。南側出入口施設に関するものであろうか。

周溝内側は $4.7 \times 4.7 = 22.03\text{ m}^2$ で柱穴中心部を結ぶ住居中央部はW-E約2.6m N-S約2.6mと均一であり 6.76 m^2 、柱外側は12.6m線内側面積 19.36 m^2 となる。遺物出土状態と併せてみると大型遺物はカマド両側に多くみられる。これは言うまでもなくカマドが調理等の中心となると言うことからであろう。床密着の土器は柱外側区域に多くみられる(11)と思われる柱内側はわりと小破片及び浮いた遺物が多めである。

カマドは北壁中央部に位置し白色粘土及び砂質粘土で構築されている。煙道口より焚口先端ま

で90cm、同袖先端まで110cm、袖部最大幅110cm、焚口幅40cmを計る。火床には径30cmで厚さ5cm程度の焼土の形成がみられる。火床より煙道近くに向い、やや掘りくぼめ煙道が急速度で立ち上っている。

また断面中にある焼土様のものは天井部及び煙道部の砂質粘土が火成したものであり、剥落しているものと思われる。また袖部は住居跡壁より掘り込み時点で袖付のための根とも言えるものを構築し、それに統けて粘土をはり付けて構築している。

6号住居跡(212-018-007) 出土遺物一覧

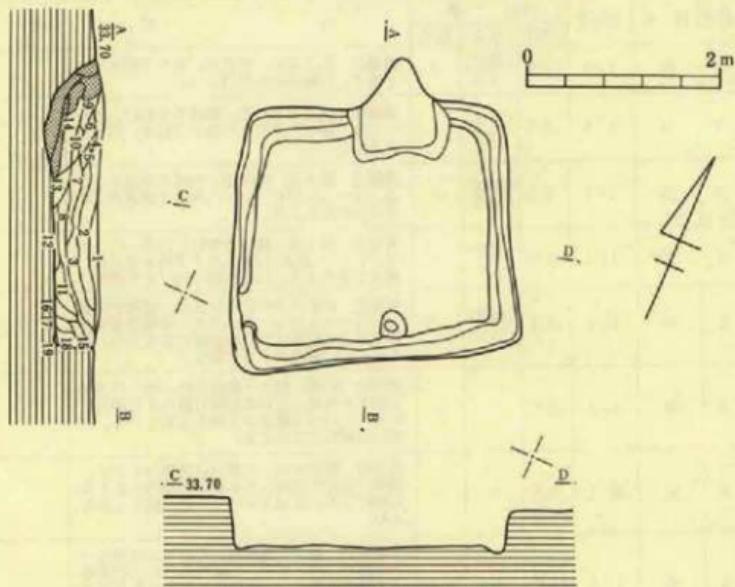
番号	器形	遺存度	法量			内 容	備考
			口径	高さ	底径		
1	壺	1/3	9.5 (現存) 2.0	×		暗褐色 胎土荒め、焼成良。外へラ削り+ナデ施す。口縁部の外反目立つ。	
2	壺	1/3	10.5 (現存) 3.0	×		黄褐色 胎土かなり良、焼成やや甘い。外へラ削り削り目立たない様ナデ施す。内一磨き入る。	
3	壺	1/4	9.5 (現存) 3.0	×		黄褐色 胎土良、焼成良、内面やや黒みがある。外へラ削り+ナデ、内へラ磨き体部ゆるやかに立ち上る。	
4	杯	1/4	11.0 (現存) 4.0	×		黄褐色 胎土良、焼成やや甘い。外へラ削り、内へラ磨き、口縁ヨコナデゆるやかに口縁まで立ち上る。口縁内側の内ソキ特徴的。	
5	壺	1/4	10.5 (現存) 3.5	×		黄褐色 胎土中や小砂粒含む。焼成やや甘い。外へラ削り、内一ナデ、体部ゆるやかに立ち上り肩部より口縁垂直に立ち上り、破をもつ。口縁部ヨコナデ施す。	
6	鉢	1/3	15.5	×	×	黄褐色 内黒、胎土・焼成良好。外へラ削り後ナデを施しているが削り痕あまり消えていない。内へラ磨きよく加えられている。体部は直線的に立ち上る。	
7	甕	肩上	10.5	×	×	青灰色、袖がかかった部分は黒褐色を示す。焼成は良好で素面クロマ形口唇内外に1条、外側に2条の沈線入り。首一肩は弱くしづり込む。	
8	甕	1/2	18.0	21.0	5.5	暗茶褐色 胎土・焼成良、外面スス付着外へラ削り、内一ナデ、口縁内外ヨコナデ体部下半は丸み強く、上半はあまり丸みをおびずやや直線的。口縁は弧状に外反する。全体に作りはていねいである。	
9	瓶	口縁3/4	18.5	×	×	暗褐色 胎土・焼成良。外へラ削り+ナデ施す。内タテのへラ削りか、口縁内外ヨコナデ、外面にスス付着みられる。	
10	甕	1/3	18.5	×	×	黄褐色 胎土・焼成良。外へラ削り、内へラミガキ。口縁内外ヨコナデ体部直線的に胴の張りない。口縁は肩部でわずかに弧状になり外反する。	
11	甕	1/3	13.0	×	×	黄褐色 黒はん多少ある。胎土中に多少白色砂粒等含む。焼成良。現在器面内外共に荒れ気味である。外へラ削りか、内ナデか、口縁内外ヨコナデ施す。また口唇部内外はやや摩滅している。体部極めて丸み強く口縁は肩より垂直に立ち上り、口唇わずかに外反する。	
12	甕	口縁1/3	22.5	×	×	黄褐色 胎土中に石英粒等金雲母少量含む焼成やや甘い感じある。外へラ削り+ナデ内へラナデ、口縁内外ヨコナデ。肩部にあまり張りなく口縁部弧状に外反して立ち上る。	

7号住居跡 (第23・24図、図版6) (212-018-008)

6号跡と重複し6号を切っている。主軸方向は近似する。(新)7号—6号(旧)

覆土は6号に比べるとローム粒子の混入度は少なく色調もやや暗い感がある。

遺物は覆土中に多く、床面上には多少みられる程度であった。住居跡のプランはほぼ方形を示すもののカマドの位置はやや東側に偏る。N-S約2.5m E-W2.9mを計る。壁はほぼ垂直に立ち上り、掘り込みは確認面より50cm程の割りと深い掘り込みであり、重複する007号跡と床面は近似していた。床はハードローム中に掘り込まれれば水平を保っている。周溝は20~30cmの幅で



第23図 7号住居跡実測図(%)

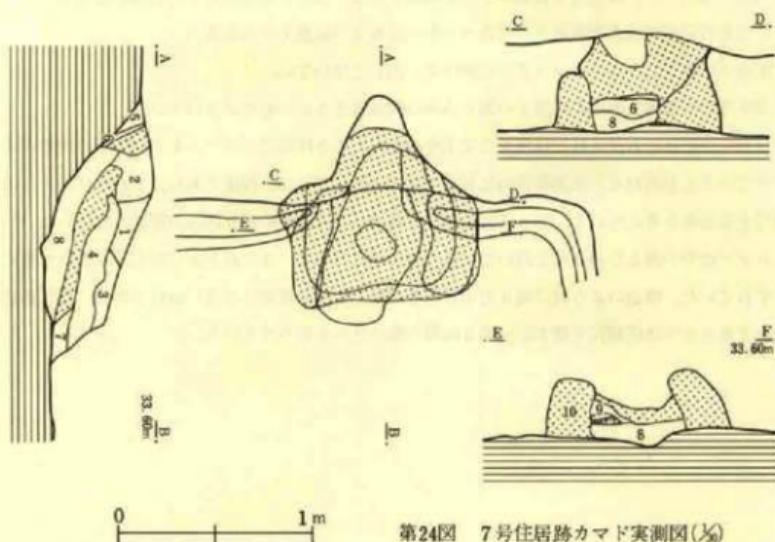
- | | | | |
|---------|---------------------------------|------------------|-----------------------------------|
| 1. 黒褐色土 | 小粒のローム粒子、炭化物を含む。007号跡共々上面にかぶる。 | 11. 黒褐色土 | 他に含まれるローム粒子等の混入度。 |
| 2. 暗褐色土 | 小粒のローム粒子、焼土少々を含む。1に比べ色調は明るい。 | 12. 黄褐色土 | ロームブロックの混入みられる。ほぼ床直上の層。 |
| 3. 黑褐色土 | 小粒のローム粒子を含む。上層に比べ混入度少ない。2より暗い。 | 13. ハードロームブロック | |
| 4. 茶褐色土 | カマドからか砂が入る。 | 14. 白褐色土 | 粘土、砂を多く含む。天井部のくずれたものか。 |
| 5. 茶褐色土 | カマドからか黒みが強く砂粘土含む。 | 15. 黒色土 | あまりローム粒子等の混入みられない。12~15までかなり黒色強い。 |
| 6. 茶褐色土 | カマド下からか角に比べ赤みが強く砂粘土の混入度多い。 | 16. ロームブロック(ソフト) | に黒色の強い土混入(古い層?) |
| 7. 黑褐色土 | ローム粒子含む。3より粒子大、もやった感のある暗褐色土も含む。 | 17. 黒色土 | 微細なローム粒子多く含んでいる。 |
| 8. 茶褐色土 | ブロック状に入る茶色のもやった様な土入る。 | 18. 黒色土 | ローム粒子含む。17より粒子大きなもの多い。 |
| 9. 黄褐色土 | ソフトロームを含む覆土。 | 19. ロームブロック | 壁等によるくずれ込みか。 |
| 10. 褐色土 | 砂、粘土を含む。 | | |

深さは床より 5 cm 前後の掘り込みで、ほぼ全周するものの南西部において途切れており、またカマド構築部においては周溝をその両端で止めているという、いわば計画的な掘り込みを行っていたものと言える。ピットは 1 本南側部分において一ヵ所検出されたが、住居跡が本来持つ柱穴は存在しなかった。

カマドは先に述べた様に全体として西に偏って設けられている。一辺約 2.5 m であるから住居跡コーナー（上場）で計るならば（カマド幅を除く） 1 : 2 （約 50 cm 対 100 cm）となっている。

カマド自体は上からつぶれた様になってはいるが、粘土などの流出はさほど多くはなかった。最大横幅約 1 m、煙道口より焚口まで 1 m、袖最長 70 cm を測る。袖は黄褐色粘土と白色砂質粘土で構成されている。火床は 70 × 50 cm の長円形で浅く掘りくぼめてあるが、焼土の堆積はあまり多く形成されていなかった。

遺物としては胴部の小破片が出土し図示し得る様な時期を確定し得る様なものはみることが出来なかった。



第24図 7号住居跡カマド実測図(%)

1. 黄褐色土 ソフトロームを含む覆土
2. 暗褐色土+粘土
3. 褐色土 砂、粘土を含む。
4. 褐色土 ハードロームブロックを含み砂粘土入る。
5. 暗褐色土 やや赤みかかった砂質土。
6. 赤変化した砂+粘土あり。

7. ハードロームブロック
8. 黒色土+粘土(少々)+焼土粒
9. 褐色土 粘土、砂を中心とし、火を受けた様に赤変している。
10. 褐色土 粘土、砂を中心とし、火を受けた様に赤変しているが、9ほど赤変度少ない。

8号住居跡（第25・26・27図、図版8・21）

谷に面する9・10号より一列後方にその位置をとる。遺構検出面は第2層（暗褐色土）下位であった。

覆土はローム粒子を混入する暗褐色土を基本とする。II層は黒みが目立つ。I・II・IV層は各々ローム粒子の混入度の差異により分離し得た。

遺物は全体としてさほど多くは出土していない。カマド左側及びカマド対面壁下にやや集中が目立っていた。

住居跡の平面プランは一辺約4.2m程のほぼ方形を示す。遺構確認面より床面までは約50cmを計る。柱穴は4本検出された。壁はほぼ垂直の立ち上りを示す。

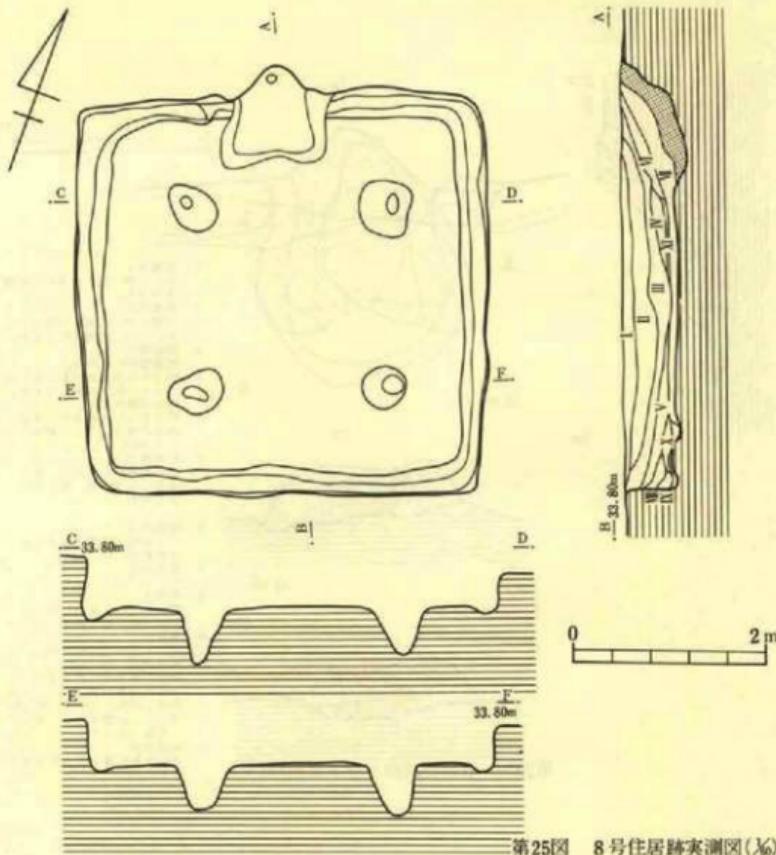
床面はよく踏み固められた貼り床であり、ほぼ水平に保たれていた。貼り床をはがし掘り方を調査したところ一辺が約2.5m程度の浅い溝状の掘り込みが検出された。これは方形に纏きはないものの一応、一周するものである。本住居跡の柱穴以外、貼り床下には柱穴様のものは検出されていないため、はたして拡張かどうか不明である。ただしこの柱穴を再利用したものであるならばその可能性は大であろう。（各コーナーは各々の延長上にあたる。）

床面下の掘り込みにはカマド等の痕跡は見い出してはいない。

009号の周溝最底部面に床面下の掘り込みは数cmほどさらに掘り込まれている。

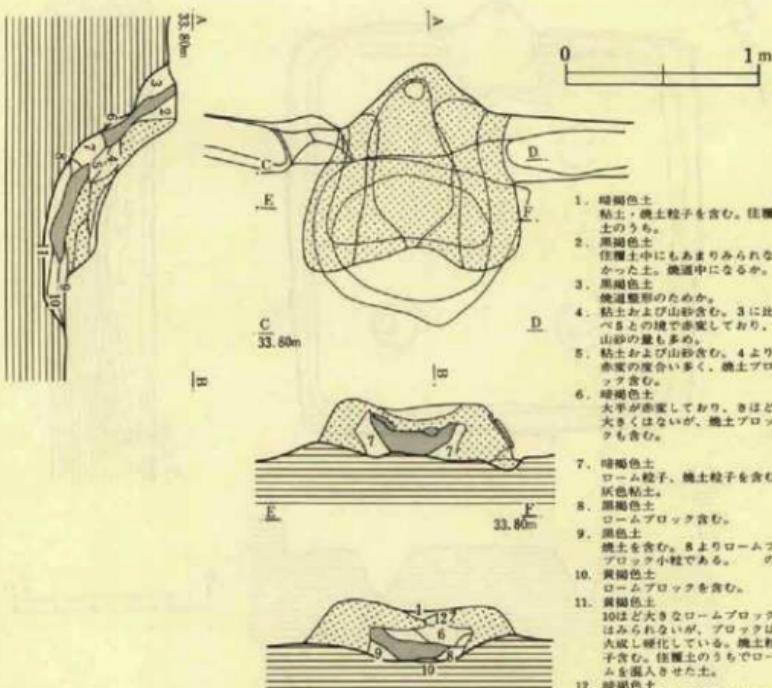
なお本住居跡における柱穴は柱を立て土を満たしたあと柱周辺にロームをつめて張り床を完成させていると思われる。床面確認時において柱穴は直径10~15cm程度であり、これは柱の太さに相当するものと考えられる。貼り床除去後は、径30~40cm程度の掘り込みが確認されている。

カマドはやや西よりの北側を向いている。検出時において、ほぼ直上より押しつぶされた様にくずれていた。煙道口より焚口端まで120cm最大幅110cm、煙道口は径10cm程である。袖部長約70cmである火床は径縦70×横110cmで5cm程の掘り込みをもうけている。



第25図 8号住居跡実測図(ア)

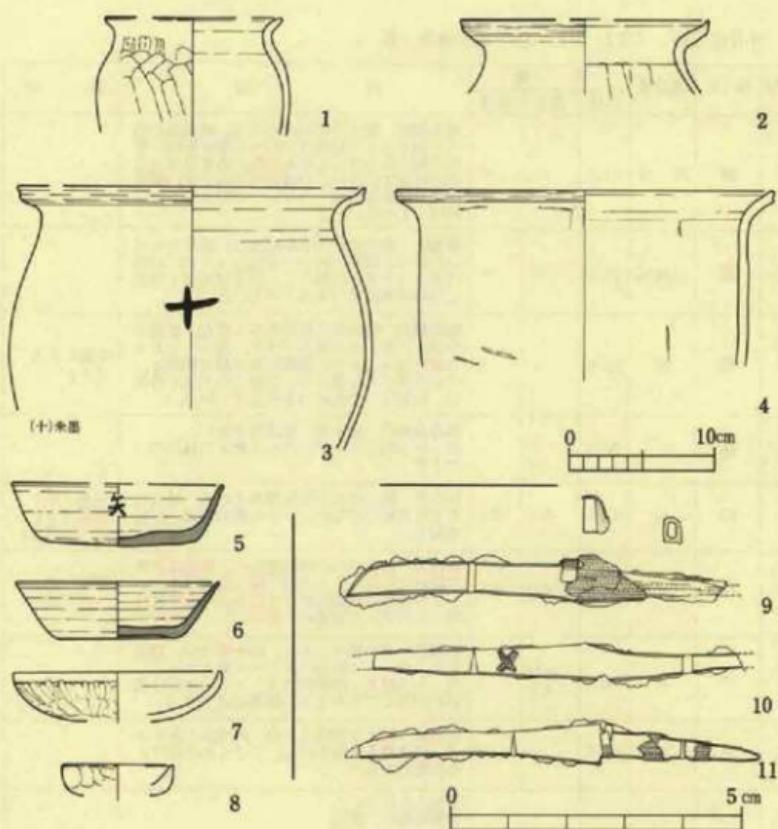
- | | | | |
|-----------|----------------------------------|------------|------------------------------|
| I. 灰褐色土 | かわくと黄色値くなる細いローム粒子多量に含む。バサバサしている。 | V. 灰褐色土 | ソフトローム状のものが流れ込んでいる。 |
| II. 黒褐色土 | I. に比べかなり黒っぽく粒子も荒い。サラサラした感じがのこる。 | VI. 灰褐色土 | ロームの粒入る。やや暗い感がある。 |
| III. 灰褐色土 | ロームブロック含む。サラサラした感じがのこる。 | VII. 灰褐色土 | X. 同じ。 |
| IV. 灰褐色土 | ローム粒子大粒の混入や黒っぽい感もある(他に比べ)。 | VIII. 灰褐色土 | ローム粒子及び焼土の細かい粒子含む。 |
| V. 灰褐色土 | ローム粒子、焼土の細かい粒子含む。 | IX. 灰褐色土 | ローム粒子及び粘土の小さなたまり及び焼土粒子がみられる。 |
| VI. 灰褐色土 | ローム粒子及び粘土の小さなたまり及び焼土粒子がみられる。 | X. 灰褐色土 | ローム粒子焼土粒子及び黄褐色の粘土が混入している。 |



第26図 8号住居跡カマド実測図(1)

8号住居跡 (212-018-009) 出土遺物一覧

番号	器 形	遺存度	法 量			内 容	備 考
			口径	高さ	底径		
1	甌	部 分	12.0	×	×	暗茶褐色。胎土中に小砂粒入る。焼成良好。脣部ヘラ削り+ナデ。脣部タテのヘラ削りを細い整形で施を作ろうとしたものか。あまりはつきりとは出ていない。口縁内外ヨコナデ、脣部の張りはあまり強くはない。口縁はやや強く外反している。	
2	甌	口縁分	17.0	×	×	茶褐色。胎土中にやや砂粒含む。焼成やや甘い。外ヘラ削り。内ヘラ削り+ナデ。口縁内外ヨコナデ、口縁「く」の字状に強く外反し口唇は垂直につまみ上げている。	
3	甌	%	23.5	×	×	暗茶褐色。胎土中に砂粒等多く含む。焼成やや甘い。外ヘラ削り+ナデ。内ヘラミガキ。口縁内外ヨコナデ、脣部中央に最大幅来る。やや全体に丸み感じる。口縁はやや強く外反し、口唇は、垂直につまみ上げている。	朱墨による「十」
4	甌		26.0	×	×	淡赤黄褐色。胎土良。焼成やや甘い。外ヘラ削り+ナデ。内ヘラ磨き口縁内外ヨコナデ	
5	坏	½	14.5	4.0	10.0	灰白色。胎土中に小砂粒等含まれる。焼成はあまり良好ではない。ロクロ整形底部、回転系切り。	朱墨「矢」 底部「×」 (ヘラ記号)
6	坏	%	14.0	4.0	8.5	灰白色。胎土中に小砂粒等含む。焼成はあまり良好ではない。5と同じ様な焼成である。ロクロ整形。底部回転ヘラ切り。外面に模化物(スヌ状)の付着みられる。	底部「◎」 (ヘラ記号)
7	坏	¼	14.5 (現存) 3.5	×		赤褐色。やや黒はんあり。胎土密で良。焼成も良。外ヘラ削りのあとヘラ磨き入る。内ヘラ磨き。口縁内外ヨコナデ、体部は強状に内湾して立ち上る口唇部は直立する。	
8	坏	%	7.5	×	×	黒褐色。胎土・焼成とも良。内外面ともにナデ、内は磨きも施される。てずくね土器であると思われる。	
9	刀 子					刃がみられない。 木質部残存 床面	
10	刀 子					闇不明。 刃身にセンイ質(?) 残るか、床面	
11	刀 子					刃身はかなり使い込まれているか。木質部小量残存闇(?) 床面	

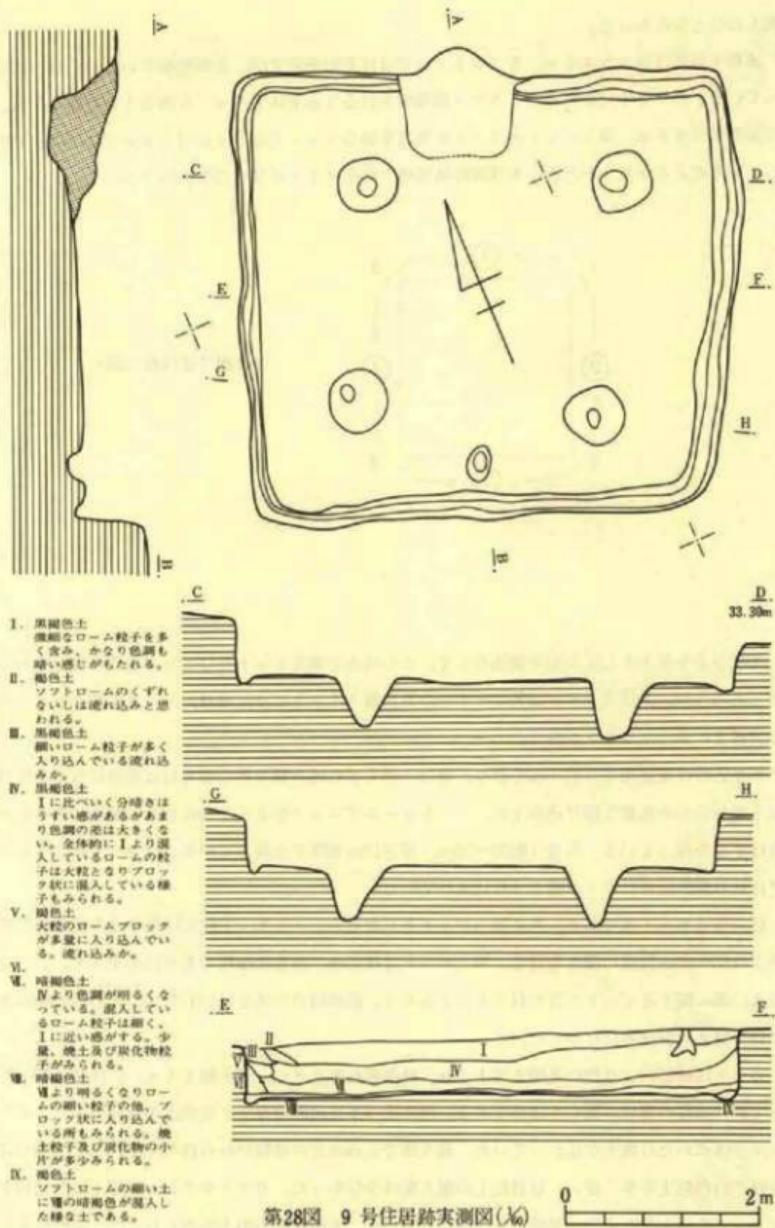


第27図 8号住居跡出土遺物実測図(×・△)

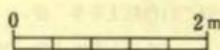
9号住居跡 (第28・29・30図 図版9・21)

谷へ向い本遺跡における最も谷部に近い位置に存在する。谷に面し遺構列という見方をとれば、9—10—11—四という形で谷の33mコンタ周辺をとり回っている。一部を後出のM—1に切られていたが、全体として掘り込みも深く住居跡としては良好な残存状況を示す。埋土は全体としてローム粒子及びロームブロック状（さほど大きくない）の土が暗褐色土中に入り込む。ややバサバサした感じの土であった。住居によっては埋土中位部分に黒色の強い土が入り込むものもみられる。場合によっては近時期のものが分かるであろうか。

遺物は覆土中に散漫に検出され、カマド周辺にやや集中する程度であった。また接合される遺

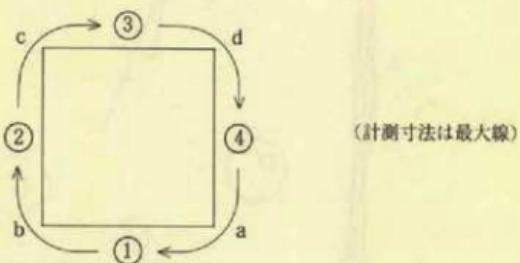


第28図 9号住居跡実測図(1/10)



物もわりと少なかった。

造構平面形はN-S 4.5 m, E-W 5.2 mではば方形を示すが、東側壁面がいく分いびつになっている。カマド中央を基点としカマド構築壁を計るなら全体で5 m, 左側2.3 m右側2.7 m, 対面壁部は4.6 m, 第5ピットとカマド中央部を通るラインでは2.3 m対2.3 mではば均一である。見方によるがカマド対面が本住居跡構築時の基本ラインになるのであろうか。



①及び②を基本とし③の面を繋張りして、この時点で第5ピット及びカマド位置が想定されるのであろうか。主柱穴ラインは各コーナーの対角線ライン上にはば乗り、b-dを結ぶラインの2分線上にa-cラインが合う。

掘り込みは確認面より約70cmを計り、壁は一部くずれ込み痕を考えてほぼ垂直になる。床は荒ら掘りのやや乱雑な掘り込み上に、ハードロームブロックを2~3 cmにわたり全面にはり込みほぼ水平を保っている。周溝は幅20~30cm, 深さ10cm程度で全周している。カマド火床部においては貼り床部同様にカマド幅でうめ込まれていた。

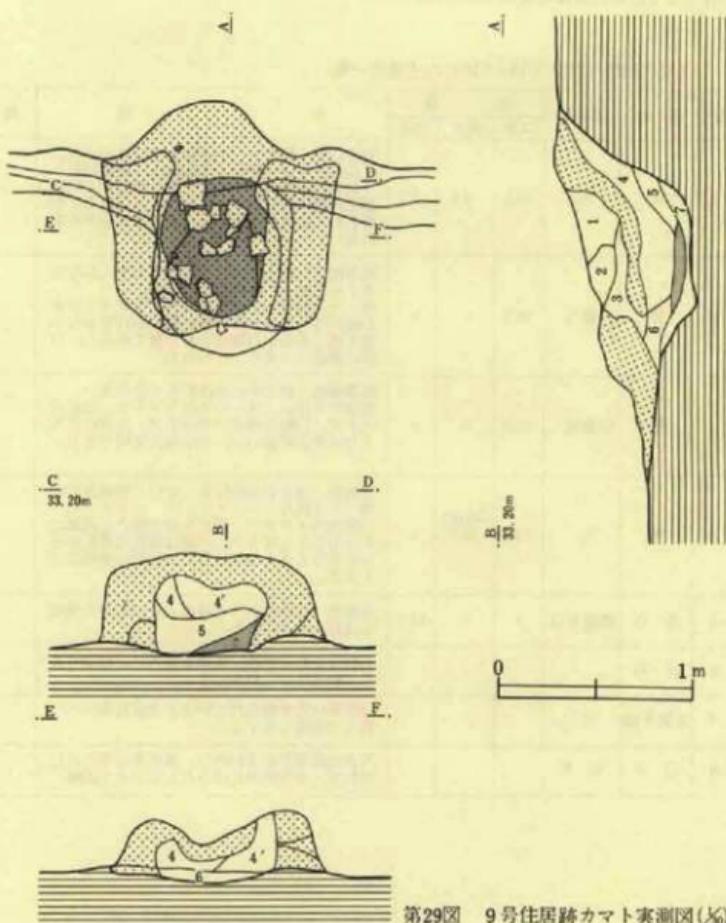
柱穴は4本+1本である。先に第5ピットとしたものが+1本。主柱穴は掘り込み径60cm程度、床より50~60cm程度の深さを計る。第5ピットは径30cm、深さ20cm程であり円形を示す。いわゆる入口部に関するピットと言われるものであろう。最終時点で床をはがしたが、その他の施設及び建て替えの痕跡等はなかった。

カマドは煙道口より焚口先端まで1.2 m, 袖部最長部0.8 m, 最大幅1.1 m, 火床部は90×70 cmで約10cm程の皿状に掘りくぼめてある。他に比べ本住居跡のカマドは焼土の形成も多く、また火床全体にわたり焼土が広がっていた。最大部で5 cmほどの堆積がみられた。全体として残りは良好で白色粘土を多く使い、砂質粘土の混入度は少なかった。カマドセクションのIは白色粘土にロームを混入した土で、基部に多く使われている。大型破片の出土がみられたが、完形復元の

できるまではいたらないものであった。

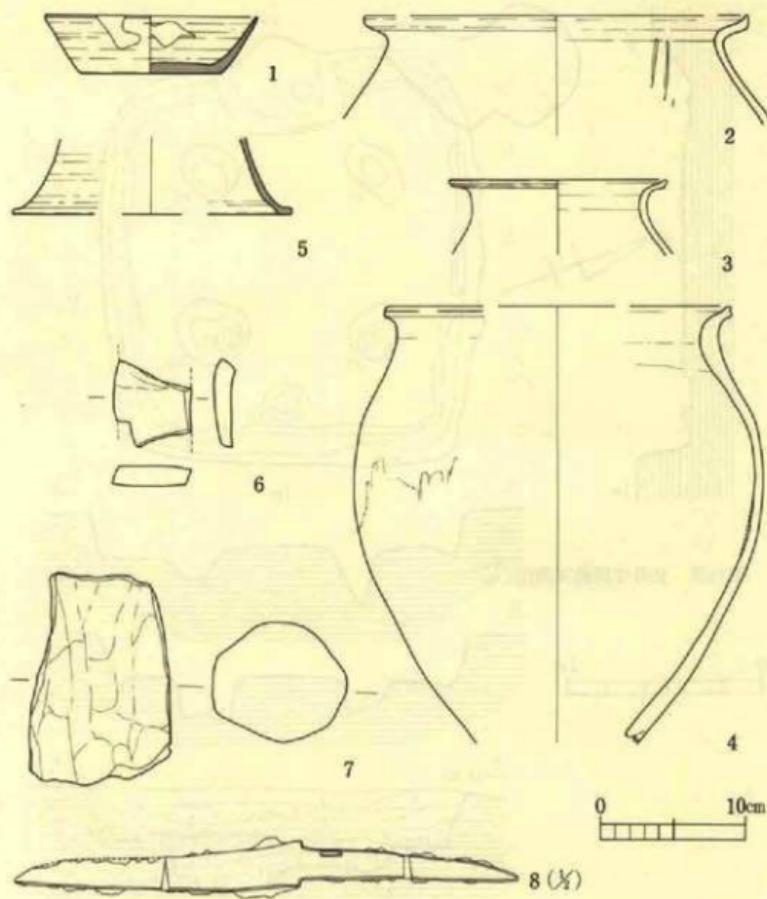
9号住居跡(212-018-010)出土遺物一覧

番号	器 形	遺存度	法 量			内 容	備 考
			口径	高さ	底径		
1	壺	½	14.5	4.0	9.5	青灰白色。胎土中の小砂粒や目立つ。焼成は良好。ロクロ整形(左回転)。底部回転へラ切り。内面多少ミガキを施しているものか。器面内側に部分的にススの付着みられる灯明皿としての使用を考えることも出来るかも知れない。	
2	甕	口縁½	26.5	×	×	暗茶褐色。胎土中に石英砂粒等の混入かなり多くみられる。焼成もやや甘い。外一ヘラ削り+ナデ、内一ヘラナデ+ミガキ。口縁内外ヨコナデ、肩一弱にかけてかなり強る感じある。口縁はかなり強く外反し、口唇は垂直につまみ上げられる。	
3	甕	口縁½	15.0	×	×	暗茶褐色。胎土中に小砂粒多く含み荒い。焼成やや甘い。外一ヘラ削り+ナデ、口縁内外ナデ。口縁の外反やや強めで、口唇の立ち上りは垂直に近いが、やや外反気味である。	
4	甕	½	24.0 (現存) 29.5	×		淡褐色。胎土中に砂粒多く含む。焼成良好。外一ヘラ削り+ヘラナデ、内一ヘラナデ。口縁内外ヨコナデ。肩部を最大幅とし底部はかなり小さくなるか。口縁は弧状に外反するがあまり大きくなはない。口唇は垂直に立ち上る。	
5	高 壺	踏部々分	×	×	19.0	青灰色。胎土はかなり精選されたものか焼成も良好。ロクロ整形	
6	砥 石					石材はやわらかめ、淡黄茶褐色。石材切り取りで断面はひし形を示す。	
7	土製支脚	½				砂質多い土で焼かれている。全面に荒いヘラ削りで面取りをする。	
8	刀 子	完 形				刀身先端部刃こぼれあり、茎の背は平らに打たれて、やや両側にはみだしている 両開	



第29図 9号住居跡カマト実測図(%)

1. 暗褐色土 粘土の混入度は少ないがローム粒子、礁土粒子の混入多くみられる。
2. 黄灰白色粘土 黄灰白色粘土、ローム粒子及び暗褐色土の混入が多くみられ、くずれたものが他のものと混じり合った感じ。
3. 暗褐色土 2よりは粘土の比は少ないがかなり混入しておりまた砂質土の混入も多い。
4. 暗褐色土 とは言うが礁土の方の混入度多く、赤色を示す。
また砂質土を含む。(山筋あり)
5. 暗褐色土 ローム粒子、砂質土を含むが礁土は入りこんでいない。4との境は、火を受けて赤黒気味である。(礁土ブロック混入)
6. 暗褐色土 5とほぼ同様、ロームの大きさは5より小さい。
7. 暗褐色土 ロームブロック(火成により硬化)及び礁土を含む。暗赤褐色土で光される。

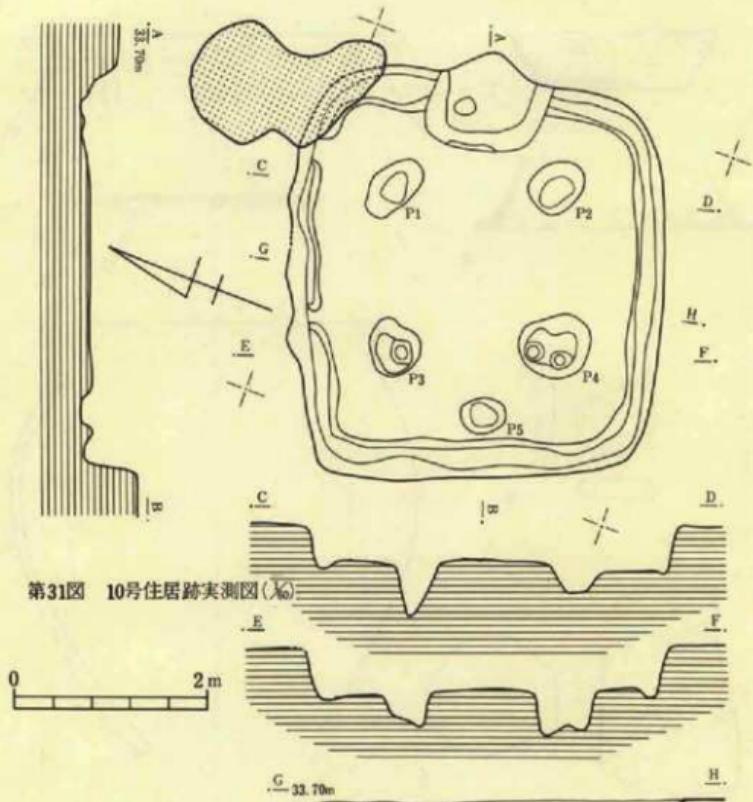


第30図 9号住居跡出土遺物実測図(×)

10号住居跡 (第31・32・33・34図 図版10・11・22)

8・9号跡と3~4mの距離をとり、4~10号跡までの一群の内では北端に位置をとる。一部植林による根の搅乱もみられ特にカマド北側コーナー部分は床面まで搅乱を受けていた。覆土は暗褐色土に小粒のローム粒子の混入が目立つ。また壁直下周溝下には壁よりのくずれ込みと思われるロームブロックがみられた。

遺物の出土はさほど多くはみられず、カマド周辺及び住居中央部において多少集中がみられ、



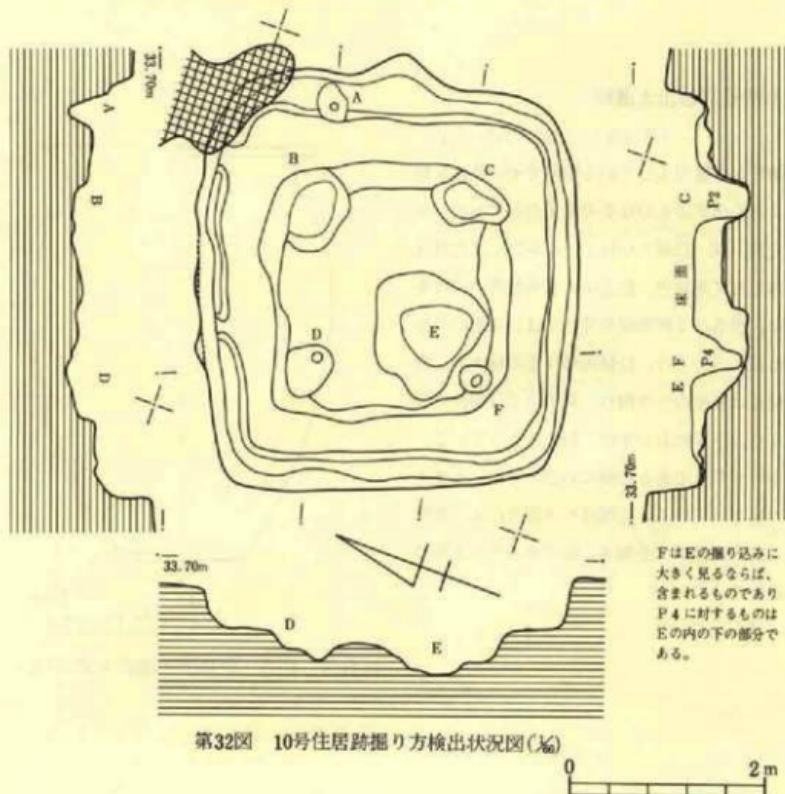
第31図 10号住居跡実測図(16)

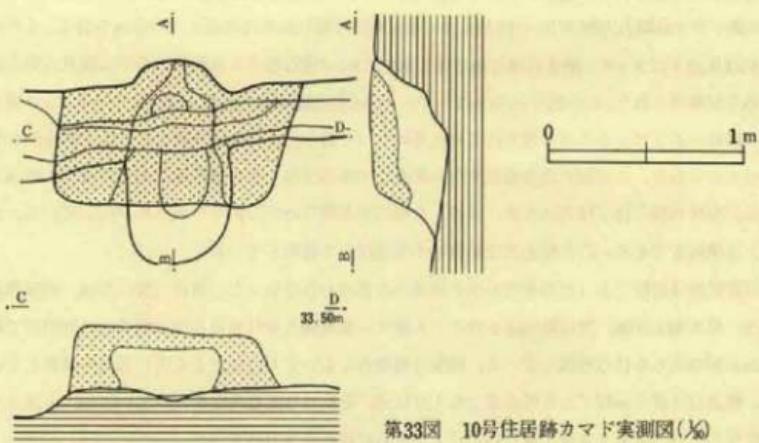
1. 暗褐色土 全体的に細かいローム粒子が多く混入。I~酉の内で色調がハバハバとくらべ感じる。
2. Iに比べて、P1~P5とするローム粒子大きい。ただし、3はほど大きくはない。
3. 暗褐色土 細かいローム粒子の他いく分大きめの粒子の混入がみられる。微量ながら鐵土鉄もみられる。やや暗る色調。
4. 暗褐色土 他に比べ色調明るく黒色はシベ。
5. 暗褐色土 細かいローム粒子は少なく、いく分大きめのローム粒子が目立ってくる。
6. 黑褐色土 ローム粒子の混入例に比べ少ない。
7. 暗褐色土 3に近い色調は、3よりくらべ感がある。
8. 暗褐色土 潤かしいローム粒子は少なく、いく分大きめのローム粒子が目立ってくる。
9. 黑色土 というよりロームブロックに暗褐色土が混入。
10. ロームブロックを中心とする暗褐色土。
11. P1
12. リフトのくずれたものか。
13. 深褐色土に大粒のロームブロック混入。
14. 黑色土 ハードブロック少々入る。これをかためて同層の内壁をつくる。
15. 暗褐色土 これもブロック状に入る。
16. ハードロームブロック+暗褐色土、これでフタ状にうめこんでいる。最上部がはり唐となる。
17. 6の埋めた所。
18. 黑褐色土+ハードブロック (混入度少ない)
19. 18と同じ。
20. 黑褐色土+ハードブロック少々入る。
21. ソフトロームの様なやわらかいロームブロックを混入する。暗褐色土、ロームブロック、暗褐色土。
22. ハードロームブロックのみの込みか。
23. 混入するローム粒子、極めて多くなり細かくなる。
24. 黑褐色土+大粒のハードブロック。

他は流れ込み様に浮いた遺物が多くみられた。

平面プランは隅丸方形WE-NS約4.2×4mを計り掘り込みは床面まで約40cmを計る。また本住居跡床面下にスッポリ納まる様な10号住居跡にプランの重なる2.5m四方の小型の隅丸方形の掘り込みが検出された。この掘り込みは各コーナー-10号住居跡の柱穴位置と適合している。この掘り込みはロームブロックにより埋め込まれた様になっており、これを貼り床としてよく踏みかためているのである。この掘り込み最底部から床面までは約50cm、また遺構確認面までは約120cmである。本住居跡に伴う柱穴は4本、前述した様に下部掘り込みの各コーナーに対応している。カマドは東向きである。白色粘土及び砂質粘土を使用して構築している。

残存状態は良好であったが遺物の出土はほとんどみられなかった。煙道-焚口70cm、袖部長さ60cm、最大幅120cm、焚口幅50cmを計る。火床は一部周溝と重なり長さ60cm幅50cmの長円形で約5cmの掘り込みを作り形成している。袖部は周溝内においても白色粘土を用い基部を構築していた。煙道口は径5cm程であり煙道部立ち上りは、80°とかなり急な角度をとっているが、火床より一度立ち上り一段テラス状に掘り込んだ上でさらに煙道をつづけている。



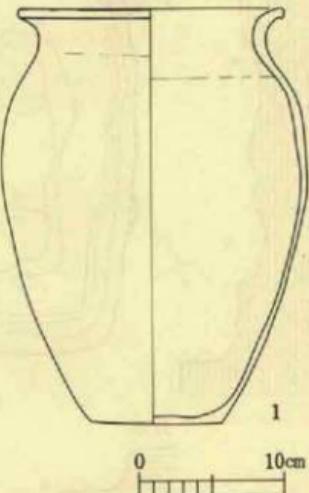


第33図 10号住居跡カマド実測図(%)

10号住居跡出土遺物

(第34図) (212-018-011)

破片が少量出土している程度でその全体を知ることの出来るものはこの土器のみである。ほぼ完形、胴一口縁にかけて一部を欠く。色調は全体として茶褐色。胎土中に石英粒等小砂粒を含む。焼成は2次焼成を受けてはいるものの良好と言えるだろう。口縁内外は主に横ナデ、肩部付近は縦位のヘラ削り、胴中位では横位に近く、下半においては、斜位となっている。なおヘラ削りのあと全面にわたって粗いヘラナデが施されている。底部はヘラ削りにより整形する。内面はナデを施す。安定感のある土器である。



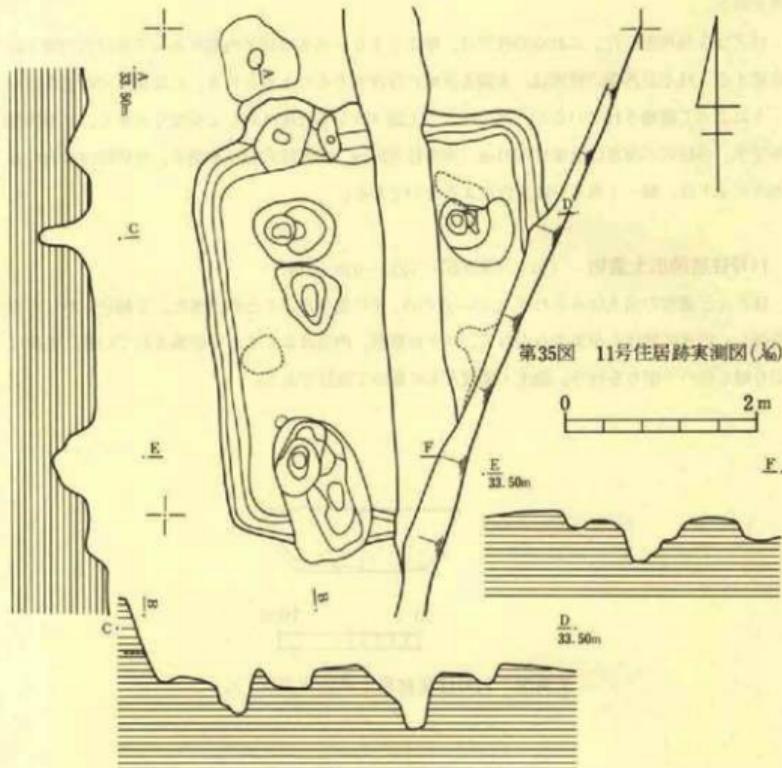
第34図 10号住居跡出土遺物実測図(1)

11号住居跡 (第35・36図 図版12・22)

本跡は調査区北側に位置し、2B00グリッドを中心にして検出されたものである。この付近は深耕によって耕作土層下でローム面が検出され、遺構プランの確認は容易であったが、遺構内や西側を溝状遺構M-5号跡が縦断し、東側を溝M-1の延長と考えられるピット列が縦断している。また、遺構の北東側部分は調査区域外に延びており、未調査である。

本遺構内の埋土を観察するべく十字に土手を残して掘進めたが、検出面より5cm前後で床面に達し、床面近くまで耕作土が入り込んでいたため、固化しなかった。埋土は暗褐色土で所々に焼土が混入するものであり、M-5、M-1より古い時期のものである。

遺物は極めて少量の土師器破片が出土したにすぎず、これとてまとまって出土したものではな



く散在的に出土したものである。

本跡は隅がやや丸味をもち、南北方向にやや長い方形プランを呈す。規模は略N-S 4.16m (3.51m), 略E-W 3.71m (3.09m) を測るやや小形の住居跡である。

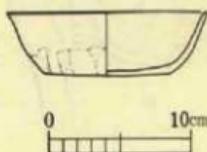
本跡の掘込みは、短辺側が他の遺構によって破壊されており不明な部分が多いが、全体に緩やかな凹凸が認められる。検出面が床面近くであったため壁の高さは低く、北側で9cm, 東側で5~7cm, 南側で12~15cm, 西側で25cm前後を測る。壁の掘込みはほぼ垂直で、壁面は比較的硬質である。

床面は全体に細かな凹凸が著しく、荒れた状態を呈しやや軟弱である。また、住居跡内中央部分がやや高く、壁側が低くなる。床面上には、大小4カ所の焼土の堆積が認められる。この中で北西側の焼土中には砂質粘土が若干混入している。炭化材・炭化物等は床面上あるいは埋土中にも検出されなかった。壁溝は未調査部分を除き全周する。幅32~25cm (8~10cm), 深さ6~8cm前後を測る。

柱穴は3個検出した。これらの柱穴は、壁より1.0~0.8mほど内側にあってほぼ対角線上に位置する。残る北西側の柱穴は、未調査区域に存在するものと思われる。北東側柱穴の上部はM-1によって破壊されているが、他の柱穴の上面プランも底径に対してかなり大きく、不整円形を呈す。各柱穴の深さは北東柱穴41cm, 南東柱穴53cm, 南西柱穴44cmを測る。住居跡内における他のピットは、M-1あるいは耕作によるものである。

11号住居跡出土遺物 (1/2) (第36図) (212-018-014)

ほとんど遺物の出土はみられず、この一点のみ、その姿をみることが出来た。赤褐色、かなり赤み強く、内外に黒はんが多少みられる。ロクロ整形、内面はよくミガキが施されている。底部は切り離し後ヘラ削りを行う。胎土・焼成とともに極めて良好である。



第36図 11号住居跡出土遺物実測図 (1/2)

12号住居跡 (第37・38・39図 図版12・13)

本跡は調査区北側東寄りに位置し、1B 82・83・92・93グリッドにかけて検出されたものである。表土層下で焼土を含む褐色土あるいは黒色土層が認められることにより遺構の存在が窺えたが、褐色土あるいは黒色土層面ではプラン確認はできなかった。これはこの付近の地形が東側に向って緩やかに傾斜し、83・93近くで急激に落込んでいることによるものであった。遺構の東側は擾乱が著しく明らかにできなかった部分もある。

遺構内埋土は、主として暗褐色土、黒褐色土層の堆積が認められるが、上部では褐色土の堆積も認められ、焼土が混入する。また、壁近くでは壁の崩落土あるいは黒色土が堆積している。土層の堆積は殆どが西側からの流入によることが窺える。

遺物は埋土上層より多く出土したが、いずれも西側からの流入によるものと思われる。遺構に伴うものとしては、カマド東側より出土した土師器・壺形土器のみにすぎない。この他埋土下部より土師器小破片が若干出土したが、器形を窺い得るものはなかった。

本跡は、南・北壁の一部と東壁が失われており不明であるが、遺存する部分からすれば南北方向に主軸をもつ、方形あるいはやや南北方向に長い方形となる。N-S 4.56m (3.95m), E-W 3.72 + α m (3.32 + α m) を測る。

遺構の掘込みは、上端・下端ラインとも緩やかな凹凸がみられるが、ほぼ直線的である。壁はほぼ垂直であるが、一部ではオーバーハングする所も認められる。壁の高さは西壁北側で83cm、南側で95cm前後を測り、東側に向って急激に傾斜している。壁面はやや軟質である。

床面は、壁周辺を除きほぼ全面にわたって比較的堅緻である。床は、住居跡中央付近がやや低くかつ全体に東側に向って低くなっている。壁溝は北・西・南壁直下に巡るが、北壁東側部分では擾乱が著しく不明、南壁側では南西コーナーより約3.3m東寄りの地点で切れている。東壁側では壁溝の痕跡を検出できなかった。壁溝幅は40~20cm (24~5cm)、深さ6~11cmを測る。

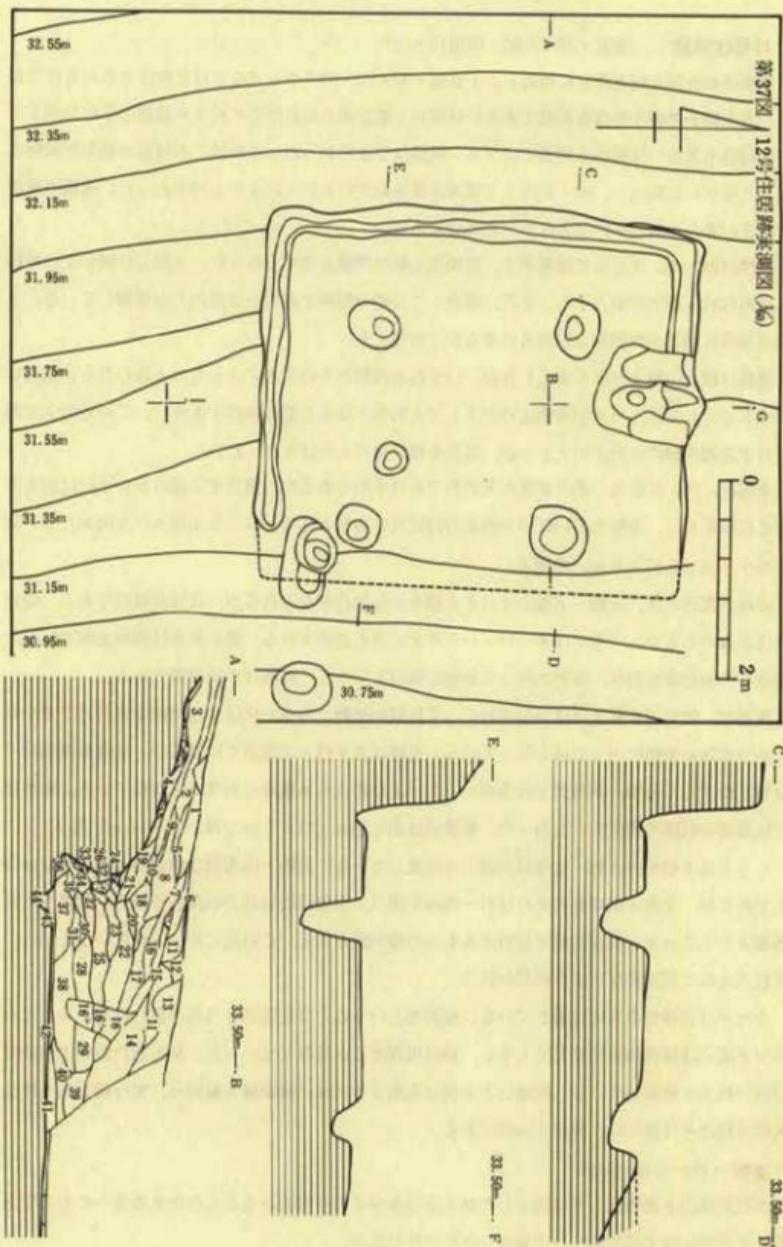
ピットは4個検出され、ほぼ対角線上に位置している。北西・南西側は深さ63・64cmとはほぼ同じであるが、北東・南東側のそれは31・29cmを測り、西側の約1/2ほどの深さである。位置的には各壁より1.2~3m前後内側に位置するもので規則的と言え、この他にピットがないことから、主柱穴とみて差支えないようと思われる。

カマドは北側壁中央に位置している。傾斜地ということで住居跡と当初予想し得なかつたためカマド周辺は抜根時に削平してしまい、袖付根程度しか残存しなかった。袖を黄白砂粘土一砂質の強い粘土で構築している。煙道口より焚口先端まで80cm、袖部最大幅90cm、焚口幅40cmを計る。火床の掘込みは径90cm、深さ5cm程である。

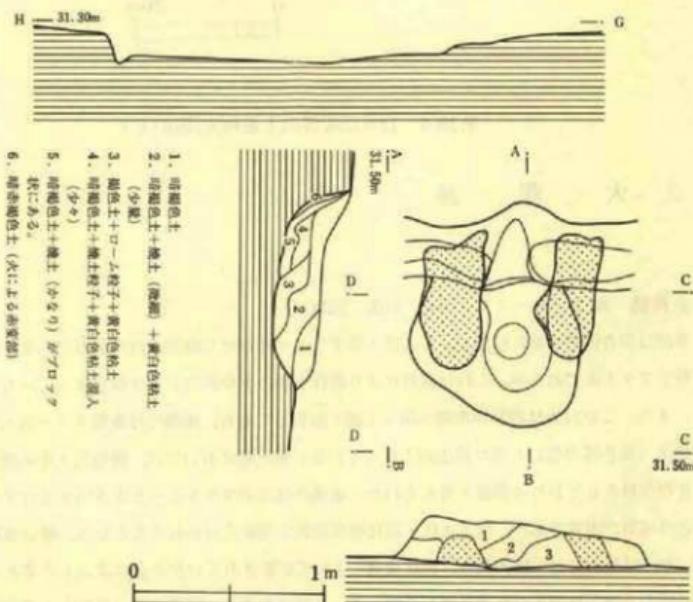
遺物 (212-018-015)

本住居跡出土遺物としては図示した壺1点のみがその全容をみるとことの出来る唯一のものである。その他には土器の細片が少量みられただけである。

第37回 12号住区断面測量図 (6)

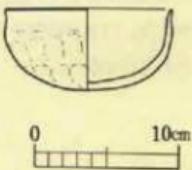


色調は暗茶褐色。内面は黒色処理されている。外面はヘラケズリのあとナデを施している。内面は磨きを施す。胎土はやや良、白色小砂粒を少量含む。焼成もさほど良いとは言えないが内外面ともに仕上げが良好のため目だたない。



第38図 12号住居跡カマド実測図(%)

1. 暗褐色土 硅土若干。
2. 黒褐色土 黒色味強い。
3. 暗褐色土
4. 暗褐色土 ローム土多混、黄色味帯る。
5. 暗褐色土 焼土多く混入。
6. 暗褐色土 烧土若干混入。
7. 暗褐色土 硅土若干、やや顔色味帯る。硬質土のブロック若干あり。
8. 黑褐色土 やや顔色味帯る。
9. 黑褐色土 硅土若干混入。
10. 黑褐色土 9より褐色土混入度多い。
11. 暗褐色土 (暗褐色土表層)と黒褐色土の混合)塊土が若干含まれる。
12. 暗褐色土 (表土Ⅱ)
13. 暗褐色土 (表土層Ⅰ)現地地形土。
14. 暗褐色土 (表土Ⅲ)やや硬質。
15. 暗褐色土 ローム土若干混入。
16. 混合褐色土 硅土が所々に少量混入、やや粘性あり。
17. 混合褐色土 硅土やや多く混入、やや粘性あり。
18. 褐色土 硅土粒子若干混入。
19. 暗褐色土 黒褐色土が少額混入。
20. 黑褐色土
21. 黑褐色土 ローム土少混 黄色味帯る。
22. 黑褐色土
23. 黑褐色土
24. 暗褐色土
25. 黑褐色土
26. 黑褐色土 ローム土多混。
27. 黑褐色土 ローム土若干、ローム塊粒少混。
28. 黑褐色土
29. 黑褐色土
30. 黑褐色土 ローム微粒や多混。
31. 黑褐色土 ローム微粒若干。
32. 黑褐色土 黄色味。
33. 暗褐色土 ローム土若干。
34. 暗褐色土 ローム土多混。
35. 暗褐色土 ローム土少混。
36. 暗褐色土 ローム土少混。
37. 暗褐色土 ローム土が断続的に混入。
38. 暗褐色土 28より顔色味強い。
39. 暗褐色土 (表土Ⅳ)ロームブロック若干含む、やや硬質。
40. 暗褐色土 硅土若干。
41. 暗褐色土 ローム土若干、砂質粘土若干。
42. 黑褐色土 ローム土、ローム粒、斑状若干。
43. 黑褐色土 ローム土少混。
44. 暗褐色土 ローム土や多混。



第39図 12号住居跡出土遺物実測図(ノ)

2. 火葬跡

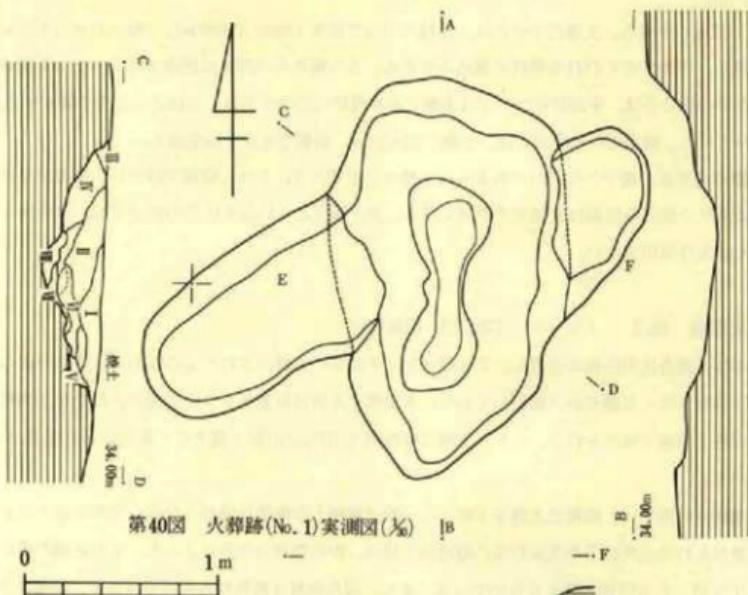
火葬跡 No. 1 (はー1) (第40、41図 図版14)

本跡は調査区南西側に位置し、3 A55・65グリッドにかけて検出されたものである。検出面は新期テフラ上面であるが、これは深耕により耕作土層の下が新期テフラ層となっているためである。また、この付近は地形が南側へ向って緩く傾斜しており、南側では新期テフラ層もなく、暗褐色土（褐色味の強い）層が検出面となっている。検出時においては、暗褐色土中に焼土・灰・炭化物が散在しており火葬墓と考えられた。遺構のはば中央をN E-S W方向に走行する溝状遺構との識別が困難であり、焼土と灰・炭化物が南北で明瞭に分かれることから二跡の重複と見做したが、結果的には一跡であり、溝状遺構によって切断されていたことによるものであった。

遺構内の埋土は図示した通りであるが、I・II層は本跡とは関連せず、耕作土・溝状遺構の埋土である。焼土層は遺構底面よりやや浮いているが、IV・V層中にも焼土は混入しており、全体として南から東側へかけて堆積する。同様に骨の集中部分も底面よりやや浮いているが、VI・VII・VIII・X層中にも骨片あるいは骨粉が含まれている。炭化物についても同様であり、VI-X層中に認められる。北側の炭化物層は、底面に向って傾斜している。灰は焼土層周辺に多いが層をなさず、混在する状態を呈する。

遺物としては、炭化物・骨片・古銭・鉄釘がある。炭化物はその殆んどがワラ状のものであって、木は少なくしかも小片である。炭化木は集中して出土することはなく遺構内に散在しており、小枝状のものが多い。板状のものは認められなかった。ワラ状のものは、北側から西側にかけての周辺部に多く見出せ、炭化木が散在しながらもやや内側に見出せる点と対称的である。骨片は、土壤中央部分に集中するが、いずれも小破片で粉状となったものも多い。古銭・釘はいずれも骨の集中部分から出土しており、古銭は熱のため融けている。

本跡は、南北方向に長軸をもつ不整規円形を呈し、N-S 2.07m (1.78m), E-W 約1.30m



第40図 火葬跡(No. 1)実測図(%)

火葬跡(No. 1)

I. 暗褐色土 やや砂質。A側に焼土層が少しある。B側には若干の灰が含まれる。若干の炭化物粒、ローム塊を含む。

II. 暗褐色土 I層より若干黄色味を帯びる。II層よりに骨片が少しある。I層より炭化物粒、炭化物を少しある。

III. 暗褐色土 I層より黄色味が強い。少しある。

IV. 暗褐色土 I層より骨片が少しある。

V. 暗褐色土 焼土が多量に含まれ、若干の灰が混入する。軟弱。

VI. 暗褐色土 I層より色味は暗い、骨集中的部分となりA側は、灰と焼土(少量)の混合層となりA側も灰と灰が多く、この層は、灰、骨と少量の焼土層に暗褐色土が侵入した層と見なされる。

VII. 暗褐色土 骨片(少量)炭化物及び粉状のもの、灰が含まれる。

VIII. 暗褐色土 灰面も少しつつ炭化物及び粉状のものが多く含まれ。その他の炭化物粒少々、灰を若干含む。軟弱ロームが若干含まれる。



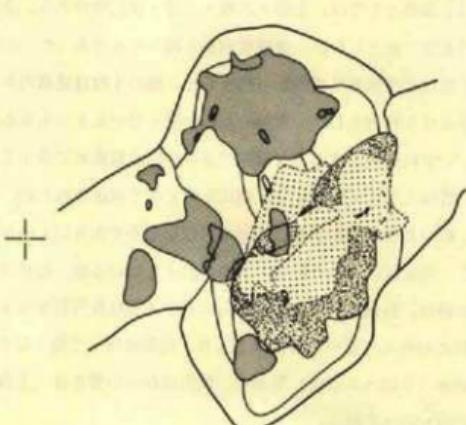
炭化物分布



焼土分布



灰分布



第41図 火葬跡(No. 1)炭化物・焼土検出状態

(1.06m) を測る。土壤内中央には、長軸に沿って長さ 1.08m (0.88m)、幅 0.42m (0.25m) を測り、中央部がくびれる溝状の掘込みがある。この掘込みの深さは底面より 8~13cm を測る。

本跡の掘込みは、平面形については不整であり周壁は凹凸がある。全体としてやや緩やかな掘込みとなる。検出面からの深さは、北側で 20~21cm、南側で 4~5cm を測る。

遺構底面は、緩やかな凹凸があるものの概ね平坦であり、さほど堅硬ではない。中央部に位置する溝状の掘込み底面は北側でやや深くなる。焼土層下あるいはその他の部分でも、赤く硬く焼けた状況は見出せない。

火葬跡 No.2 (はー3) (第42図、図版14)

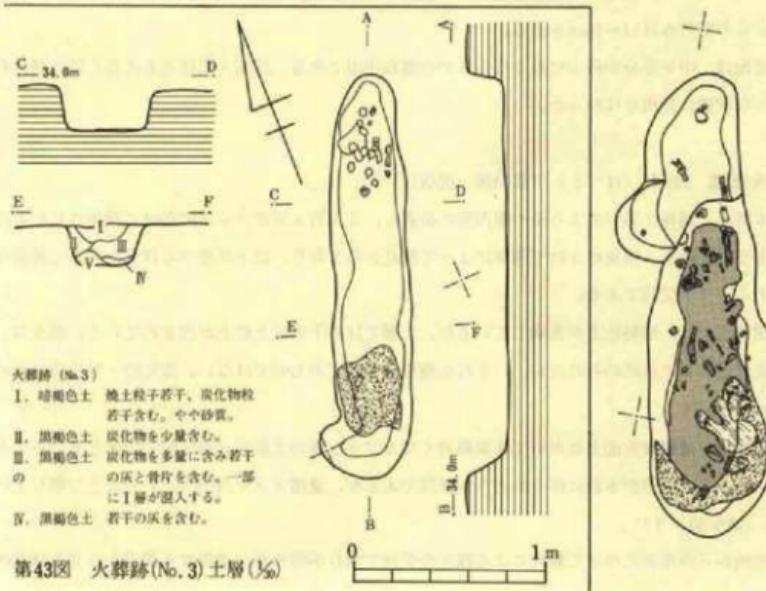
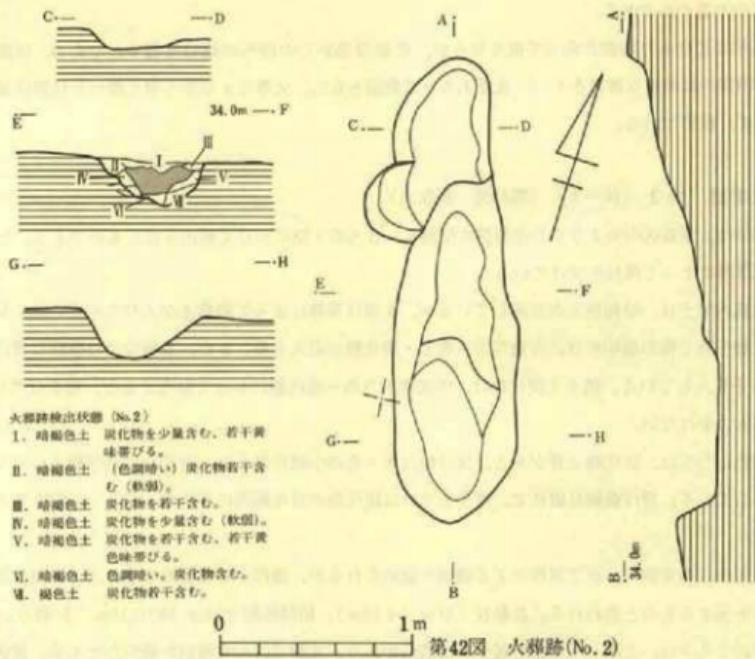
本跡は調査区南西側に位置し、3 A47グリッドにおいて検出されたものである。この付近の地形は南側へ向って緩やかに傾斜しており、本遺構の北側は新期テラフ面で検出されたが、南側は暗褐色土層面で検出された。また、本跡は南西側で003号跡の壁・覆土を一部掘込んで構築されている。

遺構内の埋土は、暗褐色土層を主体とし一部に褐色土の堆積が認められる。全ての層中に多少の差はあれ炭化物粒子が含まれる。暗褐色土層は、炭化物層の介在によって、また色調の差によって区分したが同質と言えるものである。また、炭化物層は純然たるものではなく、暗褐色土が所々混入するものである。遺構南側には、焼土がU字状に堆積しており、北側で炭化物層と混在する状況を呈すが、炭化物層より上位に堆積するものである。炭化物層は北側の際と土壤内全域に分布するが、殆んどが粉状になったものであり、所々にワラ状のものが認められる。この炭化物層・焼土層とも遺構底面に密着するものではなく、やや浮いている状態を示す。

出土遺物としては、土器・古銭・人骨・炭化物がある。土器はカワラケ貯のもので、土壤北側より正位で出土したが、遺構検出面と同レベルであった。古銭（永樂通宝）は計 5 枚出土したが、内 1 枚は北西側攪乱壙内から出土した。他の 4 枚は遺構内からの出土で、北側で 3 枚、南側焼土層下より 1 枚出土した。火熱のためか歪んでいるものもある。人骨は南側に集中して出土したが、いずれも極めて小さな破片であり、出土量極めて僅少である。炭化物は、ワラ・竹・木がある。竹は土壤中央付近から北側にかけて多く見出されたが、いずれも破片の状態であり、太いもの、細いもののが存在する。木は南西側からやや大きいものが出土したが、他はいずれも小破片である。丸太状のものや枝様のものが出土しているが、板状のものはない。

本跡は、長軸を北西—南東方向にもつ不整な長円形を呈するものである。土壤内部は北側より三段にわたって緩やかな段差をもち、南側に向って低くなる。長径 2.37m (2.19m)・幅 0.63~0.49m (0.46~0.22m) を測る。検出面からの深さは、上段部で 9~17cm、中段部で 19~22、南側で 20~28cm を測る。

本跡の掘込みは、さほど整ったものではなく、周壁は上端・下端とも凹凸が著しい。壁面の傾



斜はやや緩やかである。

底面は北側より南側に向って低くなるが、北側段部から中段への傾斜は緩やかである。中段から南側へは明瞭な段差をもつ。底面あるいは側面ともに、火等により赤く堅く焼けた状態は見出せず、軟質である。

火葬跡 No.3 (は-4) (第43図 図版14)

本跡は、調査区中央よりやや南西側に位置し、3 A37・38にかけて検出されたものである。北側は深耕によって擾乱を受けている。

遺構内埋土は、暗褐色土が充満しているが、上部は深耕によって耕作土が入りこんでいる。耕作土層を除く他の層中には、少量ながら焼土・炭化物が混入する。また、Ⅱ層中には微細な骨片が若干混入している。焼土・炭化物は、中央部より西～南西側にかけて分布するが、層をなすほどのものではない。

遺物としては、炭化物と骨がある。炭化物は木・竹の小破片であり、西側から南西側にかけて散在している。骨は微細な破片で、焼土あるいは炭化物の分布範囲に若干散っている程度である。

北側から南東側にかけて耕作による破壊が認められるが、遺存する部分からすれば、不整な長円形を呈するものと思われる。長軸長1.47m (1.19m)、短軸長約0.52m (約0.34m)を測る。

周辺ラインは、上端・下端とも緩やかな凹凸があり、北側ではやや傾斜が緩やかである。検出面からの掘込みは14～18cmを測る。

底面は、中央部分が僅少に高くなるものの概ね平坦である。底面・周壁とともに赤く堅く焼けたような状態は見出せなかった。

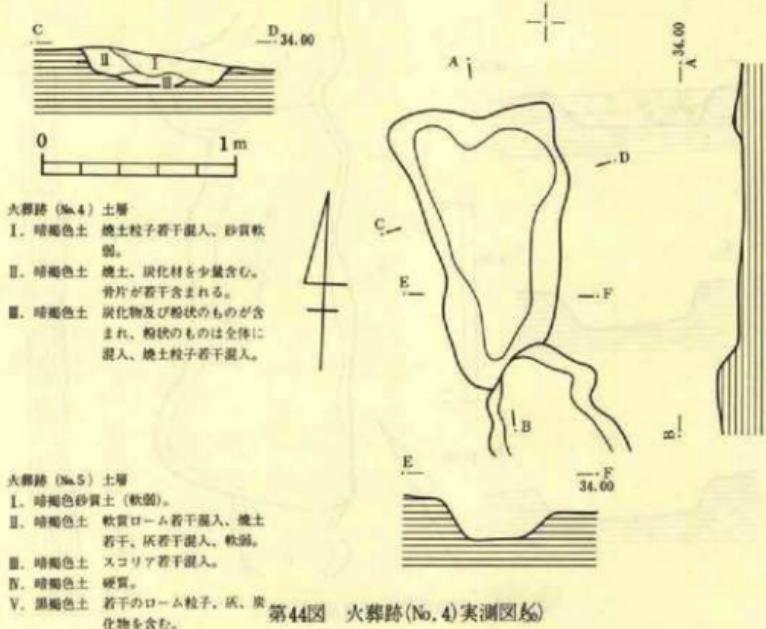
火葬跡 No.4 (は-5) (第44図 図版14)

本跡は、調査区域中央よりやや南西側に位置し、3 A37・38グリッドにかけて検出されたものである。北西から南東にかけて深耕によって擾乱されており、以下に述べる状況からみて火葬跡であるかやや疑問である。

遺構埋土は、暗褐色土が充満しているが、土層では若干の灰と焼土が含まれている。焼土は、中央付近に2ヶ所認められたが、いずれも層をなすほどのものではない。炭化物・骨片等は認められなかった。

遺物は、遺構検出面上において南東隅近くでカワラケ質の土器が一点正位で出土しているのみである。この土器が本跡に伴うかどうか疑問であるが、遺構プラン内出土ということで取り上げた。(第50図、3)

北西から南東側にかけて耕作による擾乱を受けており不明だが、遺存する部分からすれば北西



第44図 火葬跡(No. 4)実測図

一南東方向に主軸をもつ不整な隅丸長方形あるいは長円形と思われる。長径約1.9m前後(約1.8m前後), 短径約0.65m前後(約0.45m前後)を測るものと思われる。

周辺の掘込みは上端・下端とも緩やかに曲折し、北東側ではやや傾斜が緩く、南東側では垂直に近い。検出面からの深さは、14~20cm前後を測る。

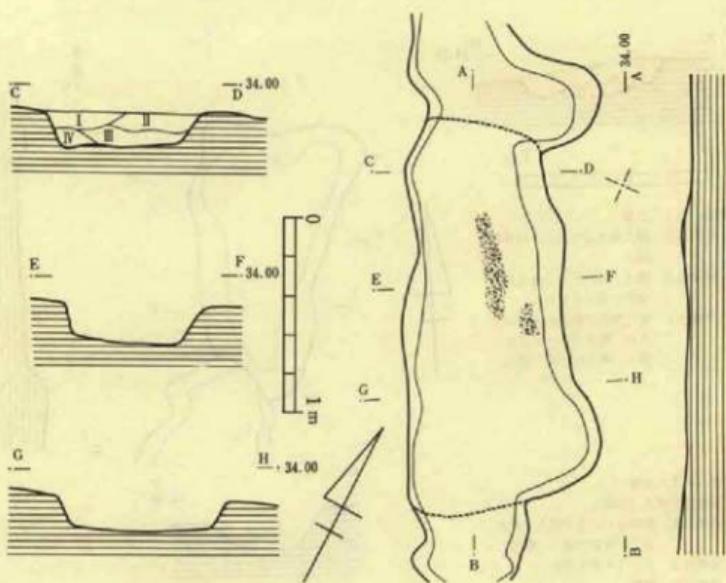
底面は比較的平坦である。底面・周壁とも赤く堅く焼けたような状態は見出せなかった。

火葬跡 No. 5 (はー5) (第45図 図版14)

本跡は調査区南西側西寄りに位置し、3 A44グリッド内に検出されたものであり、1号住居跡覆土を掘込んで構築している。

遺構内埋土は、上部に暗褐色土層が堆積する他は黒褐色土が充満しており、焼土・灰・炭化物が混入するものである。焼土層は、南西側で検出され、その範囲は狭く、周壁から底面にかけて流れ込んだ状況を呈す。炭化物北東側に集中して少量検出されたが、木竹片・粉状のもので層をなすほどのものではない。

遺物は炭化物・骨がある。炭化物には木・竹及び団子状のものがある。木・竹はいずれも小片であり混在している。団子状としたものは、粒の集合状態のもので略球形を呈する。木・竹片と



第45図 大葬跡(No. 5)実測図(%)

混在して検出された骨はいずれも小破片であって、北側の炭化物寄りと中央部から南側にかけて少量出土した。

本跡は、北東一南西方向に長軸をもつ長円形を呈するものである。長軸長 2.04 m (1.89 m), 短軸長 0.34 ~ 0.42 m (0.27 ~ 0.32 m) を測り、やや幅の狭いものである。

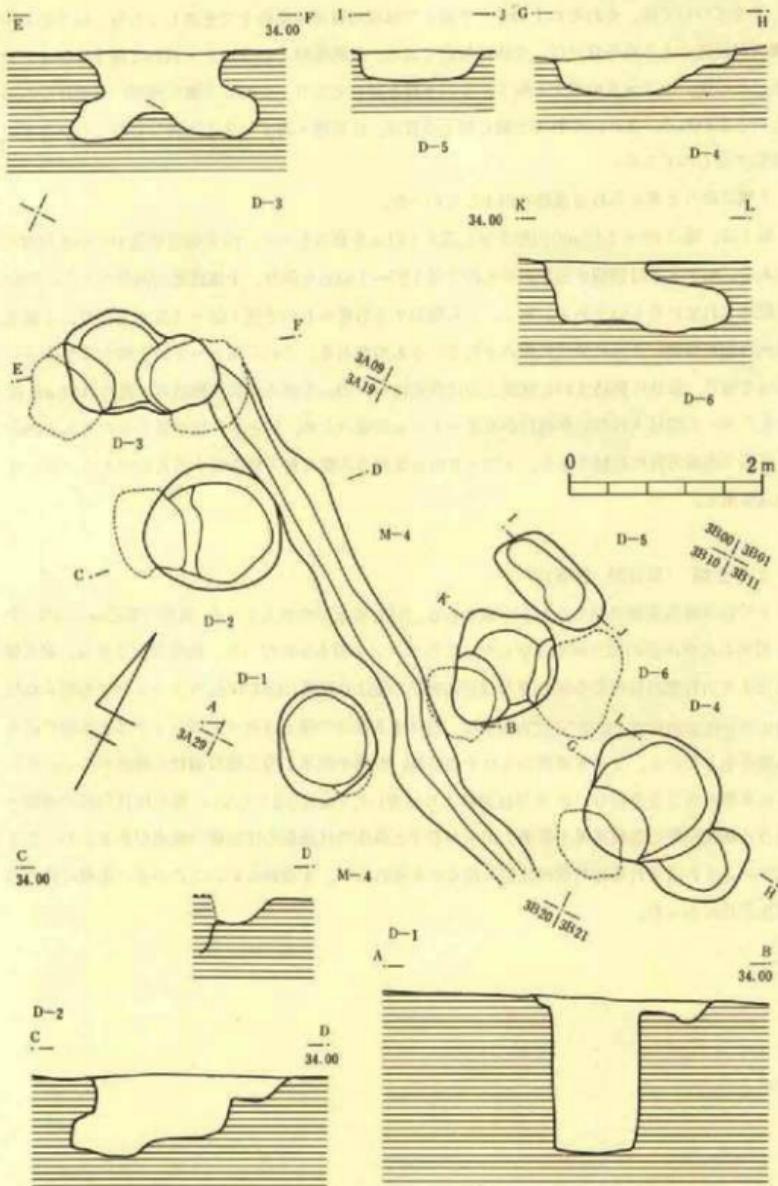
掘込みは比較的整っているが、下端ラインは凹凸がある。壁は傾斜の緩やかな部分もあるが、概ね垂直に掘込まれている。検出面からの深さは 17 ~ 21 cm を測る。

床の底面は、緩やかな凹凸があるがほぼ平坦と言える。底面及び周壁で赤く堅く焼けているような状態は見出せなかった。

3. 土 壤

土壤 No 1 ~ 6 (D-1 ~ 6 • D-7) (第46図 図版15)

調査区域内のほぼ中央に位置し、3 A19, 3 B10 • 11 グリッドに集中して検出されたものである。No 1 ~ 3 は北西一南東方向に並び、No 4, 5 もこれらの東側に平行して並ぶが、No 6 はやや北東にはずれて位置している。No 2, 3 は溝状遺構の一部を切断している。



第46図 M-4.D-1.D-2.D-3.D-4.D-5.D-6.実測図(%)

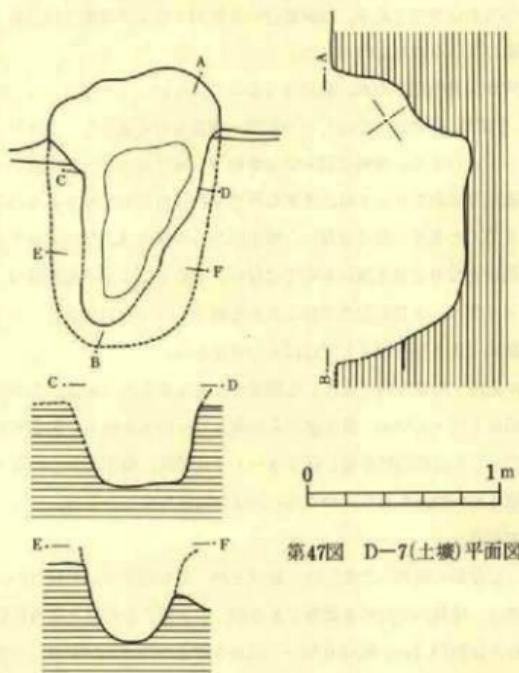
埋土については、それぞれ上層から下層まではほぼ同質の暗褐色土で充満しており、No.1のVI～VII層が硬質である点を除けば、全体に軟弱である。自然堆積というより人為的な埋土が想定される。この他のNo.3～5の埋土もNo.1、2の土質と同じであり、これ等土壤の時間的な差は少なるものと思われる。また、これ等土壤の埋土の質は、住居跡・溝1・2とは異なりむしろ耕作土に近似するものである。

土壤に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。

No.1は、径 1.09×1.12 mの円形を呈し深さ1.61mを測るもので、南東側周壁途中に小さな窪みがある。No.2・4は類似する形態のもので径1.27～1.43mを測り、土壤底部南西側がさらに袋状に掘込まれているものである。No.3、5も類似する形態のもので径1.05～1.12mを測り、土壤底部南西側を東側にさらに袋状に掘込まれているものである。これらNo.2～5の土壤の深さは39～65cmを測り、袋状に掘込まれた底面との比高差は14～29cmを測る。袋状掘込みの高さは50cm前後のもので、人間を入れないが奥行が0.6～1.0m前後のため、何とか片腕が届くものである。No.6は北西～南東方向に長軸をもち、 1.22×0.61 mを測る不整な長方形を呈するものである。深さは28cmを測る。

7号土壤（第47図 図版15）

9号住居跡南東側壁面にかかる土壤である。当初、壁面がややふくらみ、後世の掘込みではないかと思われたが床面の貼り床をはがしたところプランが明らかになった。長軸推定2.8m、最大幅推定1.9m程度の長円形を示し、9号住居跡掘込み面より最深1.4mを計る。セクションでも明らかな様に9号住居跡に完全に切られて存在する。残存する部分の埋土はロームブロックによる埋め込み状態を示している。また本遺構からはその時期、性格を明示し得る様な遺物の検出がなく、それらは不明とせざるを得ないが9号住居跡よりは古いことは言うまでもない。歴史時代以前の遺物と言うと縄文早期の条痕文系土器他の出土が若干と弥生時代後期の住居跡の検出があるため、あえてするとすればそれらの時期に比定し得るかも知れない。本遺跡においてこの手の遺構は他には検出されなかった。



第47図 D-7(土壤)平面図及び断面図(1/6)

4. 溝状遺構 №1 (M01 東・中央・西№2～№7) (第4図 図版7・8)

本跡は、調査区内中央部から北側にかけて延びる溝状遺構である。調査区域と溝状遺構の状況から調査上便宜的に三分して扱ったので、それに基づいて報告する。北側部分（調査過程では東側とした部分）は2B53から1B90グリッドにかけて検出された部分を指し、2B31グリッド以北は深耕による搅乱が著しいため寸断され、2B21グリッド以北では溝底に穿たれたビットが検出されたにすぎない。中央部分（調査過程では単にM01とした部分）は2B73から2B94グリッドにかけて検出された部分で、2B94グリッド以西は、調査区域外に延びている。西側部分は、3B04から3B11グリッドにかけて検出された部分で3B04グリッド以東は調査区域外に延びており、中央部分とは調査区域外ではほぼ直角に交差するものと思われる。3B11グリッド以西では検出されず途切れている。

埋土は、各部分とも暗褐色土を主体とするが、西側部分では黒褐色土の堆積が認められる。溝底に穿たれたビットは、埋土による観察からは溝との時間差を認めることができない。また、この

ビットが柱穴としてのものか否かは不明である。西側部分の3B04グリッド東側では、ロームブロックの堆積層が溝内に充满しているのが認められた。

埋土中からは土器小破片が少量出土したが、溝に伴うものではない。

北側部分は全長約25.70mを測り、緩やかに蛇行しつつ北西—南東方向に走行し、2B31グリッド付近以北は、北方向に向って走行する。溝幅は37~88cmを測り一様ではない。検出面からの深さは、11~14cmを測る。溝底に穿たれたビットは、不整な円形または橢円形を呈するもので、長径1.4~0.6m前後のものまで大小あり一様ではない。検出面からの深さは、19~54cmを測り、溝底との比高差は8~43cm前後となりさほど深いものではない。これらのビットの間隔は、2B42~53グリッド内では1.5mを測り、2B31以北では2.0mを測るが、2B11付近は3~4mの開きをもち、部分的には規則的であるが全体としてはばらつきがある。

中央部分は、ほぼ直線的に北西—南東方向に走行し北側部分に連なるものである。この部分の長さは約8.0mを測る。溝幅は1.16~1.58m、検出面からの深さ23~27cmを測る。溝底に穿たれたビットは、やや不整な円形もしくは橢円形を呈し径0.9~1.4m前後、検出面からの深さ57~67cmを測る。溝底との比高差は30~38cmを測り、やや浅いがほぼ同様な深さとなる。ビットの間隔は、約2.5mを測り均等である。

西側部分は、緩やかに蛇行しながら南西—北東方向に延びるが、3B12グリッド付近からは西方向に転換している。北東側は、境界外のため未調査であるが、中央部とした溝と直角に交するものと考えられる。溝の長さは約13.4m、幅は0.78~1.58mを測るが、3B12グリッド西側では幅0.39mと急激に狭くなる。溝の深さは、検出面より10~23cmを測る。3B12グリッド西側では7cm前後の深さとなる。溝底に穿たれたビットは、やや不整円形もしくは橢円形を呈し径0.6~1.5mを測り、検出面からの深さ49~58cmを測る。溝底との比高差は27~46cmを測りさほど深いものではない。3B11グリッド中央のビットは、溝走行ラインよりやや東側にずれて穿たれる。同様に3B11グリッド北東側のビットもやや東側に片寄っており意図的である。このことは、3B11グリッド中央に位置するビットの南側に、P₁~P₄とした4個のビットが溝と直交するよう一列に並んで位置しており、これとの関係が考えられる。溝内に穿たれたビットの間隔は、1.9~2.5mを測るが、3B13グリッド内から以西では1.9~2.0mの間隔をもつ。一列に並んで位置しており、これとの関係が考えられる。溝内に穿たれたビットの間隔をもつ。

以上の各部の溝状遺構は、一連のものと考えられるが2B94・95グリッドが境界外となり未調査であるため、北西—南東方向に走行するものと、南西—北東方向に走行するものとに分けられ、前者の長さ約40m前後を測るものとなる。後者は、3B11グリッド中央のビットまでとするならば約10.5m前後となる。3B11グリッド以西の溝幅が狭く・浅くなる点から、いずれにしても溝はこの付近で途切れるものと思われる。3B11グリッド内のビットが東側にずれる点を重視すれば、これ以南に存在するビットに連なってゆくものと思われる。

No. 2

調査区南西側に位置し、3 A37から3 A71グリッドにかけて検出されたものである。3 A54グリッド内で一度途切れているが、これは遺構の掘込みが浅いことや深耕による擾乱を受けているためであり、本来は連続していたものと思われる。また、3 A37グリッド以東へ、あるいは3 A71グリッド以西へ延びていたものと考えられるが、深耕により消失していた。3 Aグリッド内では、002号跡の一部を切断している。

遺構内埋土は、褐色味のやや強い暗褐色土を主体とし一部に褐色土の堆積が認められる。暗褐色土層中には、焼土粒子・黒色砂が含まれている。この黒色砂は所によっては薄く層をなすこと認められたが、いずれも上層に多く含まれている。

埋土中からは、本跡に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。

溝の掘込みは、整ったものではなく両辺は凹凸が著しい、全体としては、緩やかな屈曲をもって北東—南壁方向に走行する。北東側溝の長さ12.14m・幅0.71~0.13・深さ3~9cmを測り、横位断面は逆梯形状を呈する。南西側溝の長さ16.34m・幅0.93~0.09m・深さ7~19cmを測り、横位断面は逆梯形状を呈する。北東側溝と南西側溝との間は途切れているが、本来は連続していたものと考えられる。この場合、全長31.15mを測る。

No. 3

調査区内南西側南端部に位置し、3 B40から3 A81グリッドにかけて検出されたものである。この溝状遺構としたものは、深耕による擾乱が著しく不明な点が多い。遺構確認時において、馬骨が点々と検出されたことによって遺構の存在が明らかとなったものである。溝は、北東側と中央部と南西側の三つの部分に分けられるが、一連のものは不明である。

北東側・中央部・南西側とも暗褐色土が充満する。北東側・中央部では上層の暗褐色土層中から馬骨が出土しており、骨の一部は溝外から出土した。中央部の中位の層は、硬質で細かくブロック状を呈するものである。003号跡を掘込んだ部分では、黒褐色土の堆積が認められる。

北東側・中央部の溝跡土中より、馬骨が出土しているが、溝に伴うものではないと思われ、溝がある程度埋没した段階で廃棄されたものと思われる。この他中央部の溝内より陶磁器・煙管が埋土上部より出土している。

北東側溝の長さ8.0m・幅0.83~0.46m・深さ12~21mを測り、横位断面は逆梯形状を呈するものである。北東側の一部が調査区域外に延びているため、本溝が東側に向って延びるものか否か不明である。

中央部溝は、北東側溝の南西端より 0.9 m ほど離れた位置から始まるものである。この溝の 3 A 55・65 グリッド付近は耕作による擾乱が著しく不明であるが、火葬跡 No. 1 を切断する溝とは別個のもので、むしろ 3 A 65 グリッド内で南方向に延びる小溝と同一であるものと思われる。長さ 14.44 m・幅 0.36~0.93 m・深さ 6~25 cm を測り、横位断面は逆梯形状を呈す。

南西側溝は、3 A 64 グリッド内の擾乱が著しく明らかでないが 3 A 73 グリッド以降では二条に分かれる。埋土の状況からみて北側のものは火葬跡 No. 1 を切断する溝に連なるものであろう。長さ 11.20 m + α m・幅 0.78~0.38 m・深さ 19~12 cm、横位断面形は逆梯形状を呈する。

No. 4

調査区内中央部に位置し、3 A 19・3 B 10 グリッド内に検出されたものであるが、北西側と南東側では消失している。

埋土は、暗褐色土が充满している。耕作土に近似する土質である。

遺物の出土は皆無である。

遺構は北西—南東方向に走行するものであるが、屈曲が著しい。現状での長さ 6.03 m・幅 0.56~0.42 m・深さ 16~20 m を測り、横位断面は逆梯形状ないしは U 字形を呈す。

No. 5

本跡は調査区域内北東側西寄りに位置し、2 B 00 から 2 B 30 グリッドにかけて検出された溝状遺構である。2 B 00 グリッド以北及び 2 B 30 グリッド以西では調査区域外へ延びているため未調査である。2 B 00 グリッド内においては、014 号跡を切断している。

遺構埋土は、ローム粒子を含む暗褐色土が充满していたが、2 B 10 グリッド南側から 2 B 20 グリッドにかけて底面より 10 cm 上位で焼土が検出された。焼土層の範囲は、1.13 × 0.32 m で厚さ 3~6 cm 前後を測るものである。

埋土中からは、土器小破片が少量と 014 号跡内の埋土上部から石が一点出土しているが、遺構に伴うものかは不明。

2 B 30 から 2 B 20 グリッドにかけては、北東—南西方向に走行し、2 B 20 グリッド以北はほぼ北方向に走行するが、2 B 10 グリッド以南が緩やかな曲線を描くのに対して、以北では直線的となる。長さ約 13.8 m、幅 0.6~1.0 m、深さ 31~43 cm を測る。横位断面形は逆梯形状となる。

No. 6

本跡は、調査区内中央部から東よりにかけて位置し、2 B 80 から 2 B 12 グリッドにかけて検出された溝状遺構である。

埋土は、暗褐色土層が充满するものである。

埋土中からは、土師器破片・陶磁器破片が若干出土している。

遺構は、2B80から2B22グリッドにかけて、略南一北方向に走行するものと、2B32グリッドにおいてこれより分岐して西側に出た後北方向に走行するものとから成立つ。分岐点における前後関係は認められず、同一時期のものと思われる。前者の溝は2B61グリッド北側からはやや北東方向に向きを変えて走行し、谷へ落込むようにして2B22グリッド内で終わる。全長約25.5mを測り、幅0.5～0.92m、深さ50cm前後を測る。横位断面は逆梯形状となる。後者は、分岐点より1.4mほど西側へ走行した後、略北方向に走行する。長さ約10.7mを測り、幅約50cm前後、深さ17～39cmを測る。北側では地形が傾斜しており、2B12グリッドでは東壁は検出できなかつた。両者の溝の位置は、現在の畠地と山林部分との境界とはほぼ合致する部分がある。

No.7

本跡は、調査区内北側にあって東寄りに位置し、2B03～13グリッドにかけて検出された溝状遺構である。2B03グリッド以北は不明。

暗褐色土が堆積している。耕作土に近似する土質である。

遺構内からの出土遺物は皆無である。

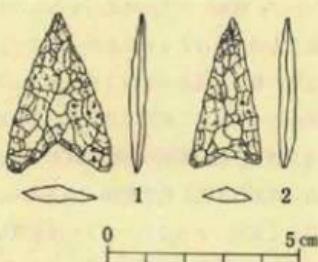
長さ約7.4m・幅約0.9m検出面からの深さ約0.3mを測り略南北方向に走行する。北側では幅が狭く浅くなっている。横位断面形は逆梯形状を呈す。

5. 包含層出土の遺物 (第48・49図 図版22・23)

本遺跡出土の縄文土器は、その大半が早期縄文時代後半の条痕文系土器であり、いわゆる茅山式に属するものと思われる。1, 3, 8は太い隆帯を伴い刺穴が隆帯にそって施されるものである。地文は内外面共に貝殻条痕文が施される。

その他は全て地文たる貝殻条痕のみを施されているものである。口縁部は4が波状を示す他はほぼ平縁のもので図示したものは全てきざみが施されている。12はナデ仕上げされているものである。器面はよく整形されている。内面は貝殻条痕による地文を施した後に整形を施しており部分的に貝殻条痕が残る。口縁はやや外反する。

石鐵 図示した2点が縄文時代の包含層から出土した。やや大型の黒曜石製である。ていねいに作られた良品と言える。



第48図 出土石鎧実測図(考)

轡 (第51図)

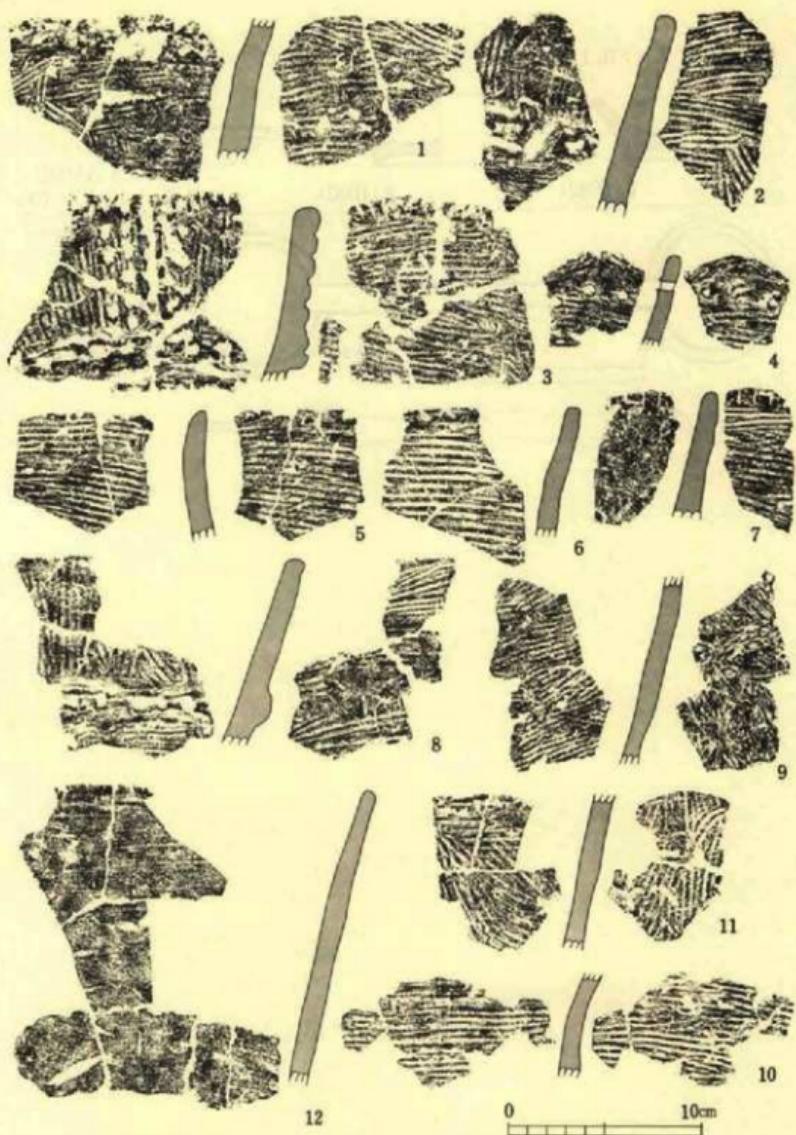
中央部でつながる二連式軸と両側の素環鏡板から成る鉄製轡である。

これは断面が方形の棒の両側に径約 1.5 cm の輪を有するものである。輪は棒の両側を薄くのばし 張を描くように折り返してつくられている。輪の内側は、鏡板との摩擦により減っている。長さは一方が 7.3 cm、他方が 6.3 cm を計り、全休として約 11 cm ある。

鏡板は断面 3 mm 程の円形で素環としたものである。鏡板の大きさは完全な方でやや梢円ではあるが長径 4.9 cm ある。一部に木皮状のものが巻かれた根痕がついている。

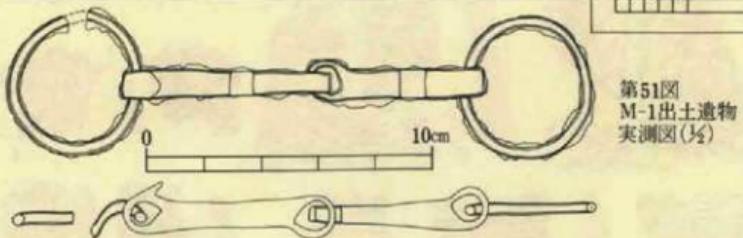
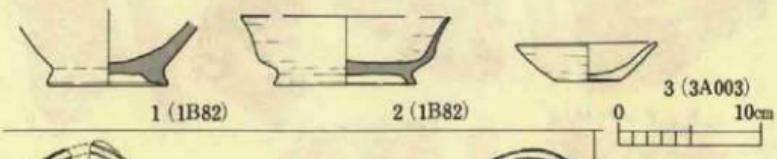
その他 (グリッド等) の遺物

番号	器 形	遺存度	法 量			内 容	備 考
			口徑	高さ	底徑		
1	高台付甕	底部のみ	×	×	8.5	暗灰色 部分的に茶がかかる。触わざかにかかる部分は暗褐色となる。回転糸切りによるあと高台着装。	
2	高台付环	底 部 完 成一口縫 部	14.5	5.0	10.0	青灰色 豆土・焼成良。体部でくの字状に内湾、口唇部でやや外反する。 ロクロ整形(右回転)回転糸切りで切り離し後高台を付ける。	
3	灯 明 盆 (?)	ほぼ完形	9.8	2.7	4.3	暗茶褐色 豆土中に小砂粒含む。土師質土器 焼成良 ロクロ整形底部回転糸切り、中世以後の品か。	(は—5)出土になるか。 遺構確認時 で出土位置 を確定出来 にくい。



第49図 八木蒲田谷津遺跡出土遺物(縄文土器)拓影(分)

第50図 グリッド出土遺物実測図(分)



第51図
M-1出土遺物
実測図(分)

第 3 章

佐倉市天辺内山遺跡

第1節 遺跡の位置 (第2, 3図 図版24)

内山遺跡は佐倉市天辺字内山162-3他に所在する。蒲田谷津遺跡と同様、高崎川の支流に面した台地上で台地両側に支谷が入り込みやや北側にこの台地だけが突き出した様な感じになっている。なおこの周辺の遺跡には古墳が数多く存在することが知られている。第2図33は40m級の前方後円墳である。また遺跡の所在する台地上にも小円墳と考えられるふくらみが台地北側にいくらかみられる。なお後背台地上には星谷津遺跡が数kmの距離に所在する。

第2節 調査の経過

昭和55年2月18日より3月17日までの約1カ月にわたり調査を実施した。(第52図)

2月18日～2月20日

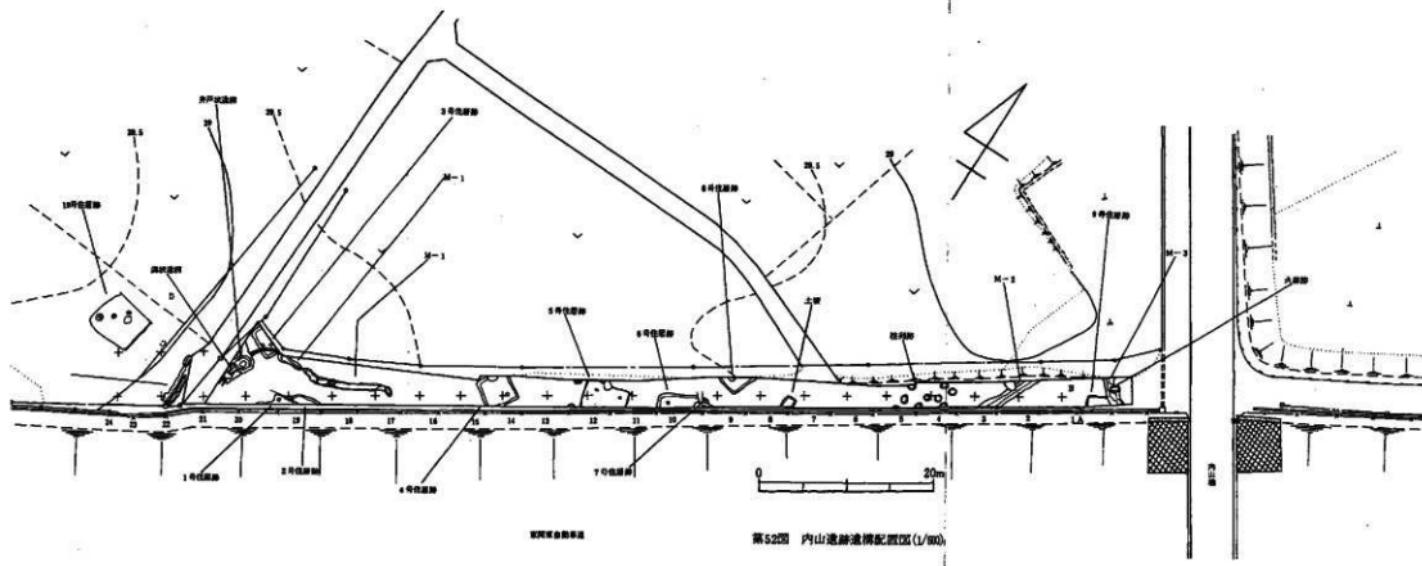
農道部分であり、また砂利敷道路となっているため重機(バックホウ)により表土の除去を実施する。行きどまりのトレンチ状のため、排土はダンプで運搬することになったが道が狭く排土場までの時間がかかりあまり良い能率で仕事がはこんだとは言えなかった。また調査区中央部から北側によるに従い東関道建設時の工事用道路が現表土下に存在し、全体にかなりの盛り土が確認され、当初予定に比べかなりの遅れとなった。

2月21日～22日

グリッド設定及び杭打と同時に遺構確認を行う。狭くて長いトレンチ状の調査区のため調査区城内に納まる遺構がほとんどみられない。グリッドは西側道路より0～24とし東関道側へ延びることはまずないためA～Dを北に向けて組合せて番号を付した。

2月25日～3月17日

確認が終了しだいに遺構の精査を行う。調査区域も狭く排土場所も確保できないため遺構と遺構のすき間及び実測・写真撮影等調査の終了した遺構に順次排土を行う。3月10日頃よりは排土を利用して煙突部分に盛り土をつみ上げて壁のくずれ防止等も行う。3月17日にはうめどしまでの危険防止策等を行い器材の運搬等完了し終了した。



支承鉄筋

第520回 内山道路構配図(1/50)

第3節 遺構とその遺物

本遺跡において検出された遺構は住居跡が10軒、溝が5条、柱穴群1ヶ所、火葬墓1基、土壤1基である。各々の遺構ごとに説明を加えてゆく。

1. 住居跡

1・2号住居跡（第53図 図版24）（212-003-001・002）

東関道建設時の搅乱を受けプラン・掘り込み共にあまりはっきりしないものである。1号住居跡は方形に近いプランとなるものであろうか。ピット状の掘り込みが1ヶ所みられるが柱穴であるかどうか不明である。

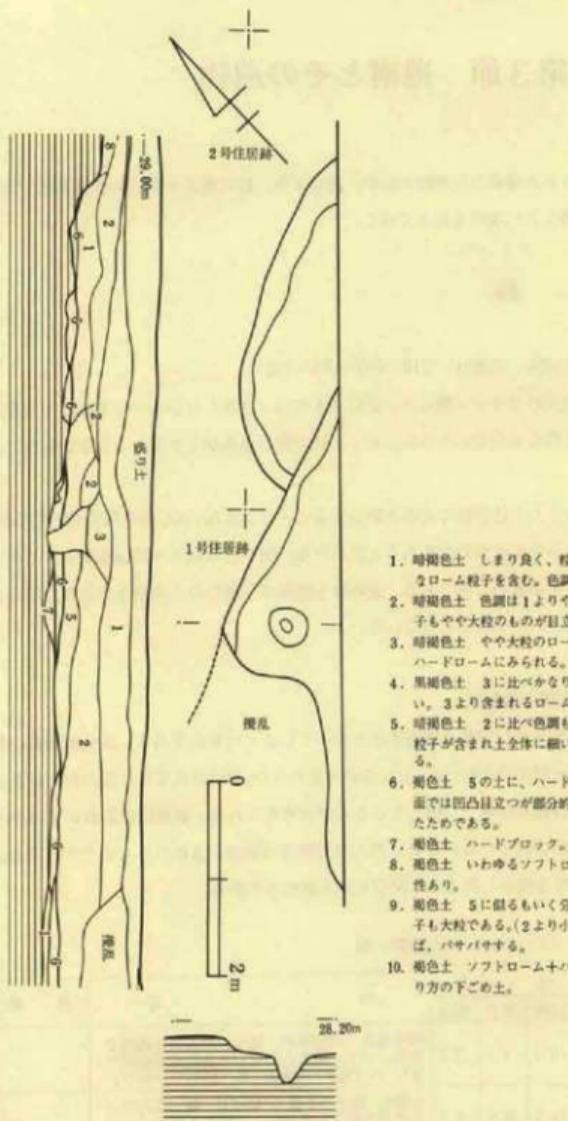
2号跡においてははっきりと住居跡であると断定することは出来ないが、残存部分から考えるならばやや隅丸気味のプランを示すものであろうと思われる。掘り込みは5~10cm程度と、これも遺構自体明瞭なものとは言い難いものである。遺物は土師器の小破片のみの出土であり、何らこれらの時期を決定するものの出土はみられていない。

3号住居跡（第54、55図 図版25）

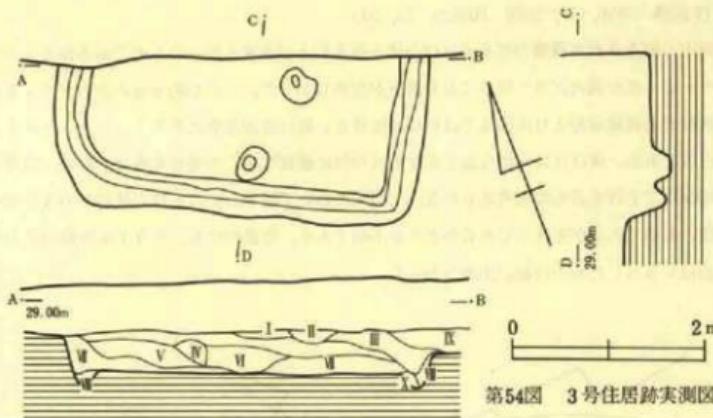
プランから考えて全体の1/4~1/5程度の調査にとどまってしまったものである。30~40cm程の掘り込みを有し一辺が3.8m程度の方形プランになるものであろうか。床はほぼ平坦に保たれるがさほど硬い床ではない。周溝は幅30cm程で一周しているものと考えられる。調査区内においては主柱穴と考えられるものは検出されていないが凸は出入口部関連の施設と言われるものであろうか。遺物の出土は少なく器形等を提示し得るのは図示した3点のみである。

3号住居跡（212-003-014）出土遺物一覧

番号	器 形	遺存度	法 量			内 容	備 考
			口徑	高さ	底径		
1	壺	1 / 3	15.0	4.5	7.5	淡赤褐色 内面黒色、胎土・焼成良好緻密である。ロクロ整形底部縁辺へラによる面取りを行う。内面ヘラ磨き 底一回転ヘラ切り。	
2	壺	1 / 5	11.5	3.5	6.5	赤褐色 胎土やや粗く、焼成良。胴一ほんのゆるやかな脇らみを持ち、口縁を外反する。ロクロ整形ナデが加わる。	
3	瓶	底部1/4	×	×	15.0	黒褐色 胎土や白色砂粒含む。焼成良好。外タタキ痕あり+ヘラ削り内ヘラ磨き、全体に硬質。	

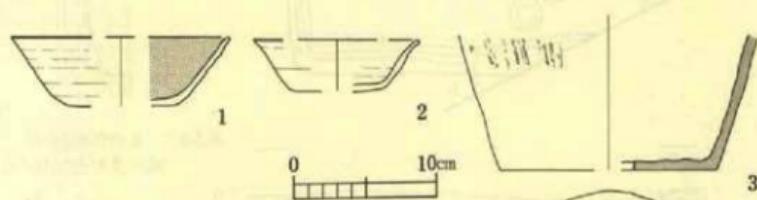


第53図 1号・2号住居跡実測図(%)



第54図 3号住居跡実測図(%)

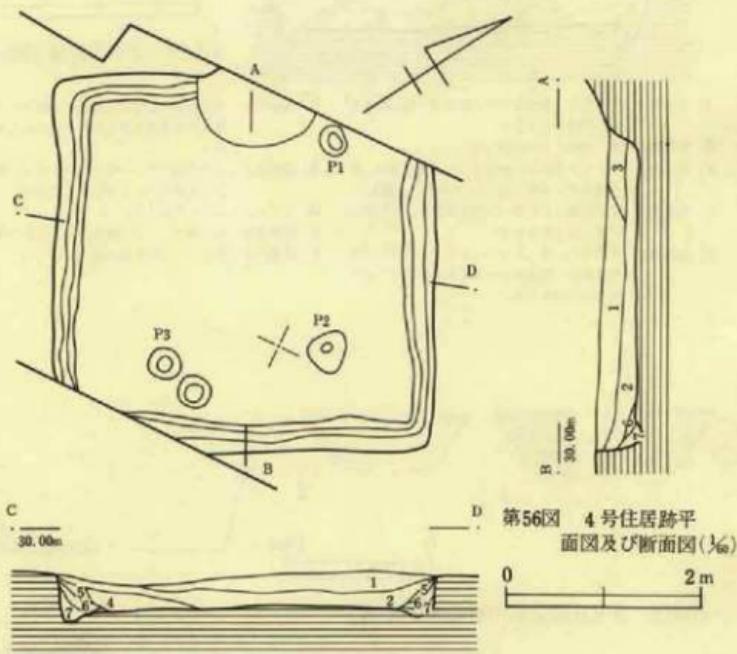
- I. 暗褐色土 やや砂質、微細なローム粒及び、焼土粒を含む。粘性あまりない。
- II. 003溝(a)断面 黒色土やや砂質っぽい。
- III. 暗褐色土 Iよりやや明るい微細なローム粒を含む。やや黒色がシミ状に入り、もやもやした感あり。
- IV. 暗褐色土 やや砂質っぽくローム粒子を含む。目も近いが粘土質は含まれない。
- V. 暗褐色土 粒子大きい。混入するハドロームの粒子の密度は薄い。焼土は少々入るも、目立つほどもないが少々入る。
- VI. 暗褐色土 やや砂質っぽく粘土質よりの流入による混入か。ローム粒子も大きくなりれる。
- VII. 暗褐色土 やや大粒のローム粒子を少々含み、地より土粒子は細かい。ややしまりもよい。
- 選. フタトロームのくずれ込み。
- Ⅷ. 暗褐色土 粒子細かく、やや粘性あり、しまり良。
- IX. 暗褐色土 燃+ローム粒子混入度。



第55図 3号住居跡出土遺物実測図(%)

4号住居跡 (第56, 57, 58図 図版25, 33, 34)

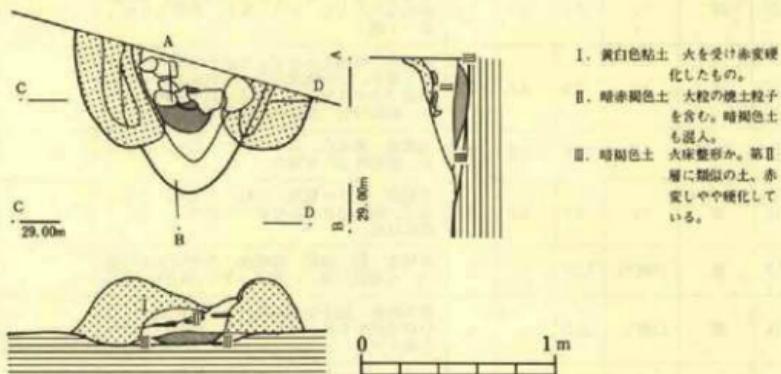
本遺跡中の調査された遺構のなかでほぼ全体を視ることが出来る唯一のものであるがカマド及びコーナーの一部が調査区外へ延びており調査が出来なかった。一辺が約4mの方形プランを有する住居跡で遺構確認面より床面までは約40cmを計る。壁はほぼ垂直に立ち上ったしっかりとした掘り込みである。床はほぼ平坦な面を示すもの特に硬質な感じを受ける所は少ない。周溝も幅30~40cm程度で全周するものと考えられる。平面図において図示してある柱穴状のものは共に20cm程と浅いものであるが主柱穴であるかどうか不明である。位置的にも、もう1本の検出に力を入れたがはっきりしたものは確認出来なかった。



第56図 4号住居跡平面図及び断面図(36)

- 暗褐色土 かなり色調も暗く、粒子も荒い。多少砂っぽい所もみうけられる。ローム粒子混入。粒子はきほど大粒のものはみられない。
- 暗褐色土 1よりやや色調も明く粒子も細め。混入するローム粒子が、1のようにバラバラではなくややブロックのくずれ様にみられる。
- 暗褐色土 1+カマドより流出の黄色粘土及び2に含ま

- れる様なローム粒子入る。
- 暗褐色土 2に比べ黄褐色が強く、混入するローム粒子も粒が大きめである。他に焼土粒多少含む。
- 4以上にローム粒子大粒のものを含む。
- 色調は5に近いがありローム粒を含まない。
- 6よりも色調も明るく、壁よりのくずれロームみたいな大粒のもの入る。

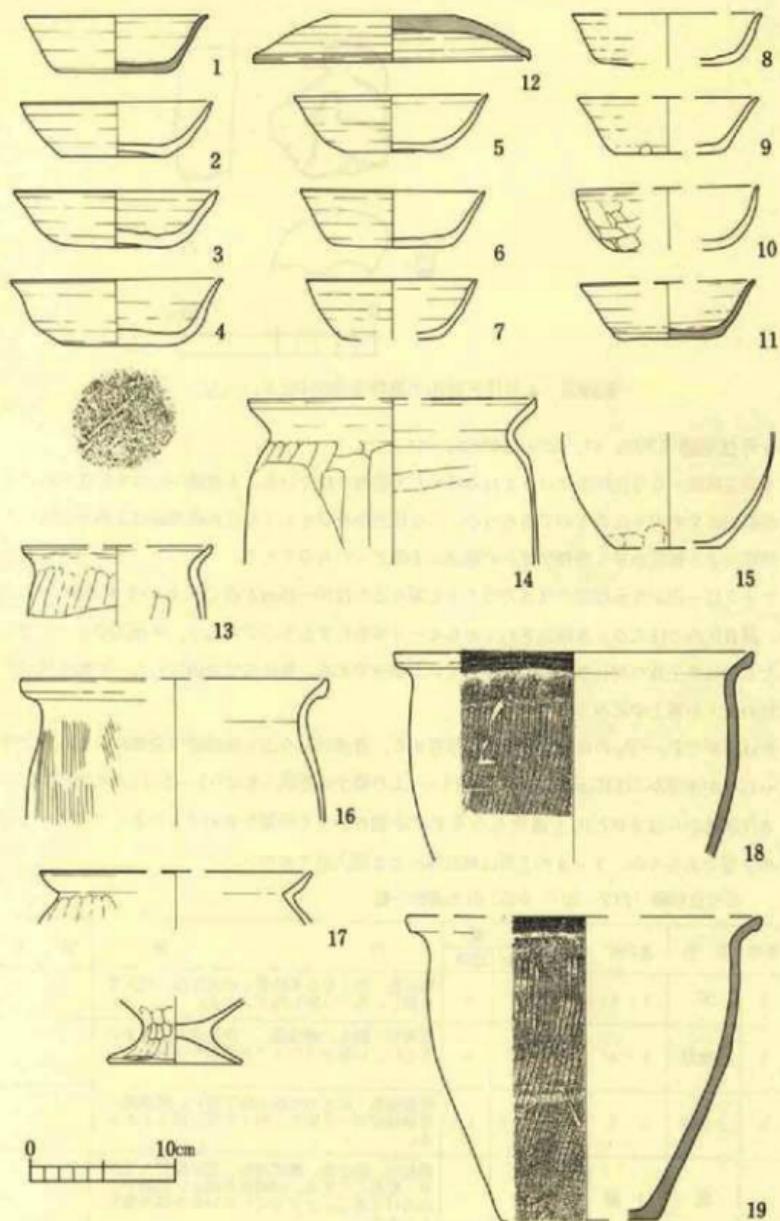


第57図 4号住居跡カマド平面図及び断面図(火炎)

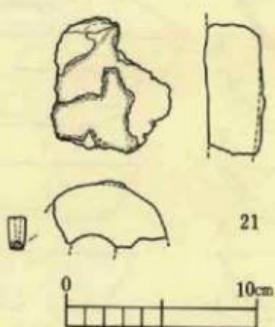
4号住居跡 (212-003-004) 出土遺物一覧

番号	器形	遺存度	法量			内 容	備 考
			口径	(現存) 高さ	底径		
1	壺	完形	13.0	(現存) 4.0	7.5	暗茶褐色 外面ややスス付着。胎土密焼成良。口唇部や外反する。底部やや厚みのある作り。ロクロ使用回転不明 周辺ヘラ削り。	
2	壺	完形	13.5	(現存) 3.5	7.0	暗褐色 外面ややスス付着。胎土良好、焼成良。ロクロ使用、底部回転ヘラ削り。	
3	壺	完形	14.0	(現存) 3.5	8.0	明茶褐色 胎土良、焼成良。体部直線的に立ち上るが立ち上り部ヘラ削り。底部や上げ氣味。手ロクロ使用。ロクロ目立つ	
4	壺	%	14.5	4.5	8.0	黄褐色 胎土・良、焼成やや不良。内外面とも器面荒れている。口縁外反 体部立ち上り気味のゆるやかなカーブであるが底部にむかひ急になる。ヘラで削られている。ロクロ使用。「×」ヘラ記号あり。	
5	壺	完形	13.5	(現存) 4.0	6.0	赤褐色 胎土良、焼成良。口縁にむかひゆるやかに内傾気味に立つ、底部回転ヘラ切り、体部下にヘラ削り。ロクロ(右)	
6	壺	½	13.0	4.0	8.0	黒褐色土 胎土・焼成良。内面荒れている。体部は直線的に立ち上る。ロクロ整形 底部ヘラ削り。	
7	壺	%	12.0	4.0	7.0	黄褐色 胎土・良、焼成良。体部やや丸みをもつも口縁付近でやや外反する。ロクロ整形 回転糸切り 底面ヘラ削り	
8	壺	%	13.0	3.5	9.0	黒褐色 胎土・普、焼成・良。体部ゆるやかな丸み。口縁で外反する。底部もややふくらむ。ロクロ整形 ヘラ削り。	

9	坏	%	12.5	3.5	7.5	赤褐色。胎土・普・焼成やや落ちる。体部直線的な立ち上り。ロクロ整形。底部切り離し後ヘラ削り。	
10	坏	%	12.5	4.0	7.0	赤褐色。外面スス付着。外面ヘラ削り、内面ヘラ磨き。やや体部ふくらみ気味に立ち上り口唇でやや外反氣味になる。胎土・焼成共に良。底部付近二次焼成か荒れている。	
11	坏	%	12.0	3.5	7.0	須恵器 青灰色。ロクロ整形、胎土・焼成良好。底部外辺ヘラ削り。	
12	蓋	%	19.0	3.0	8.5	黒褐色。ロクロ整形、回転ヘラ切り、ツマミ部欠。胎土中に小砂粒やや目立つ、焼成は良。	
13	甕	口縁%	13.0	×	×	赤褐色。胎土良好、焼成良、外ややスス付着内 有機質付着。口縁ヨコナテ、外面ヘラ削り	
14	甕	口縁%	20.0	×	×	暗茶褐色 胎土中小砂粒目立つ。焼成良。口唇部がやや外へめくれ気味 外面ヘラ削り、内側ナテ	
15	甕	脚下半%	×	×	7.0	赤褐色。胎土良。二次焼成により器面荒れている。外面ヘラ削り後ナテを施す。	
16	甕	口縁%	21.0	×	×	赤褐色。胎土良、焼成良好。口縁以下磨き、それ以下タタキ、内面よく磨かれている。	
17	甕	口縁%	18.5	×	×	暗褐色。胎土中に砂粒含む。焼成やや不良、口縁の外反「く」の字にかなりきつく口唇近くで多少立ち気味になる。外面ヘラ削り。	混入か
18	甕	口縁%	24.5	×	×	暗茶褐色 胎土、焼成良好。外タタキ、口縁から内面よく磨かれている。	
19	甕	%	24.5	20.5	10.5	暗褐色。胎土、焼成良好。外タタキ、口縁から内面よく磨かれている。	
20	台付	脚部のみ	×	×	9.0	赤褐色 胎土、焼成良。二次焼成のため外・内荒れ。外ヘラ削り。	17と同様 混入か
21	ふいご口	部分					



第58図 4号住居跡出土遺物実測図(×)



第59図 4号住宅跡出土遺物実測図(吹子口)(21)

5号住宅跡 (第60、61、62図 図版26、34)

4号住宅跡・6号住宅跡にはさまれる様にして検出されている。本遺跡中では9号住宅跡と共に時期的にやや古くなるものであろうか。この住宅跡及び6・7号住宅跡周辺は工事及び畠の古い耕作による搅乱が多く当初プランの確認に手間だったものである。

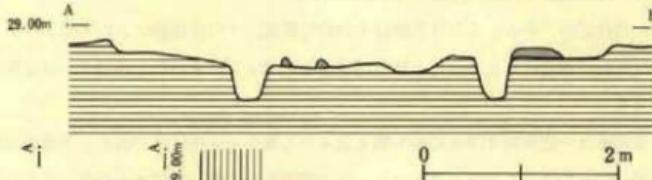
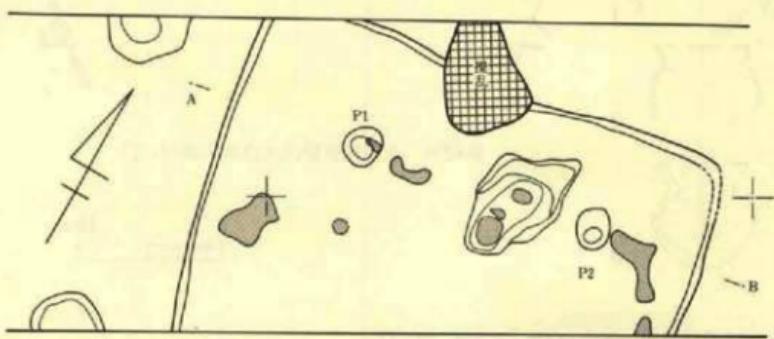
プランは一辺が5m程度のほぼ方形を示し掘り込みは10~15cmと浅く床もやや凹凸気味である。調査区内で柱穴は2本確認されており4~5本を有するものであろう。平面図中トーンで示したものは焼土及び炭化物の特に集中していた部分である。他にはば全面にわたって焼土及び炭化物の混入が覆土中にみられている。

炉は平炉でP₁—P₂のはば中間位置に存在する。普通はもう少し住宅跡中央部によるものと考えられるが床面からは15cm程の掘り込みをもっており焼土の形成もかなりしっかりしたものであった。

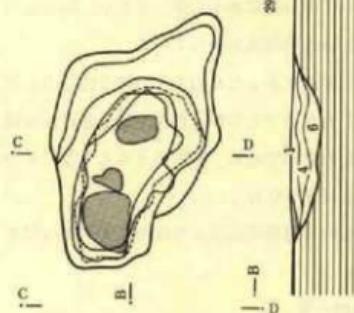
本住宅跡からはさほど出土遺物もみられず小破片が多く時期を表わすものとしては2・3の小型土器であろうか。1・4の土器は搅乱等による混入品であろう。

5号住宅跡 (212-003-005) 出土遺物一覧

番号	器 形	遺存度	法 量			内 容	備 考
			口径	高さ	底径		
1	壺	1 / 5	10.5	×	×	黒灰色 烧土中石英粒多く烧成は良。外面荒れ著し、外へラ削り内ヨコナデ。	
2	小型壺	1 / 4	6.0	×	×	暗褐色 烧土、燒成良。二次焼成によりややもろい。口縁から内ヨコナデ削ヘラ削り。	
3	小型壺	2 / 5	6.5	7.0	1.5	暗茶褐色 烧土中に白色粒子多い。焼成良。外脚横位のヘラ磨き、内ナデ整形痕よくわかる。	
4	甌	口 縁	37.0	×	×	黒褐色 烧土密、燒成良好。把手貼付ヘラ削り、整形してある。口縁折り返し、口肩つまみあげてある。ナデでていねいに全体を整形してある。	



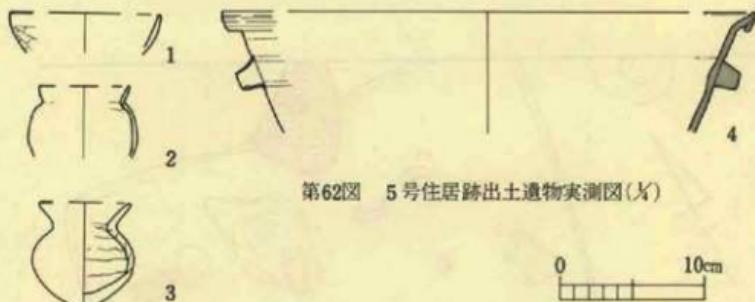
第60図 5号住居跡実測図(%)



1. 黒褐色土 焼土粒少減 ローム粒若干
2. 木根
3. 暗褐色土 ローム土若干 黒褐色土若干
4. 暗褐色土 焼土を中心として焼けたローム粒を含む (焼土あまり多くない)
5. 暗褐色土 焼土少減 焼ローム若干含む
6. 間色土 焼土若干 ローム土少減



第61図 5号住居跡炉跡実測図(%)



第62図 5号住居跡出土遺物実測図(×)

6・7号住居跡 (第63, 64図 図版26, 27, 34)

重複した住居跡である。6号住居跡はその約半程度、7号住居跡においてはコーナーの一辺とわずかな部分の調査にとどまった。新旧関係はセクションに表われた通り7号住居跡を新しいものと考える。

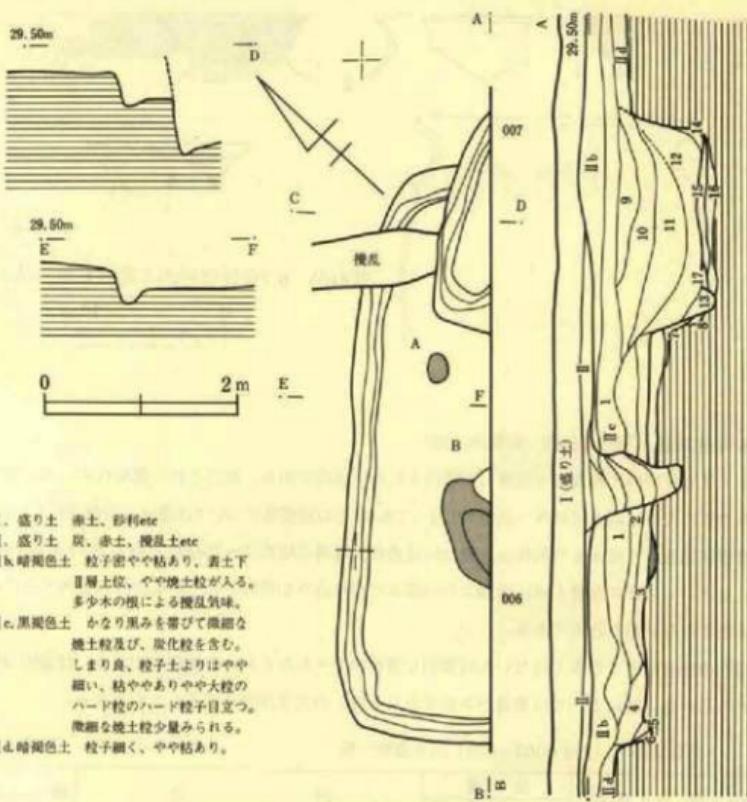
6号住居跡は一辺が約4.8mのやや隅丸気味の方形を示す住居跡である。遺構確認面より床面まで20~30cmを計る。床はソフトローム中に構築されておりほぼ水平を保っており、調査区内においては柱穴は確認されなかった。壁直下には、幅30cm程の周溝が廻っている。

平面図中のトーンは焼土を示している。焼土Aは浅い凹みにあったものでどの様な性格のものかはっきりとしないものの焼土自体もさほどしっかりしたものでもなかったが、焼土Bは10cm程の掘り込みを有し、その焼土形成もかなりはっきりとしたものである。室内炉と考えてよいものであるか全体を明らかにした上からではないとはっきりとは述べ切れない。

7号住居跡は6号住居跡を掘り込んで作られているもので遺構確認面より床面まで約70cm程を計る。壁はほぼ垂直、幅30cm程の周溝が認められた。

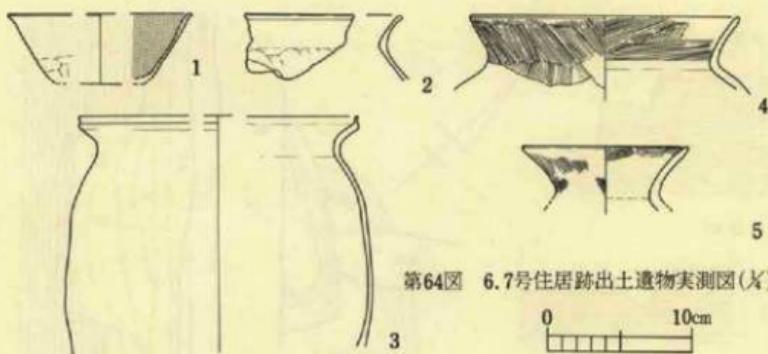
6・7号住居跡 (212-003-006, 007) 出土遺物一覧

番号	器 形	遺存度	法 量			内 容	備 考
			口径	高さ	底径		
1	壺	1/6	12.5	4.5	6.0	黄褐色 内裏一部外面に黒はん。ヘラ削りのあとナデ整形箇肉もうすく良品	
2	甕	口 線	11.0	×	×	暗茶褐色 胎土中に砂粒多く含み、器面荒れている。外ヘラ削り、内、ナデ。	
3	甕	1/4	19.0	×	×	黄褐色 胎土荒い。焼成もやや甘い。外、ヘラ削り、内、ヘラ磨き+ナデ。	
4	甕	口線%	18.5	×	×	暗茶褐色 胎土良、焼成二次焼成によるものか器面の荒れ目立つ。外ハケ、内一口線内側ハケ以下ヘラ削り+磨き	
5	小型甕	口線%	11.5	×	×	暗茶褐色 器内厚め、焼成等良好。外ハケのあとナデを加える。内ハケのあと磨きを加えている。	



第63図 6.7号住居跡平面図及び断面図(%)

1. 暗褐色土 粒子細くしまりのよきそなう土に、ソフト粒子が入りてもやもやした黄褐色が入る。
2. 暗褐色土 1の粒子細くしまりのよきそなう土の本来的と思われる土。微細なローム粒子を含む。多少粒子は荒らしある。
3. 黒色土 炭化物、燒土を多く含む。本住跡跡床面より全体的に炭化物の検出がみられ物にこの部分に集められた。
4. 黑褐色土 2よりやや色調暗い。また混入するローム粒子もやや大粒、荒ら。
5. 4+ハードブロック、くずれと思われる。
6. ハードブロック くずれと思われる。
7. ハードローム+ソフト。
8. 7のくずれか。
9. 暗褐色土 2に比べやや粒子粗く多少砂っぽさある。微細なローム粒子及び焼土粒子含む(暗茶褐色ぐら)
10. 暗褐色土 9よりやや暗く粒子は同じぐらい。ややローム粒子大粒、燒土粒の混入みられる。
11. 黑褐色土 10よりローム粒子大粒、混入燒土も多い。燒土粒の混入みられる。
12. 暗褐色土 くずれたソフト状ロームがやや多く入る。その他にハード粒子入る。焼土粒子入る。
13. 黄褐色土 下部ハードロームも入り込んでいる。
14. 黄褐色土 ソフトくずれ、ハードまで入らない。
15. 黄褐色土 やや粘、粒子密な土+ソフト+ハード。
16. ハード+暗褐色土
17. ソフト+ハードローム。



第64図 6.7号住居跡出土遺物実測図(1)

8号住居跡 (第65、66図 図版28、35)

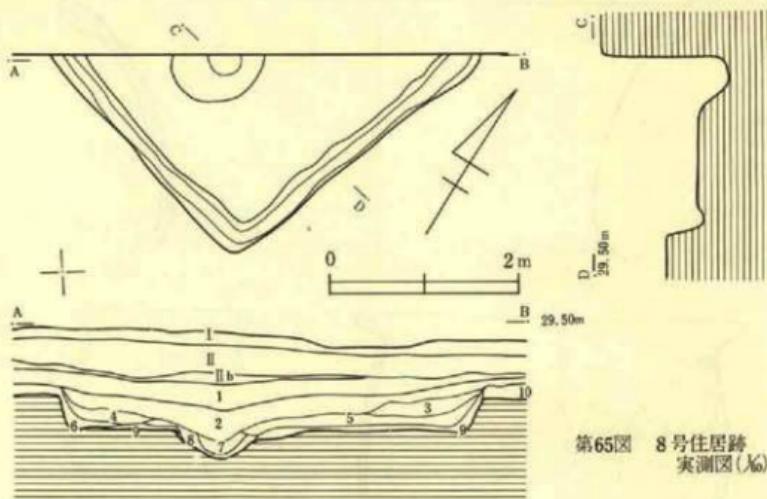
6・7号住居跡に約3mと近接して検出された住居跡である。検出された部分はコーナー部分のみでその大半は調査区域外へ延びてしまつており、その規模等については述べる根拠を持たない。

造構確認面より床面まで約40cm、壁はほぼ垂直、周溝は幅約20~25cm程度掘るものと思われる。セクション面に直徑1m、床面よりの深さの掘り込みが検出されているが柱穴と考えるには多少たよりない掘り込みである。

遺物の出土はあまり多くはないが特徴的な遺物の出土がみられ大型甕破片(1)あるいは皿(5)の出土がみられる。(5)においては墨書きがされており「持」の文字が読み取ることが出来る。

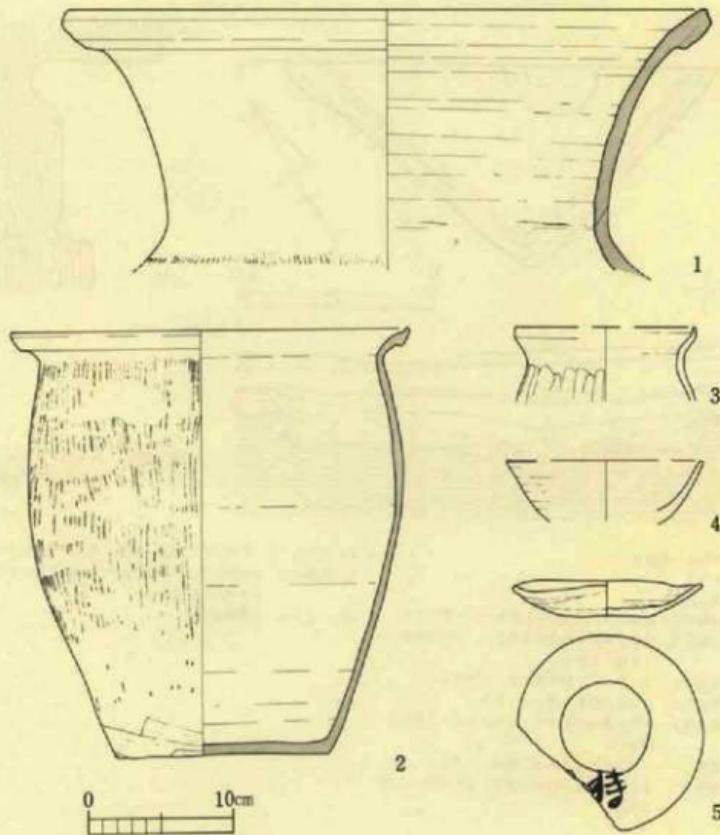
8号住居跡 (212-003-008) 出土遺物一覧

番号	器 形	遺存度	法 量			内 容	備 考
			口径	高さ	底径		
1	大型甕	口縁のみ	45.0	×	×	暗褐色 黒みをおびる部分あり、胎土中に白色粒子を多く含む。焼成良好。外一タタキ肩以上はナデを施す。口唇部にヘラで面とり細い刻みがみられる。内一ヨコナデ以下肩タタキナデ	
2	甕	3/4	27.5	28.5	14.5	黄褐色 部分的に黒赤褐色部あり胎土、焼成良。肩部スス付着目立つ。肩上一下位タタキ(細め)下半ナデタタキ痕消えかかる。底部ヘラ削り、口縁ヨコナデ内面タタキ+ヨコナデ	
3	甕	口縁のみ	12.5	×	×	赤褐色 胎土、焼成良、外面にススの付着肩部ヘラ削り、肩一口縁ヨコナデ肩のしまりよわく口唇部垂直に立つ	
4	壺	口縁のみ	13.5	×	×	赤褐色 胎土、焼成良好、体部から口縁へゆるやかな立上りをなす。底部縁辺ヘラ削り	
5	皿	口縁一部欠	13.0			淡赤褐色 全体にゆがんでいる。胎土、焼成良、ロクロ整形 底部回転糸切り	墨書き「持」あり



第65図 8号住居跡
実測図(%)

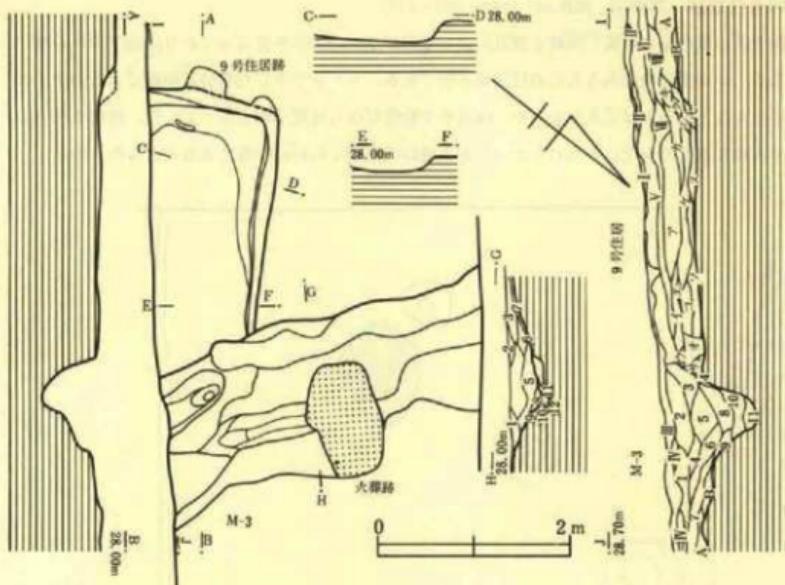
- I. 耕作土-黒色土
- II. 褐色土
- III. 黑褐色土
- 1. 暗褐色土 新期テフラに近似しもやもやした感じの土。
- 2. 暗褐色土 粒子やや粗く粘性あまりない。やや大粒のローム粒子を含む。
- 3. 暗褐色土 2よりローム粒子混入多くやや明るい。
- 4. 黑褐色土 8に比べ砂質っぽい土である。
- 5. 暗褐色土 かなり黒っぽくなり、混入するローム粒子も細かい。
- 6. 褐色土 ロームブロックを多く含む。くずれ。
- 7. 褐色土 4にある様な、砂質っぽい、若干のローム粒子入る。
- 8. ロームブロックのうめ土柱穴、周辺うめ土と思われる。
- 9. 黑褐色土 洪化物を多く含みまたローム細粒子及びブロック状ロームも入る。
- 10. ソフトローム漸移層



第66図 8号住居跡出土遺物実測図(×)

9号住居跡 (第67図 図版29) (212-003-012A)

調査区の東端においてM-3・火葬跡等に切られまた攪乱も多くその精査は困難であった。プランは一辺約3.5~4mのはば方形を示すものと考えられ残存するプランは4程度である。造構確認面からの掘り込みは10~15cmを計り床はやや軟弱でやや凹凸が目だつ。壁はやだらだらとした感じである。柱穴は調査区内においては確認されていない。特記事項としては床面はば全面に炭化粒及び少量の焼土粒が認められ、また炭化した米が検出されている。残念ながら攪乱、切り合い等によって、特に本住居跡の時期を明らかにする様な遺物の出土がみられなかったため不明とせざるを得ないものの、古墳時代後期頃として考えてもよいと思われる。



第67図 9号住居跡・M-3号跡実測図 (A)

9号住居跡J—Iセクション土層説明

- I. 明暗褐色土 C粒若干、砂質。
- II. 暗褐色土 焼土若干、若干砂質。
- III. 暗褐色土 C粒若干、焼土若干、若干砂質。
- IV. 明暗褐色 若干砂質、黃色。
- A. 暗褐色土 ローム土が斑状に混入する。
- B. 暗褐色土 黃褐色土斑状に少量C粒若干(小)。
- C. 暗褐色土 色調やや濃い、黃褐色土斑状に若干。
- D. 暗褐色土 黑褐色土若干。
- E. 暗褐色土 黃褐色土斑状に少量、黑褐色土若干——木根による擾乱。
- F. 混暗褐色土 若干黑色味帯びる。燒土粒若干。
- G. 暗褐色土 焼土若干、黃褐色土若干。
- H. 暗褐色土 焼土少混、黃褐色土斑状に若干。赤味帯る。
- K. 黑褐色土 (暗褐色地やや黒色粒帯)褐色土斑状に若干。

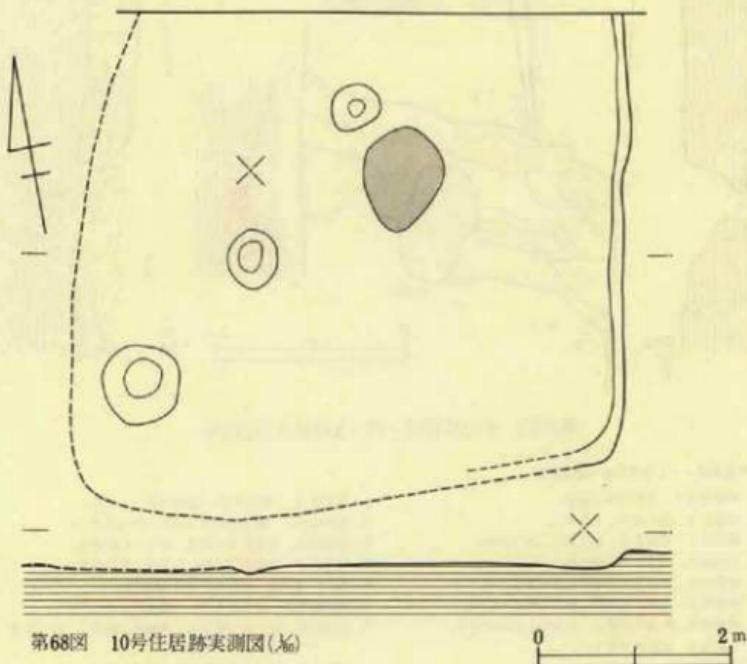
- V. 黒褐色土 (黒色味強い)褐色土斑状に若干。
- VI. 混暗褐色土 褐色土斑状に若干、燒土粒若干。
- VII. 暗褐色土 黃褐色土が斑状に少混、C粒若干。
- 達. 暗褐色土 黃褐色土斑状に少混より色調明るい。
- B. S・F・LとAとの漸移的な層 (黄褐色)
- C. 混暗褐色土 黃褐色土若干、燒土粒若干。
- サ. 暗褐色土 焼土を少量混入、黃褐色土斑状に少混、色調浅い。
- シ. 暗褐色土 ローム土少混、若干黃味帶びる。
- ス. 暗褐色土 L・B若干、黃褐色土斑状に若干、若干黃色味帯びる。
- セ. 混黃褐色土
- ソ. 暗褐色土 黑褐色土若干、若干しまりある。
- タ. 暗褐色土 ローム粒若干、ローム土若干、ややしまりがある。

H—Gセクション土層説明

1. 暗褐色土 ローム粒子若干、微粒子が少量含まれる。
2. 暗褐色土
3. 黑褐色土 ローム粒子若干、褐色土が斑状に混入。
4. 暗褐色土 ローム粒子少混、ローム土少量含む。ローム土は全体に斑状となる。やや黄色味帯びる。
5. 暗褐色土 ローム土が若干混入、木炭粒。燒土粒が若干混入。褐色土が斑状に若干混入、4層より黑色味帯る。
6. 黑色土 褐色土が若干斑状に混入。
7. 暗褐色土 ローム微粒子が少量混入。
8. 暗褐色土 (小)ローム土やや多、ローム粒若干、黄色味帯びる。
9. 暗褐色土 ローム土少混、9層より暗褐色味強い。
10. ローム土及びブロック層 比較的軟。
11. 燃土・木炭粒子 暗褐色土の混合層。

10号住居跡（第68図 図版29）(212-003-015)

調査区の最西端に位置し深耕と攪乱によりそのプランの大半を失なっており床面?のみの検出である。一部壁の検出あるものの柱穴等不明である。トーンで示した部分は炉跡であるが焼土の形成もさほど十分とは言えなかった。床はやや軟弱ながらほぼ平坦となっていた。時期を明らかにする様な遺物の出土はみられなかつたが古墳時代後期ぐらいに位置するものとなろうか。

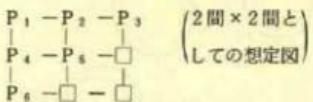


第68図 10号住居跡実測図(1/6)

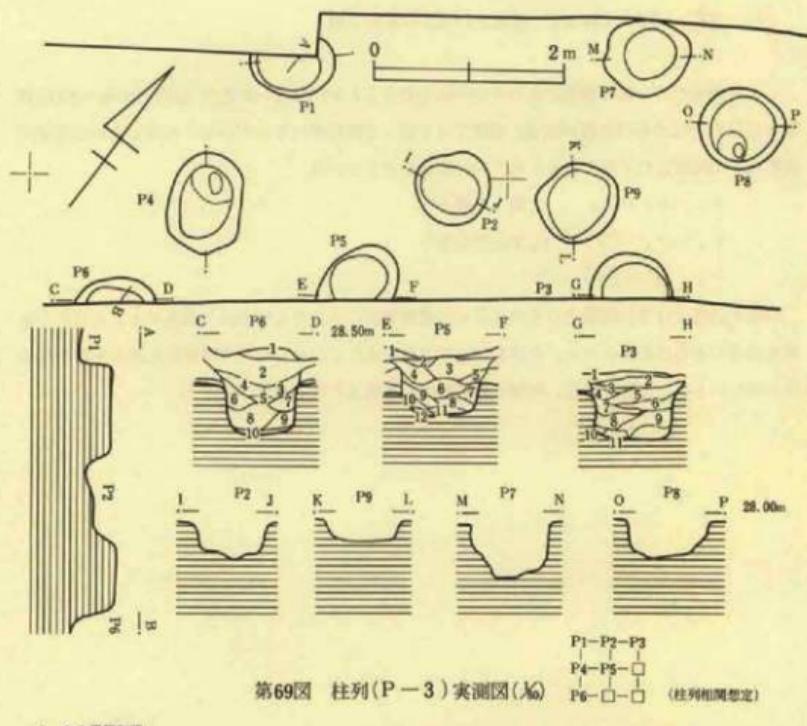
0 2 m

2. 柱 列 (第69図 図版30) (212-003-010)

この柱列もごく一部の調査でありその全体を見ることが出来ないが各柱穴間は180cm~200cm程度ではほぼ列をなすものと思われる。現状では2間×2間程度はまちがいなくみることが出来るが実際はどの程度かは不明である。軸方向は南北を示している。



路線の調査では常に問題となるのは各々の造構等がどうしても部分的な調査にとどまりその全体を視ることが出来ないため、全体を知ることが出来なくなりまたその時期等も知る手がかりを得られないということになる。時期・性格共に本造構は不明である。



第69図 柱列(P-3)実測図(%) (柱列相間想定)

C-D土層剖面図

1. 黒褐色土 C粒若干、地土若干含み。全体にローム塊状が混入。
2. 黄褐色土 ローム粒、ロームブロックが若干混入。C粒が全体に少量混入。黄褐色土少混(斑状)
3. 黑褐色土 ローム粒若干混入。黄褐色土が斑状にやや多く混入。
4. 黄褐色土 ローム粒、ロームブロック若干混入。黄褐色土若干が斑状に混入。C粒若干、3層より細い色調。

E-F土層剖面図

1. 黑褐色土 C粒若干。
2. 黄褐色土 C粒、ローム粒若干。
3. 黑褐色土 黄褐色土が斑状に若干混入。C粒若干。
4. 黄褐色土 黄褐色土が斑状に若干混入。C粒若干。
5. 黄褐色土 ローム微粒若干。画面土に少混、色調明るい。
6. 黄褐色土 ローム土斑状に若干。C粒若干、ローム粒若干。黒褐色色味帶びる。

G-H土層剖面図

1. 黑褐色土 C粒若干、黄褐色土斑状に少混、色調明るい。
2. 黄褐色土 ローム粒若干、C粒若干。佛土粒若干、黄褐色土斑状に少混、色調やや明るい。
3. 2と同じだが、黒褐色土が混入し色調やや暗い。
4. 色調は3と同じだが、ローム粒は含まれない。
5. 黄褐色土 ローム粒(大・小)若干、C粒若干。佛土粒若干。黒褐色土若干混入。黄褐色土斑状に若干混入。

6. 黄褐色土 黄褐色土が斑状にやや多く混入。ローム粒、ロームブロック若干混入。

7. 6層に似る。
8. 黄褐色土 ローム粒少量混入。黄褐色土が、斑状に少量混入。
9. 黄褐色土 黄褐色土多混、黄褐色土若干混入。黄色味を帯びる。
10. 黄褐色土 黄褐色土。

P1-P2-P3

P4-P5-□

P6-□-□ (柱列相間想定)

7. 黄褐色土 ローム土少混。C粒若干。ローム粒若干。色調明るい。褐色味強。

8. 黄褐色土 ローム土斑状に若干。黒褐色土斑状に若干。黒褐色色味強。

9. 黄褐色土 黄褐色土斑状に少混。

10. 黄褐色土 黄褐色土少混。褐色味強。

11. 黄褐色土 黄褐色土斑状にやや多く混入。

12. 黄褐色土 ローム土少量混入。黑色土若干。

6. 黄褐色土 L-B若干、ロームブロック状に若干。ローム粒若干。黒褐色土少混。色調黒褐色味帶びる。

7. 黄褐色土 ローム粒若干。黒褐色土少混。黒褐色味強。

8. 7層と同じだが、より黒褐色味が強い。

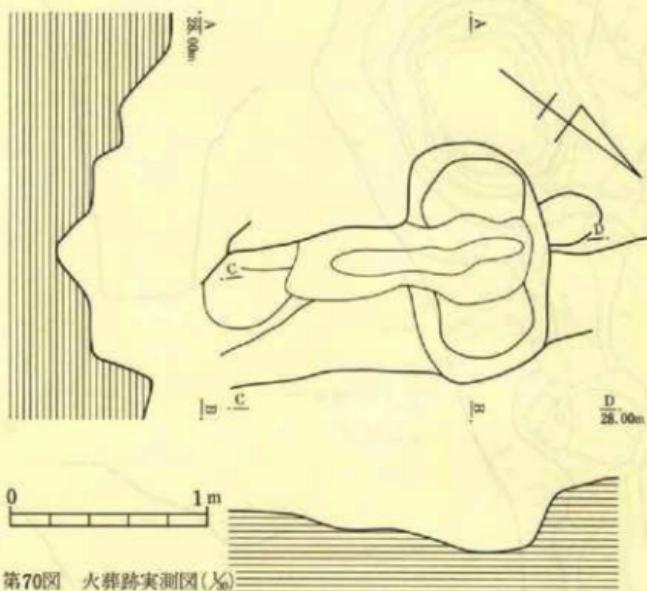
9. 色調は6層と同じだが、L-Bをやや多く含む。

10. 色調は8層と同じだが、ローム土を若干含む。

11. 黄褐色土 ローム土少混。黑色土若干。L-B若干。

3. 火葬跡 (第70図 図版31) (212-003-012C)

M-3を堀り込んで作られた火葬跡である。ただ近世の擾乱が一部に入り込んでいる。プランは長円形気味の方形で幅約1.3m・長軸約2.2mを計りローム面よりの掘り込みは70cm程であったと考えられる。骨は持ち去ったものとみられ取り残された骨粉及び炭化物及び灰等の散布がみられた。

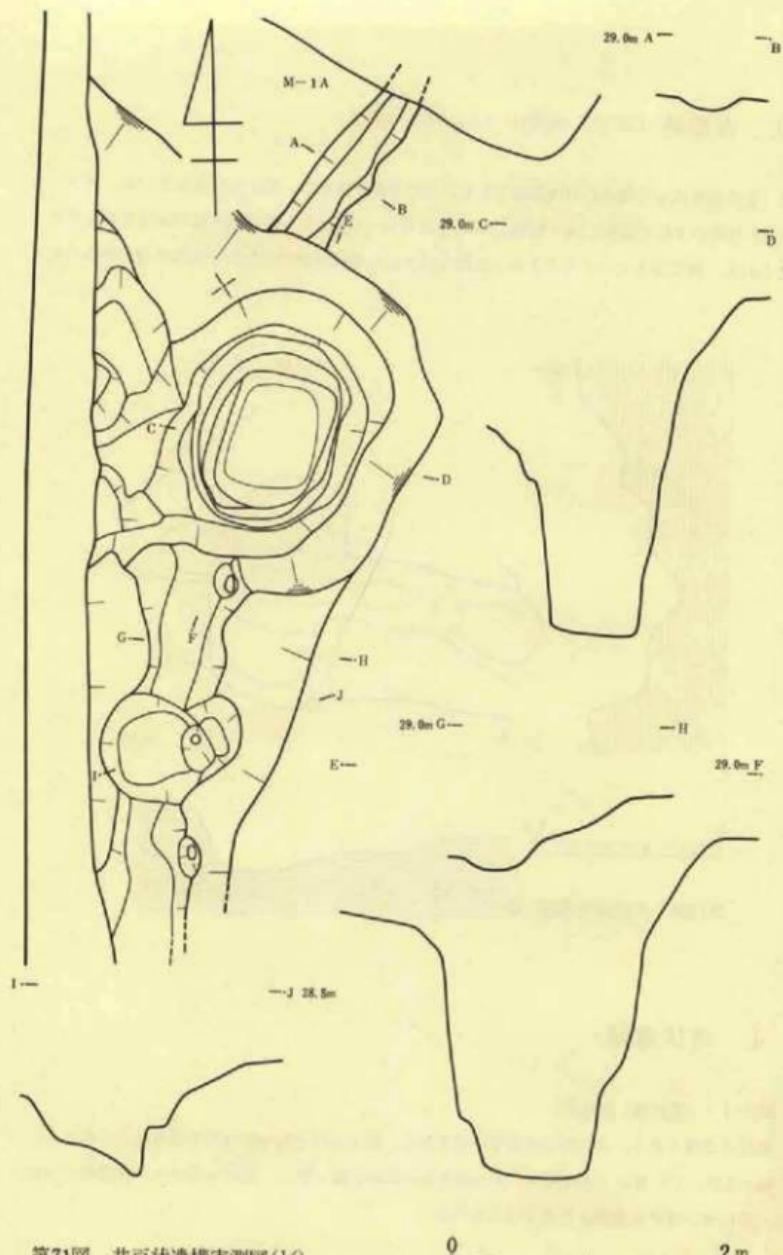


第70図 火葬跡実測図(%)

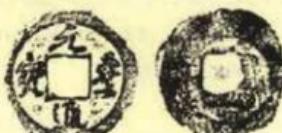
4. 溝状遺構

M-1 (第71図 図版30)

溝状の遺構である。共に時期性格等不明である。幅1m深さ40~60cm程の掘り込みを有する。(M-1 B, C) M-1 Aは幅20~30cm深さ5~10cmと幅も狭く、浅いもので井戸状遺構へつながっている。井戸状遺構より古くなるものか。



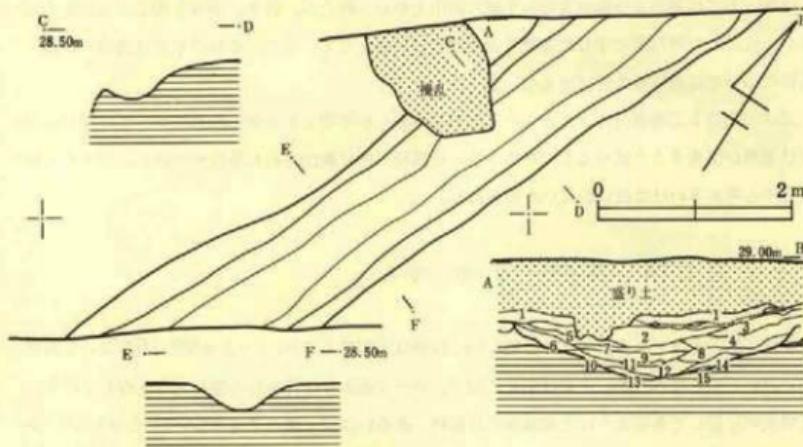
第71図 井戸状造構実測図 ($\frac{1}{40}$)



第72図 井戸状遺構出土遺物実測図「元豊通宝」(原寸)

M-2 (第73図 図版31)

柱列及び9号住居跡にはさまれる位置に在残する。これも一部のみの検出でその全体を知ることは出来ない。幅130~150cm深さ40~60cmを計るしかりした溝である。



第73図 M-2 実測図(16)

1. 淡褐色土 砂質一ヶついた土。
2. 黄褐色土 黄褐色土少量斑状に含む。
3. 喰褐色土 黑褐色土若干斑状に含む。
ローム微粒若干含む。
4. 淡褐色土 黄褐色土少量斑状に含む。
燒土粒、木炭粒若干。
5. 喰褐色土 黄褐色土若干斑状に含む。ローム粒若干
6. 淡褐色土 黄褐色土斑状に若干、ローム粒(小)若干
7. 喰褐色土 黄褐色土やや多く斑状に含む。
8. 淡褐色土 黄褐色土斑状に若干含む。
9. 喰褐色土 やや淡色、黄褐色土少量斑状に混入。
10. 淡褐色土 黄褐色土斑状にやや多く混入
6、12層より色調明るい。
11. 淡褐色土 黄褐色土多混、若干黃色味帯びる。
12. 淡褐色土 黄褐色土斑状に若干、木炭粒若干。ローム粒若干。若干黒褐色味帯びる。
13. 喰褐色土 黑褐色土若干 ローム粒(小)若干
14. 淡褐色土 黄褐色土斑状に若干、黒褐色土少混、やや黒褐色味帯びる。
15. 淡褐色土 ローム土少混

M-3 (第67図 図版31)

9号住居跡側は幅1.4m深さ60cmとやや深い掘り込みであるが右側は30~50cmと浅い溝で掘り込みも壁がダラダラとしたものである。時期的には火葬跡よりは古くなることはたしかだが、火葬

跡の時期は不明であるため下限をも明らかにし得ない。ただ江戸以前であるのではないかと思われるため、それ以前に作られた溝と考えておきたい。またその性格についてはごく限られた部分の調査であるためそのことについて述べる根拠を持ち得ない。

井戸状遺構 (第71図 図版32) (212-003-013)

本遺構も道路及び擾乱等でその全体を明らかにすることが出来なかつたため、これが本来的にどのようなものなのか提示することは出来ない。

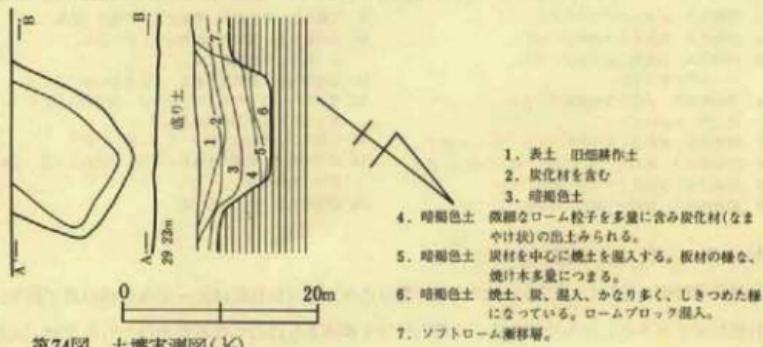
溝状40~50cm程掘り込んだ上で長軸約2m・短軸約1.5mのやや長方形気味に深さ2.4m程(遺構確認面より)掘り込んでいる。壁はほぼ垂直・底面は平坦である。

遺物としては溝部より陶磁器類の小破片の出土がみられたが、各々、全体を知るようなものはなかった。ただ第72図に示した古銭「元豐通宝」が出土しているが、これのみでは遺構の時期・性格については述べることは出来ない。

溝状の部分も道路部分にさえぎられてどちらへ続くか不明であるが、方形でコーナー部分に井戸状遺構が出来るようになるものだろうか。道路反対側に検出された溝はやや浅く、必ずしも続くものと考えるわけにはいかないと思われる。

5. 土 壤 (第74図) (212-003-007A)

性格不明の土壤である。プランは幅1.5m、長軸は不明であるが1.5~2m程度の方形ないし長方形に近いものとなろうか。主軸は南北に向う。ローム面よりは70cm程の掘り込みを有している。土層説明に記してあるように土壤底面には板材、あるいは炭・焼土で充ちていて、その上にロームブロックを混入した暗褐色土でフタをしたように(4)になっている。板材はやや生焼け状になっていた。当初火葬跡かと考えたが骨粉・灰等火葬跡なら残りそうなものも検出されず、本土壤の時期及びその性格を示す何らの遺物の出土もみられなかった。



第74図 土壤実測図(1/6)

第 4 章

酒々井町墨古沢遺跡

第1節 遺跡の位置

(第2・75図 図版36)

古沢遺跡は、酒々井町墨字花の作1421-1他に所在する。遺跡南側は東関道酒々井のバーキングエリアとなっている。

高崎川の主流を北側に支流を南側に對している台地上である。支流側はその最奥に近くなっている。

調査地点は遺跡の所在する台地においてはやや奥まった位置であるが、東側にはさらに支谷が入りこんでいる。

遺跡自体は北側、高崎川主流方面にむかって主に遺跡の中心部になるものと考えられる。

第2節 調査の概要

1. 調査の経過

本遺跡の調査は、昭和54年8月22日から9月7日まで行った。

調査区域は、遺跡の所在する台地の南端部分に位置するもので、道路拡幅部分が対象である。このため、調査区の最大幅は3mにも満たず、平均1.5~2m前後であり、東側台地上では漸次幅員が減少し、片側が崖となっているため調査上の危険が生じる程であった。

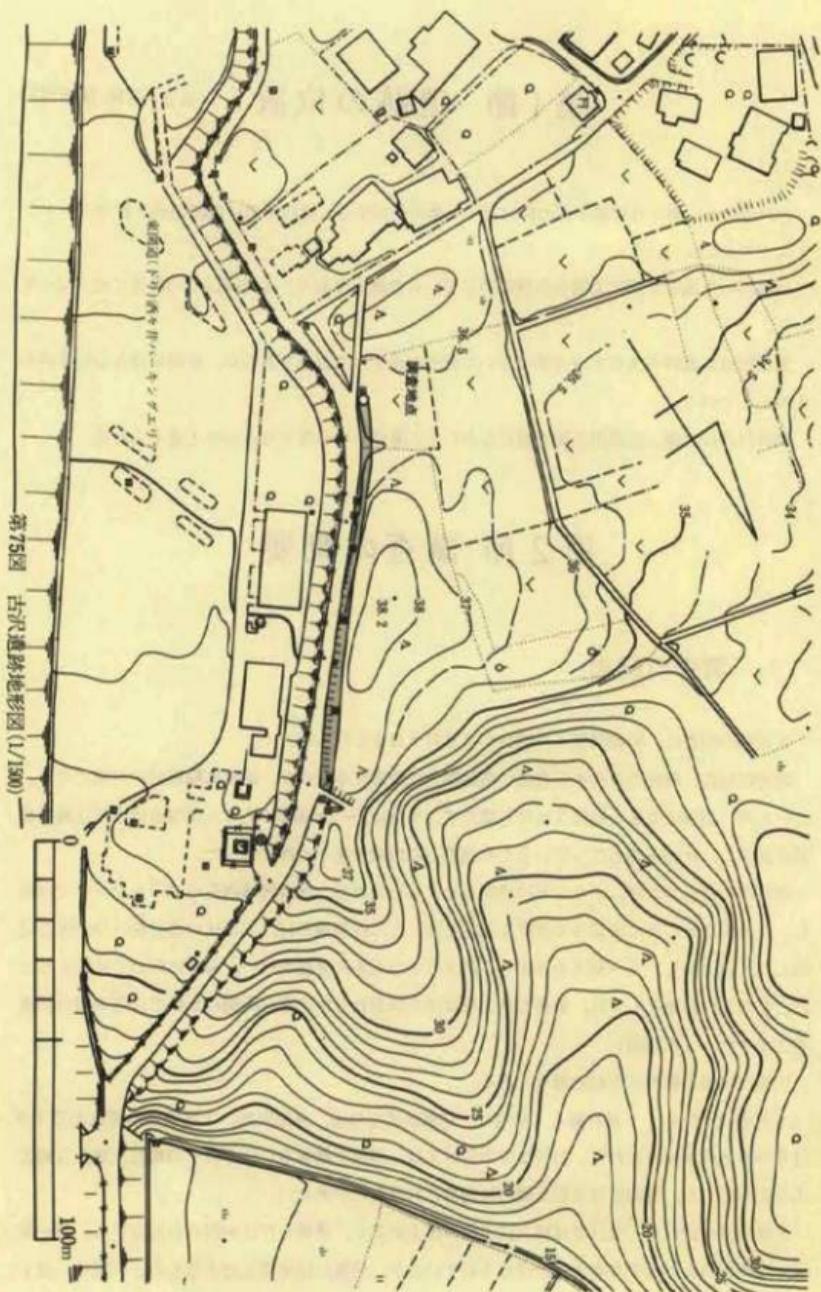
調査の方法としては、グリッドの設定もままならぬため、調査区域内を一つのトレンチと見做し、これを2mごとに区切って各区を設定した。ただ西側端部は、三角状の部分を一つの区と見做した。以上から、0~36区を設定し1区より1つおきに発掘を行い、必要に応じて拡張することとしたが、結果としては、東側台地上をほぼ全域調査し中央部~西側にかけては95%前の調査率となった。(第76図)

調査の経過と概要是下記の通りである。

(8月22日~24日) 器材搬入・草刈り・発掘区設定の後、発掘開始。1区では暗褐色土でザラ目質の落込みが検出された。21区までの各区では、黒色土層あるいはその下の褐色土層から縄文式土器が出土し、量的には黒色土層内に包含されるものが多い。

(8月25日~27日) 31区では縄文式土器の出土が多く、遺構の存在が窺われ拡張する。34~36区では調査前より低平な高まりが認められていたが、発掘の結果盛土によるものと判明し、最下

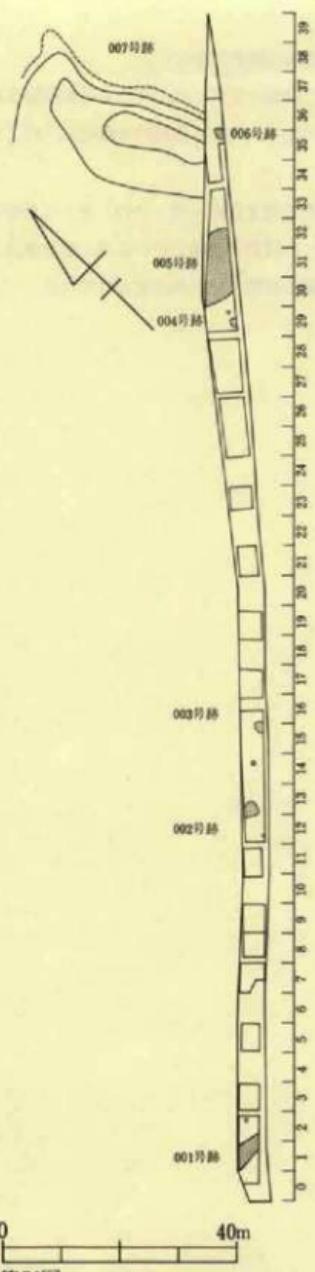
第75図



層から「開元通宝」が1枚出土、この他の各区は遺物の出土は極めて少ない。

(8月28日～9月7日) 調査区内に散在して検出された遺構の発掘・図面作成・写真撮影を行う。遺構としては、溝・土壤・住居跡及び土手状のものである。埋戻し後器材を撤収し、終了する。

なお本遺跡の名称は、酒々井町墨「古沢」遺跡（千葉県埋蔵文化財一覧 1978）として登録されている。なお本遺跡は酒々井町文化財分布地図（1978）に同名で登録しているが、調査地点とは地点も多少異なるようであるが、今回分布調査した範囲に遺物の分布が確認されている。



第76図
調査区域及び遺構配置図(1/500)

2. 遺跡の層位

調査区域内における遺構外の層序は、地形上から大きく二通りに分けられる。一つは第0区～20区までの部分であって、南から南東へと緩かに傾斜する地形である。他の一つは第21区～36区までの部分であって、台地平坦部及び前者に連なる緩傾斜の地形である。前者の層序は、第11区東壁面に見出されるようなものである。II c層の黒色土は、色調の濃淡層の厚さの増減はあるものの全面に分布しており、他区ではこの層の上面に焼土が薄く層をなしているのが認められた。II d層は、この付近が最も厚く南西・北東に向って漸次薄くなっている。地形によるものと思われる。II e層はII d層からIII層への漸移的な層である。III層はこの付近が最も薄い。遺物の包含は、II c・II d層に多く、II e層からの出土はない。後者の層序は、001号跡付近あるいは土手状遺構下に見出されるようなものである。第30区付近あるいは25区～21区の道路側では、表土層下にロームを主体とする盛土層が認められるが、この層の時期は不明である。その他では、I表土層-II a黒褐色土あるいは暗褐色土層-II b褐色土層-II c漸移層-III軟質ローム層-IV～硬質ローム層の層序が認められる。遺物はII a～II bに包含されているが、全体として量は少ない。後者のII a層は、前者のII c層に相当するものかどうか不明である。

第3節 遺構とその遺物

001号跡（溝状遺構）（第77図、図版36）

調査区南西側に位置し、第0～2区にかけて検出された溝状遺構である。この付近の微地形は、北西から南東に向って緩やかに傾斜している。遺構の検出は軟質ローム面で行った。

全体として暗褐色土層が主体となすが、下部では黒色土・黒褐色土の堆積が認められる。また、第V・IX層の暗褐色土層中には、ローム・ブロックが混入し、IX層中ではやや多く含まれる。a～c層は自然層でそれぞれ IIc・IId・III層に相当する。これによると、本跡は黒色土層上面よ

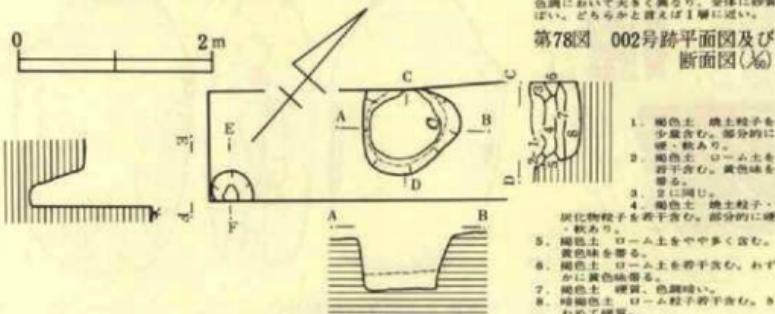


第77図 001号跡平面図及び断面図(%)

- a 黒色土、褐色土を含む。
- b 塗色土、褐色土を含む。
- c S・F・L

- I. 黒色土 (暗褐色土)。
- II. 褐褐色土。ローム土を少く含む。褐色土よりも色調が深く、若干黄味を帯びる。軟堅化がやや多い。
- III. 塗褐色土。ローム粒を含む。やや黑色味を帯びる。
- IV. 暗褐色土。ローム土を多く含む。褐色味を帯びる。
- V. 暗褐色土。ローム粒を含む。若干黑色味を帯びる。
- VI. 暗褐色土。ローム粒を含む。若干黑色味を帯びる。
- VII. 暗褐色土。ローム粒を含む。ローム粒を多く含む。若干黑色味を帯びる。
- VIII. 暗褐色土。ローム粒を含む。ローム粒を多く含む。若干黑色味を帯びる。
- IX. 暗褐色土。ローム粒を含む。若干黑色味を帯びる。
- X. 暗褐色土。ローム粒を含む。若干黑色味を帯びる。
- XI. 暗褐色土。ローム粒を含む。
- XII. 黒色土。
- XIII. 黒色土。
- XIV. 黒色土。
- XV. 黒色土。
- XVI. 黒色土。
- XVII. 黒色土。
- XVIII. 黒色土。
- XIX. 黒色土。
- XX. 黒色土。
- XI-XIXはI-II、a-cの各層と土壤、色調において大きくななり、全体に砂質っぽい。どちらかと言えば土層に近い。

第78図 002号跡平面図及び断面図(%)



1. 黒色土。地上粒子を少く含む。部分的に硬い。軟弱。
2. 黑褐色土。ローム土を粒子含む。黑色味を帯びる。
3. 2に同じ。
4. 黑褐色土。地上粒子を多く含む。部分的に硬い。
5. 黑褐色土。ローム土をやや多く含む。黄色味を帯びる。
6. 黑褐色土。ローム土をやや多く含む。わずかに黄色味を帯びる。
7. 黑褐色土。ローム土を含む。やや軟弱。
8. 黑褐色土。ローム粒を含む。やわめて硬質。

り掘込まれていることが判る。南西側は搅乱が著しい。

埋土中からは縄文式土器片が出土したが、本跡に伴うものではない。

形態・規模・調査範囲が限定されていたため長さは不明だが北西—南東に走行するもので、上面幅2.68m・底面幅0.58~0.3mを測る。横位断面は、中位または下位で稜をもち、上方に向って大きく開く形を呈する。溝底面はほぼ平坦であるが、北西から南東へ向って傾斜し、両端での比高差は約13cmを測る。なお、北東側に検出されたピットは搅乱によるものであり、本跡と関連するものではない。検出面からの深さは56~61cmを測る。

002号跡（第78図、図版37）

調査区内中央よりやや南西側に位置し、第12・13区にかけて検出された土壤である。遺構は漸移層面で検出したが、本来の掘込みはもう少し上位にあったものと思われる。土壤の北東側の一部が調査区域外に延びているため未調査である。

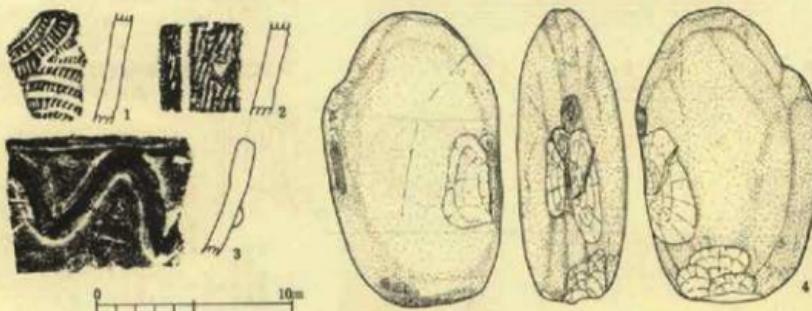
遺構の埋土は、土壤底面に堆積する暗褐色土層の他は全て褐色土層で、焼土粒子・炭化物粒子を若干含み、部分的に硬くなっている所もある。暗褐色土層は全体に極めて硬質である。

遺物は縄文式土器片と鐵石がある。土器片は褐色土層中より数点出土したにすぎない。鐵石は土壤北東側で暗褐色土層上面から出土している。

土壤は、NE-SW 1.04m (0.74m) • NW-S E 0.86 + α m (0.69m) を測り、北東側にやや突出する不整円形を呈するものと思われる。検出面からの掘込みの深さは56cmを測り、北東部分及び西側部分を除きほぼ垂直に掘込まれる。底面は細かな凹凸があるものはほぼ平坦であり比較的堅硬である。

遺物（第79図、図版37）

土器としては図示した少破片がみられたが覆土中の出土である。4は鐵石。土壤底部直上より



第79図 002号跡出土遺物実測図及び拓影(3)

の検出である。石器両端に敲打痕が特に著しい。その他側面をも磨石的に使用している。時期的には本遺構を縄文中期中葉に位置づけることが出来ようか。

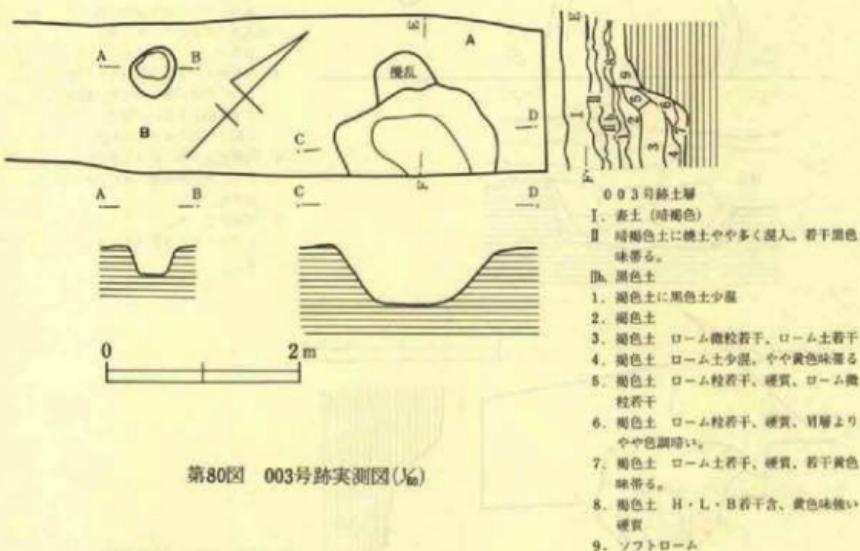
003号跡（A）（第80図、図版37）

調査区域内ほぼ中央部に位置し、第15・16区にかけて検出された土壌である。褐色土層面で遺構の存在が窺われたが、プランを明確に把握することは困難であったため、軟質ローム面まで下げて確認した。

遺構埋土は、最上層に黒色土が若干混入する褐色土層が堆積するが、この黒色土は上層からのしみ込みによるものである。全体に褐色土が充満しており、各埋土の色調・土質の差は小なるものである。第VII層以下の層は他の層に比べ硬質で、第IX層ではローム・ブロックを若干含む。

遺構埋土中からは少量の縄文式土器片が出土したが、遺構底面に密着するものはない。

南西側は調査区域外へ延びており未調査であるが、この部分は既に道路建設によって破壊されているものと思われる。北東—南西 1.60m (0.68m)、北西—南東 0.83 + α m (0.58 + α m) を測り、不整な円形もしくは方形を呈するものと思われるが、底面の平面形態からみれば北西—南東方向に不整な長い長円形を呈するかとも思われる。底面は概ね平坦で、検出面からの深さ61cmを測る。堀込みは北西側は垂直に近いが、北東・南西側ともやや傾斜をもつ。



第80図 003号跡実測図(1/50)

003号跡 (B)

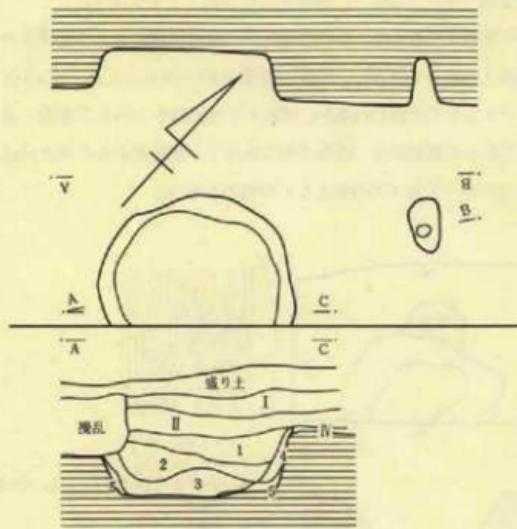
調査区域内中央よりやや南西側に位置し、第14区内に検出されたピット状のものである。褐色土層面で検出した。プランは $52 \times 41\text{cm}$ を測る不整円形を呈し、深さ 31cm を測る。

褐色土が充満していた。

埋土上部より縄文式土器片が数点出土したが、遺構に伴うかは不明。

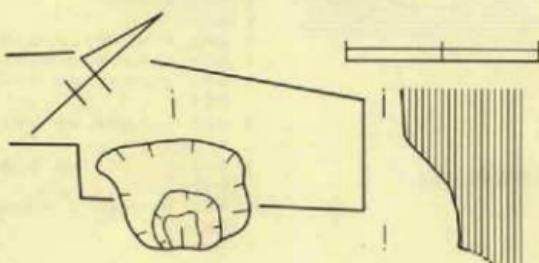
004号跡 (第81図、図版37)

29区、住居址に近接して確認された土壤である。IIb層下位においてプランを検出した。覆土は壁付近でややくずれ込み状態を示したもの他は色調等大きな変化はみられなかった。遺物も明確な時期を示すものは検出されていない。



第81図 004号跡実測図(%)

- I 暗褐色土、いわゆる表土。
- II 黒色土、本遺跡の遺物包含層。
- IV 暗褐色土、一般のIIb、漸移層的土。
- 1 暗褐色土、5までのうちで色調は一番暗い。粒子はやや荒くパサつく。
- 2 暗褐色土、1よりやや明るい。粒子は1よりやや細かい感じがある。ハードロームのブロックの混入みられるがそれほど多くはない。
- 3 暗褐色土、1ほどでもないが2よりやや暗い感じがする。粒子は2と同じくらい。細かいローム粒子の混入多くみられる。
- 4 暗褐色土、他に比べやや黄色がある。旨の漸移層の流れ込みの感ある。
- 5 暗褐色土、主としてハードロームブロックの流れ込みがみられる。

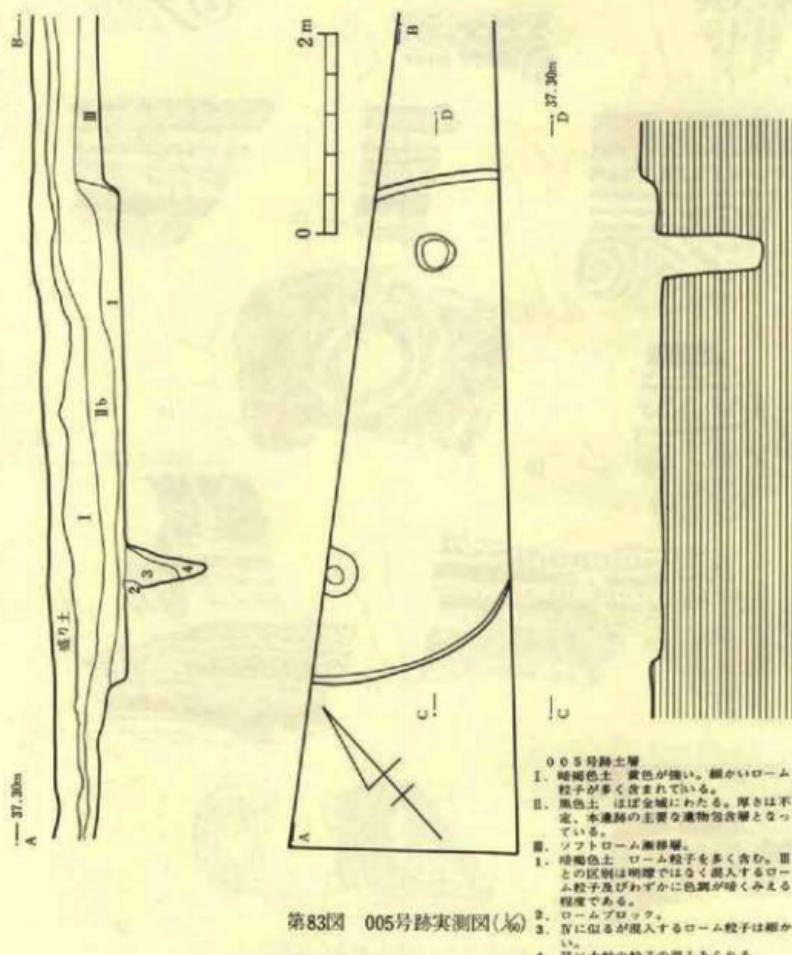


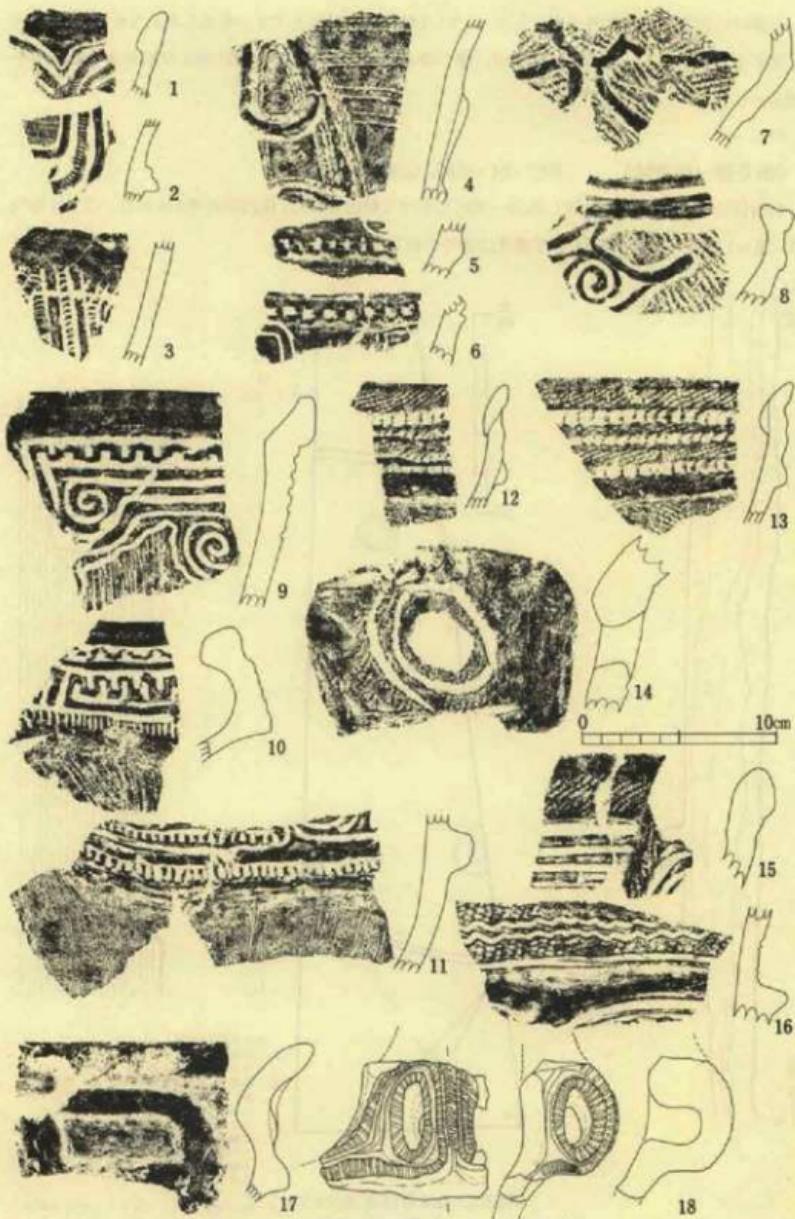
第82図 006号跡実測図(%)

全体の1%程度が調査区外へ出てしまっているが、ほぼ円形とプランを示し径1.8m程度の円形を呈するものである。底面はほぼ平坦、壁へゆるやかに立ち上る。確認面より約50cmの掘込みを測る。

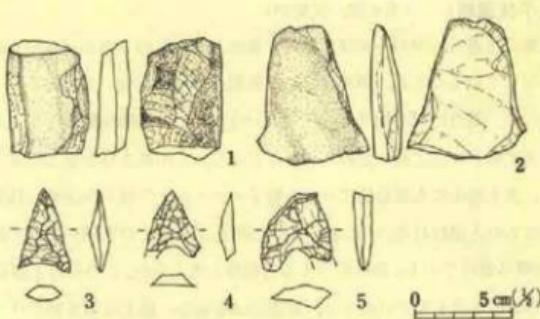
005号跡（住居跡）（第83・84・85図、図版38・31）

調査区の北西端近くに位置し第30～32区にかけて検出された。住居跡と考えられる。埋土は暗褐色（II b）層をも含み特に大きな変化は認められなかった。





第84図 005号跡出土遺物拓影及実測図(考)



第85図 005号跡出土石器実測図 (1.2=1/3, 3.4.5=1/2)

遺構中からは縄文式土器（中期中葉）が出土しており特に遺構中央部にいくらかまとまった出土がみられたが結局、個体としてとらえ得る様なものは出土しなかった。遺構自体の掘込みが浅いためか遺物はほとんど床面直上程度の位置から出土していた。

調査自体が極めて限られた部分調査であるため大半が調査区域外となってしまっているため、明確なプランを提示し得ないが直径にして4m程度の円形ないしは不整円形を示すものと考えられる。床面はソフトローム中に築かれれば平坦、床はさほど硬化してはいなかった。壁の立ち上がりはゆるやかである。柱穴は2本検出されており共にはっきりした1m近い掘込みをもつものである。炉その他の施設等は調査区内においては確認されなかった。

遺物 (第84・85図、図版39)

1. 2. 深鉢、1は口縁部、口縁部下に隆帯及び沈線により波形をなす。隆帯部には刻み目を施す。2は隆帯による区画内にヘラ状工具先端による沈線を施す。4は深鉢胴部、隆帯及び沿う様に刺穴を施す。5. 6器種不明、胎土中に砂粒含み焼成も悪い。沈線及び刺穴で文様を施す。7. 8. 深鉢・地文にL R、縄文、隆帯を施す。

9. 鉢、太い沈線及び区画内をヘラ状工具による沈線、10は浅鉢、かなり屈曲する。14は大型の浅鉢、波状口縁であろうか地文にR Lの縄文、沈線を穴にそって回す。15地文にR L太い沈線、うず巻状に入るもののか。16は波状に沈線に入る。隆帯にも沈線そう。17. 浅鉢、無文、太い隆帯のみ。30. 深鉢把手、山形を示し穿孔がある、隆帯及び沈線及び刻み目による。

これら全て一軒の住居跡からの出土であるほぼ床面上のもののみを選んでいる。拓影にたえられるものは図示したもののみであり、部分のみの調査であったためか、全体をみるとことのできる土器はなかった。石器は第85図に示した石斧及び鎌の出土がみられたが覆土中の一括遺物である。石斧は砂質安山岩、鎌は黒曜石製。

007号跡（土手状遺構）（第86図、図版38）

調査区域の東側に位置し、第34～36区にかけて検出されたものである。草刈りの時点での付近が僅少に高くなっていることと、第36区から北東側への傾斜が強いこと等から、何等かの遺構の存在を窺い得たが、調査区域が幅0.8m前後という狭さのため断面観察を主とした。

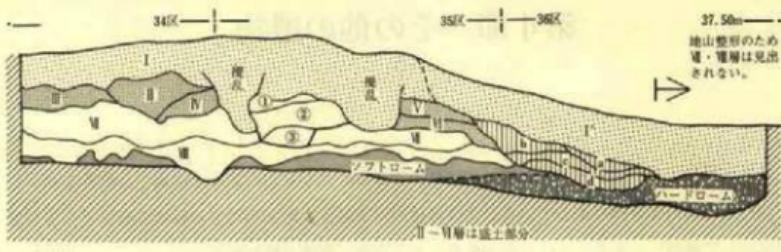
調査の結果、表土層下に盛土層が認められたことから、この高まりが盛土によって生じていることが判明した。表土層中にも部分的にローム粒子・ローム土の混入が認められることから、盛土が表土化されたものと思われる。いわゆる旧表土層は、第Ⅶ層との判別が困難であったため不明だが、第Ⅶ層は遺構外層序でのⅡc層に相当する自然層と考えられ、この層の上部が該当するとも思われる。第Ⅶ層から表土までの高さは、最高55cmを測る。盛土は第Ⅲ層がロームブロックを主体とする層である他は、暗褐色土・黒褐色土であり、ローム層土の盛土は少いものと言える。第Ⅲ層は第34区と第33区の間で消えるが、これをもって幅とするならば約4.5m前後となるが、第33区以西では暗褐色土層中にローム粒子の含まれる層が延びており、第27区北東側では、Ⅱc層上にローム土の層が認められる等盛土層と見做されるものがある。土手北東側は、表土層下が直ちに硬質ローム層となっており、削平されたことが窺える。ローム面上から表土面までの高さは、約1m前後を測る。北東側の傾斜の強さは土手南西側が極めて緩やかな傾斜を見せるのとは対称的である。

また、土手北東際に浅い溝状遺構が伴うようで、ローム面での幅は約90cm前後、深さ8cm前後を測る。確認が遅れたため、また道路側では擾乱が著しく平面形を明らかにすることはできなかった。

なお、第35区やや西寄りで盛土面より落込みが検出されたが、埋土は軟弱であり木根等による擾乱を受けたものと思われる。

本土手の平面形を把握するため10cmセンターでの地形測量を行ったが、これによても北東側の急斜が認められるのに対して、南西側は大きく流れていることが判る。また、土手は北側に向って低くなり、37.138mライン以降は北東側に向って延びている。これは北側に谷が入り込んでおり、地形を考慮したものと考えられる。土手南東側は、道路建設によって削平されており不明であるが、旧地形図から判断すれば調査区は平坦部の端に位置しており、これより南東側は急傾斜となって谷に落込むことが判る。従って土手が調査区南東側で切れるのか、あるいは北東側と同様方向を変えて南西側に延びるものか、現地形上からは不明の域を出ない。しかし、第27区での軟質ローム層が本土手の盛土層の一部とすれば、南西側に延びていたものと考えられる。

土手盛土中からの出土遺物は、少量の縄文式土器破片と一枚の古鏡がある。古鏡は、第35区西側において第Ⅶ層上面から出土したものである。



土質説明

底の 土層 上り 面込 よみ り	① 黒褐色土 棕色土少量混入する(軟弱)	a. 時間色土
上り 面込 よみ り	② 暗褐色土 硫土粒若干、黑色土若干	b. 黑褐色土
上り 面込 よみ り	③ 黑褐色土 硫土少量混入する	c. 暗褐色土
		d. 暗褐色土 黑色土・ローム土若干、硬質 〔路み固められた如く。〕

第86図 007号跡断面実測図(大)

- | | |
|-------------------------------|--------------------------|
| I. 褐土・暗褐色土 | V. 黑褐色土 硫土粒若干混入、やや暗褐色味強し |
| I'. 褐土中にローム土が少量混入する。 | VI. 黑褐色土 硫土粒を少量混入 |
| II. 暗褐色土 ローム土若干、やや色調淡くサラサラ | Ⅶ. 黑色土 |
| III. 暗褐色土 ローム土・ロームブロックをやや多く混入 | Ⅷ. 棕色土 |
| IV. 暗褐色土 ローム土を少量混入。 | |

第4節 その他の遺物

全て欠損品である。1・2は頭部、3は基部である。全て安山岩製。1は偏平な剥片を利用して削と丁寧な刃部を作り出している。2は再使用品である。断面四角形の棒状の磨製石斧を再度打ち出して整形してある。3は自然面を残してやや荒い剥離で整形する。

石皿（4）

石皿破片、安山岩である。ほんの表面のみの破片である。

石棒（6）

安山岩製の磨製、かなり大型のやや偏平気味のものと考えられる。

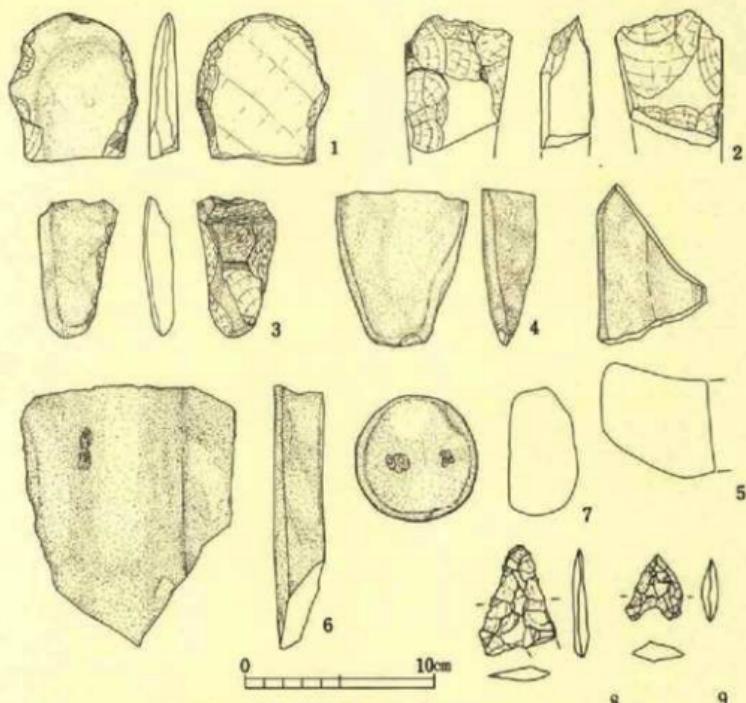
凹石（7）

小型で縁辺はよくすれている。表面に2ヶ所凹み部みられる。

石鎌（8・9）

黒曜石製、共に作りはやや粗雑、8は一部欠ける。えぐりは少ない。9は型のわりにやや厚みがある。全面に荒い剥離をしている。

表採資料を図示しているものの極く一部である。本遺跡の所在する台地上全体からは相当な量をみることが出来、また耕作中に集められた石器片は各所につみ上げられておりその種類は石斧・石棒をはじめとして石塔までみられた。遺跡の時期及び内容を示しているものがこれらであろうか。少なくとも印旛沼周辺の縄文時代遺跡において表採時にこれほど石材を豊かにみることの出来る遺跡はまれである。



第87図 酒々井古沢遺跡表探資料実測図(石器)

第 5 章

その他の遺跡の調査

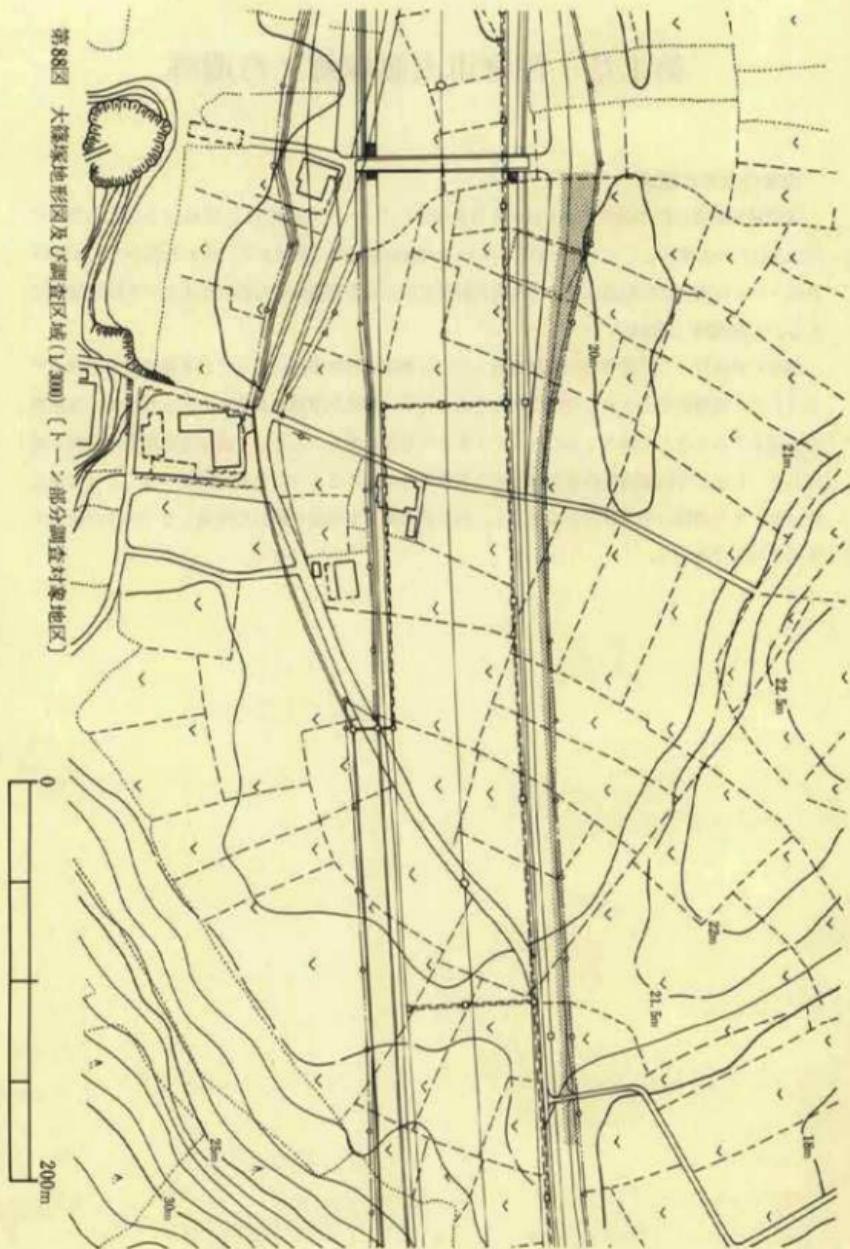
第1章 佐倉市大篠塚郷ノ台遺跡

調査の方法と経過

本遺跡の調査は昭和54年8月6日～8月8日まで行った。調査地点は鹿島川を望む台地上に形成された一大集落としてすでに知られている大篠塚遺跡の一部である。また北西から入る浅い谷をへたてた地点は昭和52年度に日本文化財研究所による調査の行なわれた太田・大篠塚遺跡である。（第88図 図版41）

調査対象区は、この遺跡の中央部を通っている東関東自動車道にそっている側道部分の調査であるため、遺構が検出される可能性が大であったが、現状が道路であるため、とりあえず拡幅部分を調査することとし長さ2mのトレンチを1つおきに掘ることとして遺構等の存在の有無を確認した。しかし今回調査区内からは、何ら遺構と考えられるような存在を確認することは出来なかった。また遺物の出土はほとんどなく、弥生式土器・土師器の極めて摩滅した小破片が数点出土したのみであった。

第88図 大隊地形図及び調査区域 (1/300) [トーン部分調査対象地区]



第2節 富里村七栄新開遺跡

調査の方法と経過

本遺跡の調査は、昭和54年9月17日から9月20日まで行った。

調査区域は、遺跡の所在する台地のほぼ中央部に位置するもので、道路拡幅部分が対象である。このため調査区の最大幅は2m前後で、平均1.5m前後である。

調査の方法としては、調査の対象が馬土手並びに堀に限定されていたため、調査区域全体を一つのトレンチと見做し発掘する方法を用いた。また、調査区が土手と交差すること、現在の道路工事の際に土手を削っていることから、本調査の主たる目的は、土手の断面観察及び基底部・堀の調査に置いた。従って調査区域内を細分することはしなかった。

調査の経過と概要は下記の通りである。

(9月17日～18日) 器材の搬入及び草刈り・発掘区の設定後発掘を開始。西側土手は、黒色土～暗褐色土の土を主体にして盛土しており、堀を挟んで東側の小さな土手は、ローム・ブロックを主体にして盛土している。堀は現在でも明瞭にそれと判明するもので、埋没はそれほど進んでいない。土手及び堀内からも殆ど遺物の出土はない。

(9月19日～20日) 図面作成・写真撮影を行う。埋戻し後器材を撤収し終了する。

なお、本遺跡の名称は、小字名を用いて「新開遺跡」とし、当センターの行っている遺跡のコードにより「324-001」とした。「324」は富里村を示し、「001」は当センターが富里村内で調査を行った1番目の遺跡であることを示す。遺構の名称については、報文中に使用した通りである。遺物は0001からの番号を付けた。

馬土手 (第89図 図版42・43)

土手A

主たる馬土手である。土手の高さは、基底面より最も高い部分で1.6mを計る。Bに比べてほぼその旧状を保っているものと考えられる。土手構築の第1段階として土層断面でみられるように旧表土を除去、ローム面を基盤として盛り土の中心は黒色土・褐色土を用いている。しかしながらこれらの土中に焼土層及び焼土粒の混入がみられるが部分的な一断面から判断することはここでやめておく。

土手B

堀の北東際に位置するもので、土手A・堀と平行し略東西に延びる低平なものである。この土手は、調査区内北西側で屈曲し北東方向に延びるが、北東に行くに従って漸次低くなり消失す

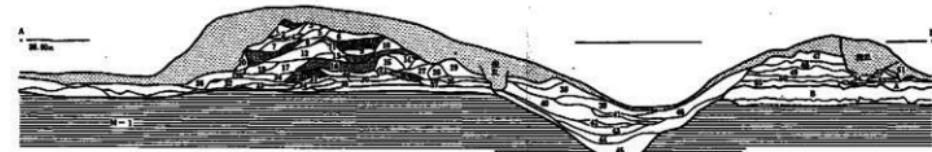
る。調査区域は、屈曲部から北東に延びる部分を縦断するように設定せざるを得ず、横位方向の調査はできず、土手幅等は不明である。

土手の高さは、基底面から最も高い部分で1.0mを測る。北東側については、土層断面図でも認められるように道路建設時において削平されており、旧状をとどめているか疑問である。また、この土手が調査区以東に延びていたか否かについては、道路・東関東自動車道の建設によって削平されており不明であるが、東関東自動車道以東では認められない。

土手Bの盛土は、土層断面図に示した通りであるが、大まかには、旧表土と思われる黒色土層の上に厚さ10~30cmで暗褐色土層を主体とする土が盛土されるが、南西側では厚く北東側では薄くなっている。この上にローム層を主体とする土を30cm前後の厚さに盛土している。現表土層は、ローム層を主体とした土であることを考慮すれば、その厚さは50~60cm前後となる。このような盛土の構成は、土手Aのそれと大きく異なっており、土手Aの盛土の大半が黒色土~暗褐色土であることから、掘削削時のローム層の土は土手Bに盛土されたものとして扱えられる。なお、旧表土と思われる黒色土層は、所々硬質のブロックが含まれる部分や、黒褐色に近く硬質でやや砂質状のもとなど幾つかに分かれれる。これらの層の上部には焼土が散在し、薄いながらも層をなす部分もある。

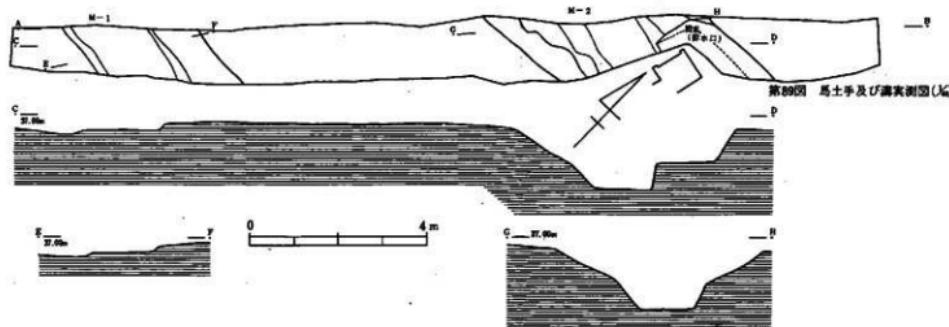
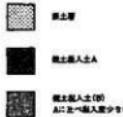
土手Bと堀との境付近は、土手Aとのそれよりも急激に落込むが、これは堀との重複関係を示すものではなく、土層等からみて新しい時期における土手の切崩しがあった故と思われる。

土手の盛土中からの出土遺物はなく、構築時期を明らかにすることはできない。また、土手A・堀との関係については、先述したように、掘削削時のローム層が本土手に盛土されていることから、その関係を認めることができるが、調査区内において本土手が北東方向に屈曲しているのに対して堀も同様に屈曲するのか、あるいは分岐しているのかが問題となる。この点は、調査区内に排水用マンホールが築かれており、深く掘削されているため調査できず不明である。



1. 砂質地土 粒子が粗い。たとへーと粒子多く者も。粒
2. 砂質地土 ハーフロームを中心とする。他の砂質地土
3. 砂質地土 粒子が細い。たとへーと粒子多く者も。
4. 砂質地土 フラットロームを中心とする。
5. 砂質地土 地下水面近くに水没した人間の骨の土。
6. 砂質地土 土壌中に水没した人間の骨の土。
7. 砂質地土 土壌中に水没した人間の骨の土で、アヘン
8. 砂質地土 ハーフロームを中心とする。沙質のみある。
9. 砂質地土 ハーフロームを中心とする。沙質のみある。
10. 砂質地土 ハーフロームを中心とする。沙質のみある。
11. 砂質地土 ハーフロームを中心とする。沙質のみある。
12. 砂質地土 ハーフロームを中心とする。沙質のみある。
13. 砂質地土 ハーフロームを中心とする。沙質のみある。
14. 砂質地土 ハーフロームを中心とする。沙質のみある。
15. 砂質地土 ハーフロームを中心とする。沙質のみある。
16. 砂質地土 ハーフロームを中心とする。沙質のみある。
17. 砂質地土 ハーフロームを中心とする。沙質のみある。
18. 砂質地土 ハーフロームを中心とする。沙質のみある。
19. 砂質地土 ハーフロームを中心とする。沙質のみある。
20. 砂質地土 ハーフロームを中心とする。沙質のみある。
21. 砂質地土 ハーフロームを中心とする。沙質のみある。
22. 砂質地土 ハーフロームを中心とする。沙質のみある。
23. 砂質地土 ハーフロームを中心とする。沙質のみある。
24. 砂質地土 ハーフロームを中心とする。沙質のみある。
25. 砂質地土 ハーフロームを中心とする。沙質のみある。
26. 砂質地土 ハーフロームを中心とする。沙質のみある。
27. 砂質地土 ハーフロームを中心とする。沙質のみある。
28. 砂質地土 ハーフロームを中心とする。沙質のみある。
29. 砂質地土 ハーフロームを中心とする。沙質のみある。
30. 砂質地土 ハーフロームを中心とする。沙質のみある。
31. 砂質地土 ハーフロームを中心とする。沙質のみある。
32. 砂質地土 ハーフロームを中心とする。沙質のみある。
33. 砂質地土 ハーフロームを中心とする。沙質のみある。
34. 砂質地土 ハーフロームを中心とする。沙質のみある。
35. 砂質地土 ハーフロームを中心とする。沙質のみある。
36. 砂質地土 ハーフロームを中心とする。沙質のみある。

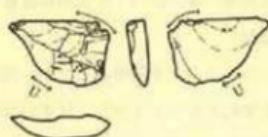
37. 砂質地土 ハーフロームを中心とする。沙質のみある。
38. 砂質地土 ハーフロームを中心とする。沙質のみある。
39. 砂質地土 ハーフロームを中心とする。沙質のみある。
40. 砂質地土 ハーフロームを中心とする。沙質のみある。
41. 砂質地土 ハーフロームを中心とする。沙質のみある。
42. 砂質地土 ハーフロームを中心とする。沙質のみある。
43. 砂質地土 ハーフロームを中心とする。沙質のみある。
44. 砂質地土 ハーフロームを中心とする。沙質のみある。
45. 砂質地土 ハーフロームを中心とする。沙質のみある。



遺物 (第90図)

加工痕のみられる剝片である。旧表土から検出された。石質は白色桂岩、上端にいくらか加工を施しているか。下端のやや薄く剥離した面には微細な使用痕がみられる。

本遺跡周辺には旧石器時代の遺跡が所在することが知られているが、本遺跡においても旧石器時代の一部をなしているものであったのかも知れない。調査時においてはローム層(ソフト部分)を掘り下げてみたが石器等の検出はなかった。



0 5 cm

第90図 盛り土内出土遺物実測図(秀)

第3節 四街道町高掘遺跡

調査の方法と経過

本遺跡の調査は、昭和54年11月6日から11月9日まで行った。

調査区域は、遺跡の存在する台地の中央部のやや北側に位置するもので、保安施設用地内の範囲である。（第91・92回 図版44）

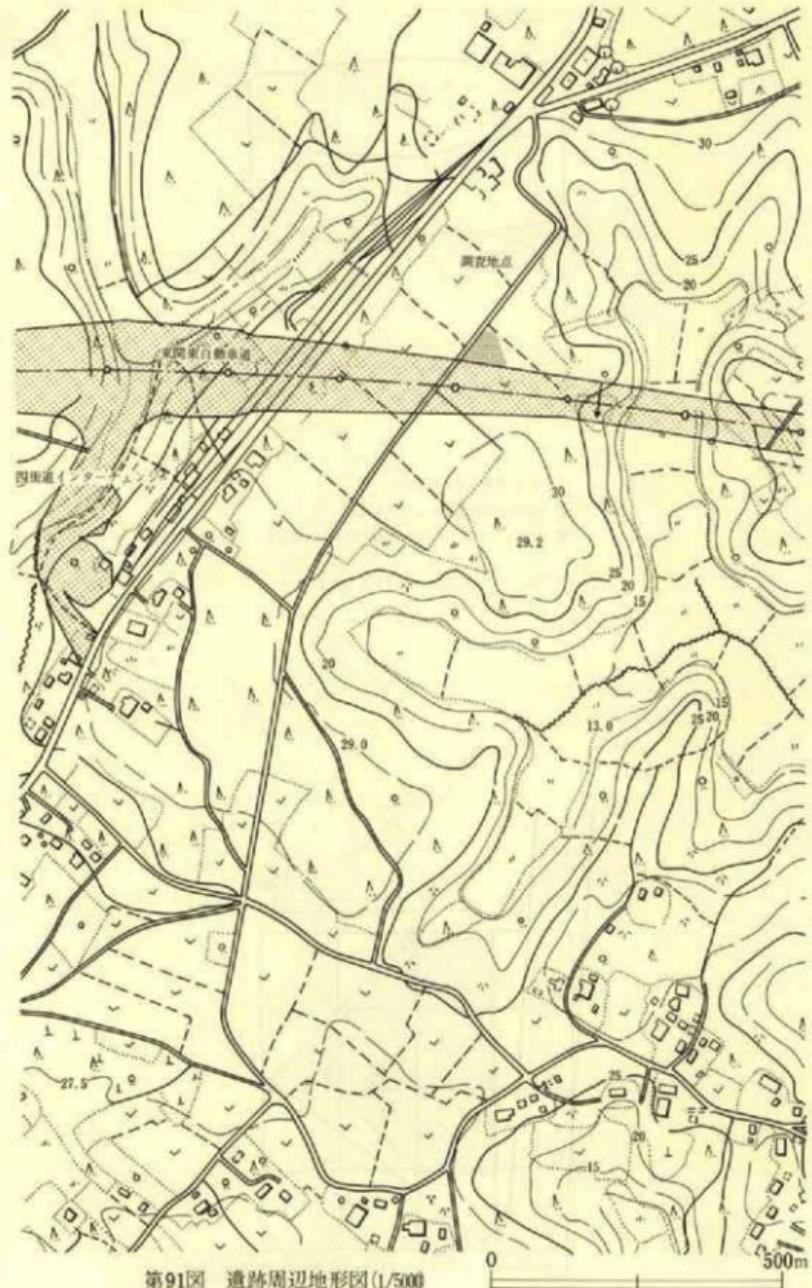
調査方法としては、 5×5 mのグリッドを基準としたが、発掘した堆土を区域内で処理しなければならず、調査区内中央の基準杭をもって4分し、 $\frac{1}{4}$ ずつ発掘しては埋戻すこととした。

調査の経過と概要は下記の通りである。

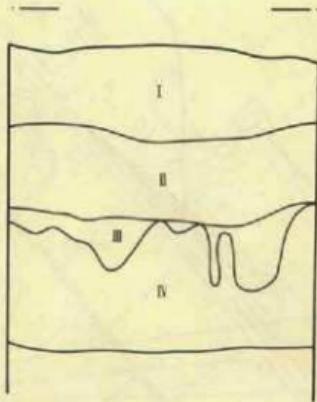
（11月6日～7日） 器材搬入・発掘区の設定後、北西側の $\frac{1}{4}$ 区画を発掘する。遺物は耕作土中から著しく磨耗した土器片が数点出土したのみで、遺構は検出されなかつた。続いて北東側区画を発掘するが、北西側と同様に遺構は検出されなかつた。順次埋戻しを行う。

（11月8日～9日） 南東側の $\frac{1}{4}$ 区画に続いて南西側区画と平行して発掘。遺物は耕作土中から数点出土したのみで遺構は検出されなかつた。図面作成・写真撮影後埋戻しを行い器材を撤収し終了する。

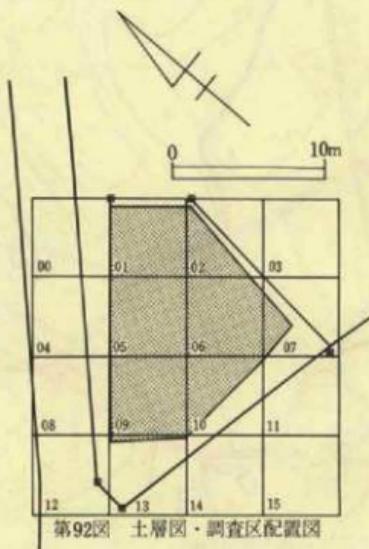
残念ながら今回、調査対象となった地点からは遺構・遺物は検出されなかつたがそれは台地上の極く一部を、それも任意に掘ったためである。調査地点からは土師器の小破片を少量ながらしか見ることができなかつたが周辺には生活跡等が存在することはまちがいないとと思われる。それはもう少し東側の谷にそって、それらが存在する可能性は高いものと考えられる。印旛沼へそぞぐ小河川にそった支谷上に存在する小集団の生活跡といったものの存在が予想し得るだろう。



第91図 遺跡周辺地形図 (1/5000)



- I 表土(黒褐色土・耕作土)
 II 褐色土(微細なローム粒子を含む)
 III ソフトローム(耕作により部分的にしき残らない)
 IV ハードローム(クラック帶あまり発達みられない)



小 結

各々の遺跡の概要についてはすでに述べた通りであるが、いかんせん路線内の調査という限られた部分のみの調査から何を視ることが出来るのか。調査をして遺構・遺物の存在を確認したと一定程度にしか成果として提示し得ないとしたらさみしい次第である。

とは言うものの蒲田谷津遺跡12号住居跡のような急傾斜地における住居跡の検出は住居跡の立地及び台地の占有・使用形態について、斜面に住居跡がないと言う前提をみごとに覆すものであり、将来的に蒲田谷津遺跡内の傾斜面から谷一低地にかけての使用状況を調査検討することが今後の課題として類例等収集をも含め必要であろう。また仮定としてではあるが9号住居跡においてはプラン決定について述べてみたがこのことも一つの資料的に検討する必要が残るものである。

内山遺跡に関しては、「鉄の考古学」において、佐倉市天辺の鍛冶遺跡として紹介されており、また今回の調査においても、製鉄に関連する遺物が少量ながらも出土しており、それは4号住居跡覆土中より吹子口の破片、各グリッドより少量ながらスラグの出土もみられ、製鉄遺跡と考えることも出来よう。また、本台地南側傾斜地付近からは砂鉄（確認はしていない）がイモ穴等を掘ると出てくると言われており、また深耕時に焼土が浮くという古者の話も現地で聞いている。

この製鉄跡の時期的な問題としては、「鉄の考古学」によれば、「部落のはば中央の墓地跡より明応年間の墓碑が出ておりー」とあり、それに近いものとしているが、今回の調査から考えならば、もう少し古くまで遡るものと考えてもよいのではないかと考えられる。一つは住居跡の時期「真間～国分期」及び井戸状遺構付近から出土した「元豊通宝」の流通した時期という二つの時期が想定し得ると考えられる。印旛沼周辺の生産集団を考えるうえで本遺跡は記憶されるべき存在であると思われる。

古沢遺跡の調査はまさにトレンチ調査であるが、得られた遺跡の情報は甚大なものである。直接、発掘調査が行われた地点は縄文時代中期中葉の時期の住居跡の他、土壤等かなり密度の濃い状態で遺構が検出されており、大集落の存在をうかがうことができよう。住居跡出土土器の内で大木8式、勝坂的な土器などこの時期の土器構成の複雑さをみることができる。また表採品の中から石斧の一部を図示したが、採集しては来なかったものの畠の各所には大量の石器及び破片が散乱しており、同時期あるいは近隣の縄文時代遺跡と比較してその量は大きいものがある。表採及び周辺を歩いた範囲内では遺跡の中心はやや北側の広い平坦な台地上全面にわたると思われ、縄文前期から後期（堀の内Ⅱ）頃までを主たる生活の場として利用していたものと考えられる。印旛沼周辺には同時期の遺跡の数も多いが、土器様相の混在及び石器量の多さは本遺跡の性格の一端を表わすものかも知れない。

新開遺跡は馬土手の断面調査のみである。残念ながら構築された時期等について特定し得る資料はついに知ることができなかった。将来的に富里村周辺の馬土手については測量等基本調査を充実させなければ、小開發等により全体を知ることは近い将来できなくなることはまちがいないであろう。早急な課題である。

大森塚跡・台跡・高掘跡

すでに本文中で述べた通り調査地点では遺構・遺物の検出は認められなかつたが周辺に存在するであろうことは考えられた。調査自体、遺構・遺物を目的として調査地点を求めるわけではないためこれで良しとすべきであろう。工事地点には遺構は存在していなかつたことを知ることが出来たことは一つの成果であろう。

参考文献

- | | | |
|-----------------|-----------------------------|----------|
| 1 千葉県教育委員会 | 「埋蔵文化財調査報告書」 | 1970 |
| 2 座田蔵郎 | 「鉄の考古学」 | 雄山閣 1973 |
| 3 千葉県都市公社 | 「三里塚」 | 1971 |
| 4 千葉県文化財センター | 「佐倉市飯合作遺跡」 | 1973 |
| 5 日本国文化研究所 | 「太田・大森塚遺跡」 | 1978 |
| 6 千葉県文化財センター | 「佐倉市星谷津遺跡」 | 1978 |
| 7 酒々井町教育委員会 | 「酒々井町文化財分布地図」 | 1978 |
| 8 千葉県広報協会 | 「千葉県埋蔵文化財包蔵地等一覧」 | 1978 |
| 9 印旛村埋蔵文化財分布調査団 | 「印旛村の古代文化遺跡の分布と
採取資料の紹介」 | 1980 |
| 10 酒々井町教育委員会 | 「酒々井町総合公園遺跡発掘調査報
告書」 | 1980 |

This report concerns archaeological investigations carried out at the following six Sites by the Chiba Prefecture Cultural Properties Center.

<Main results of the investigations>

(1) KAMATA YATSU SITE (from April to August, 1979)

We discovered twelve pit-dwellings (Yayoi period-1, Heian period-11) and five tombs (The Middle Ages), six drainage ditches, and potsherds in Early Jomon period.

(2) UCHIYAMA SITE (from February to March, 1980)

We discovered ten pit-dwellings (Kofun period-2, Heian period-8,) and five ditches, one tomb and one pit,

(3) FURUSAWA SITE (from August to September, 1979)

We discovered one pit-dwelling, four pits, all in Middle Jomon period.

(4) OSHINOZUKA SITE (August, 1979)

Southern part of the site was surveyed in 1970, and northern part in 1977. Our investigation covering the area which lies between the two parts obtained no remains.

(5) SHINKAI SITE (September, 1979)

We detected a big "Uma-dote", or a bank surrounding a pasture. It is said to have been built in Edo period.

(6) TAKABORI SITE (November, 1979)

The surveyed area thought to be a part of the site yielded no remains.

図 版



遺跡近景(西側より)



遺跡遠景(南側より)

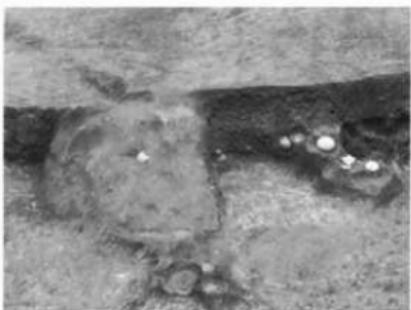
PL. 2 (蒲田谷津遺跡)



1号住居跡全景



2号住居跡全景



2号住居跡調査状況



2号住居跡カマド内
遺物出土状況



PL. 4 (蒲田谷津遺跡)



3号住居跡全景



4号・5号住居跡調査状況



6号住居跡全景



6号住居跡カマド断面

PL. 6 (蒲田谷津遺跡)



7号住居跡全景



7号住居跡
カマド

6号・7号住居跡全景





道路東側部分造構配置状況



溝状造構状況

PL. 8 (蒲田谷津遺跡)



道路北側部分近景



8号住居跡全景



9号住居跡全景



9号住居跡
カマド断面及び
カマド内遺物
出土状況





10号住居跡全景

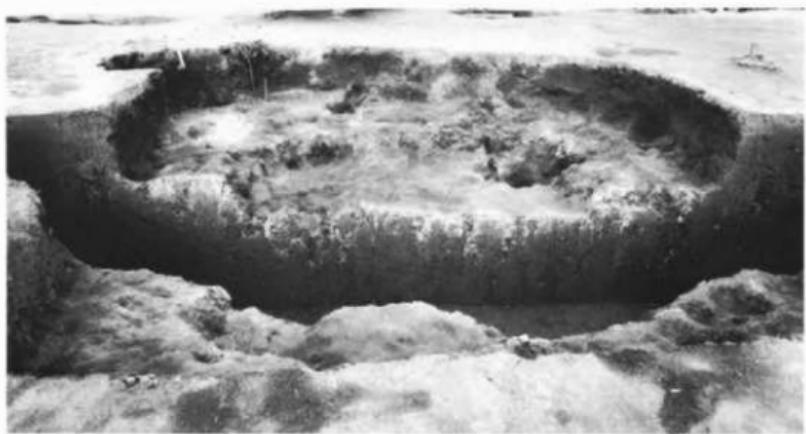


10号住居跡(貼り床除去後)

10号住居跡カマド調査状況



10号住居跡壁周及び掘り方



10号住居跡掘り方断面

PL. 12(蒲田谷津遺跡)



11号住居跡全景

12号住居跡
(遺構確認時)



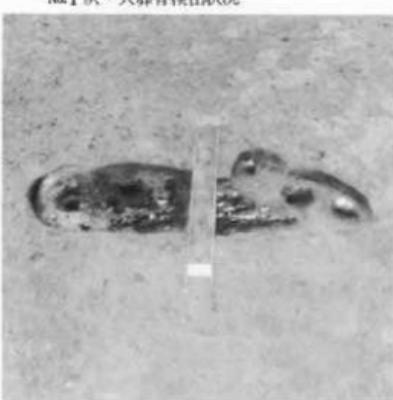
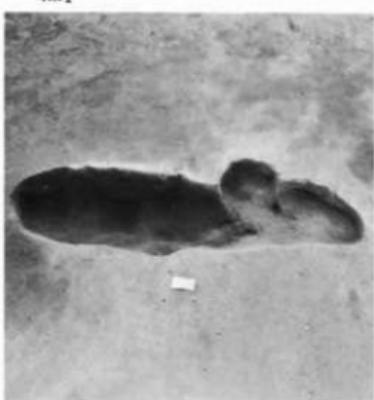


12号住居跡土層断面



12号住居跡全景

PL. 14(蒲田谷津遺跡)





D-1



D-3



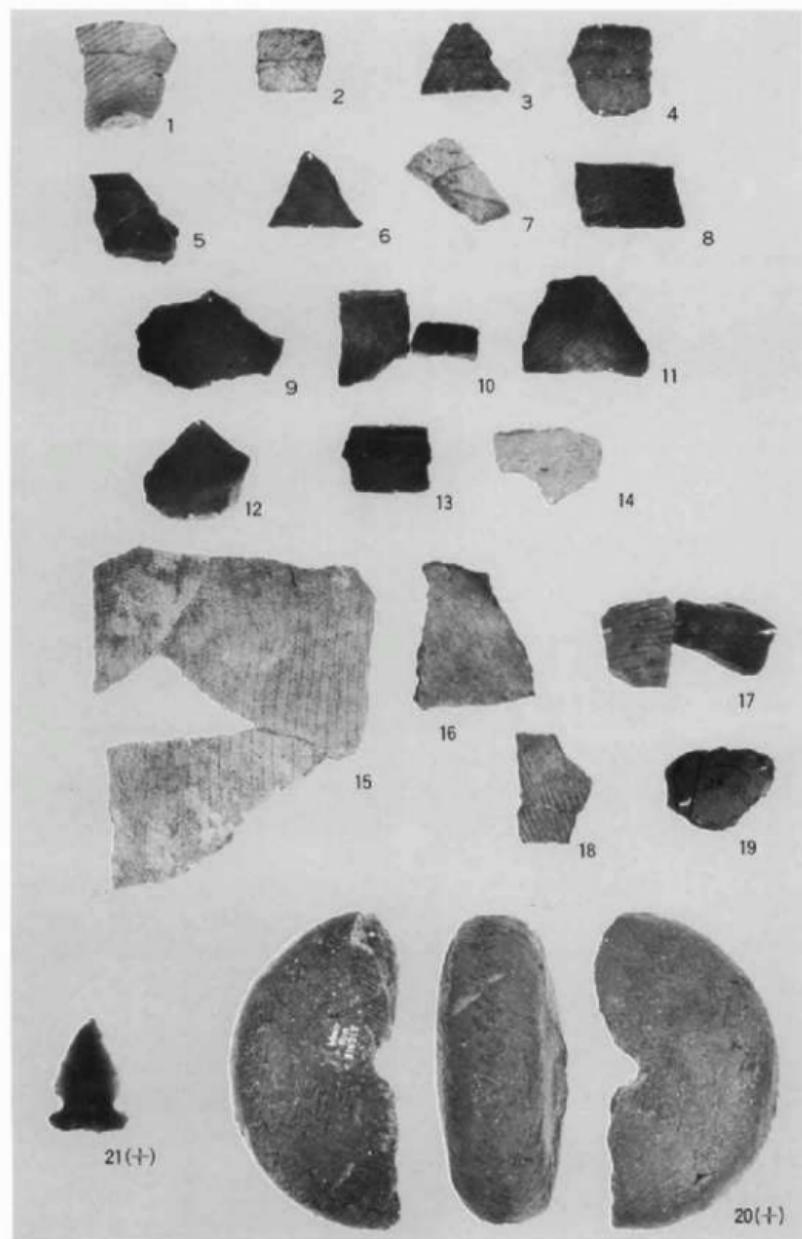
D-6



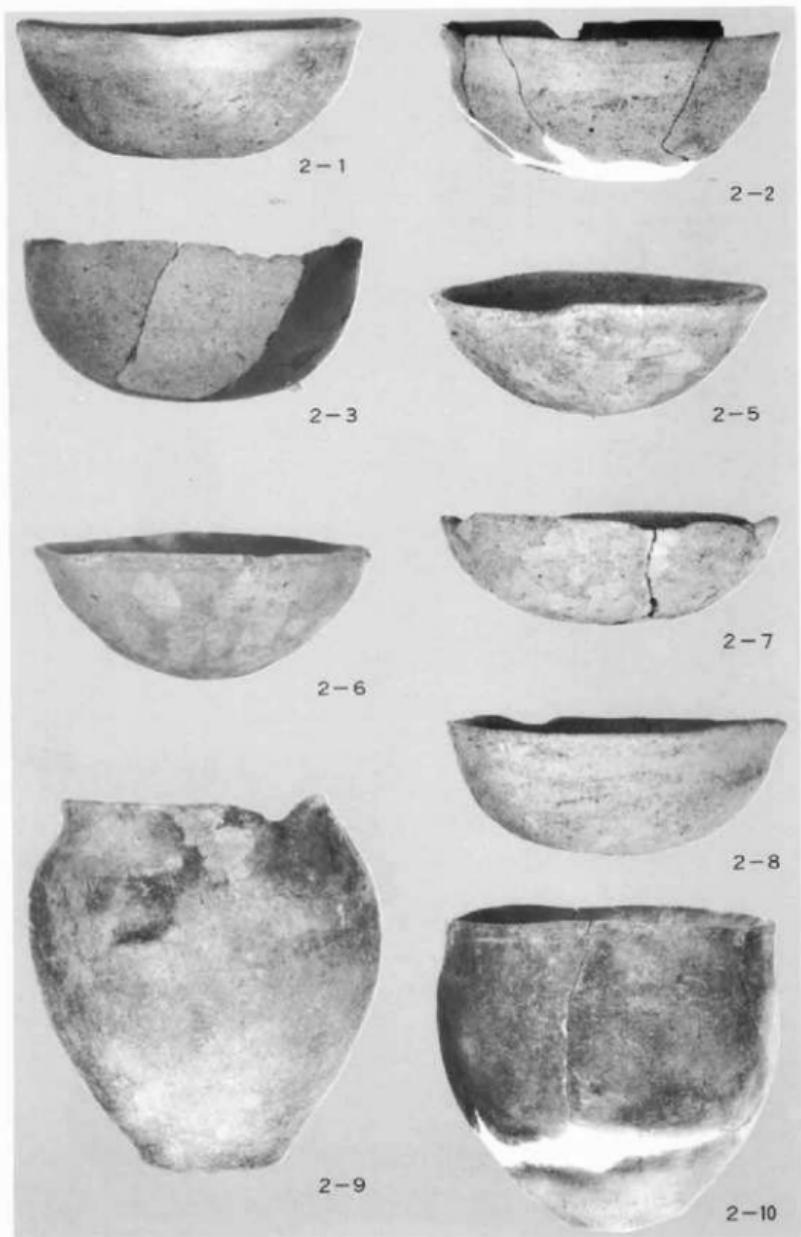
D-7

土壤

PL. 16(蒲田谷津遺跡)



1 号住居跡出土遺物





2-11



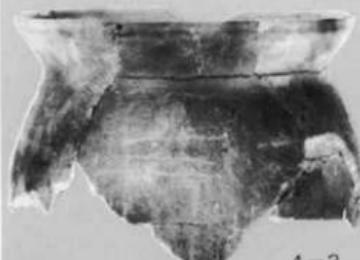
2-12



2-13



2-14



4-2



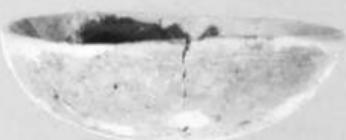
4-1



4-4



5-1



5-2



5-3

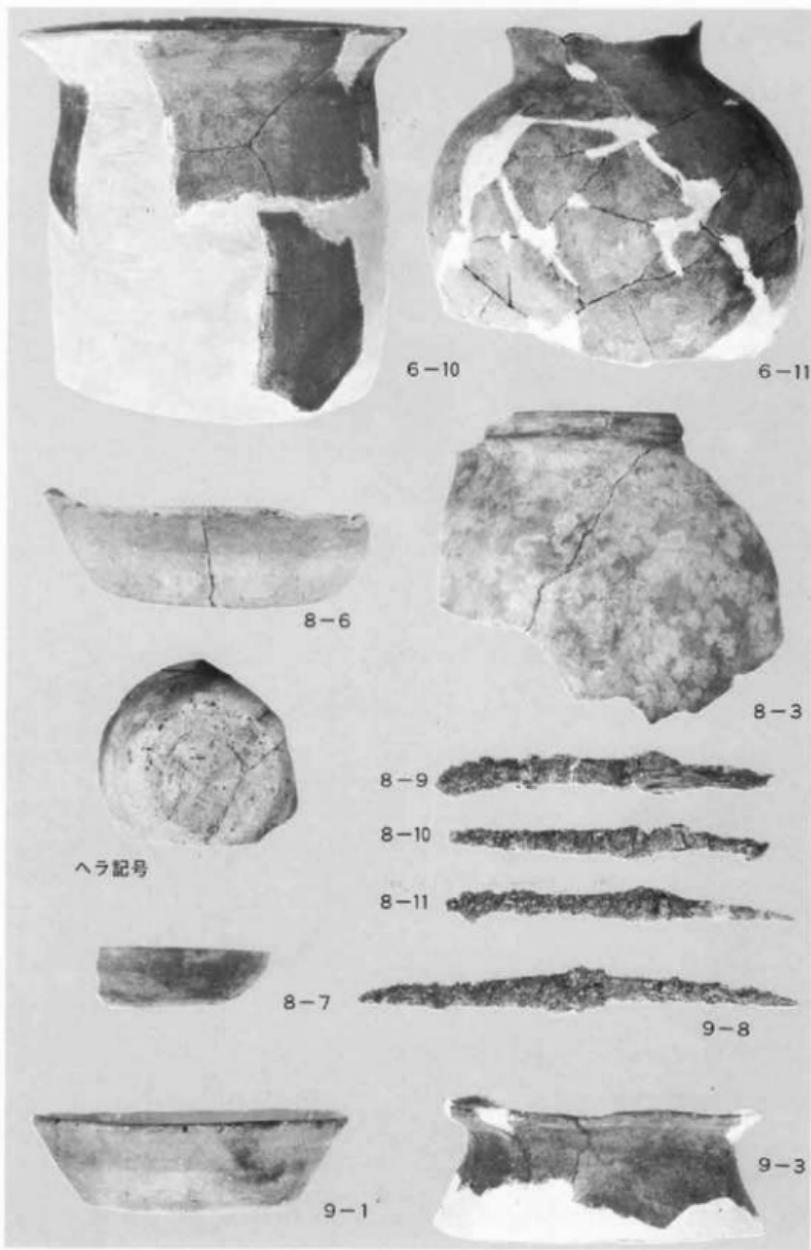


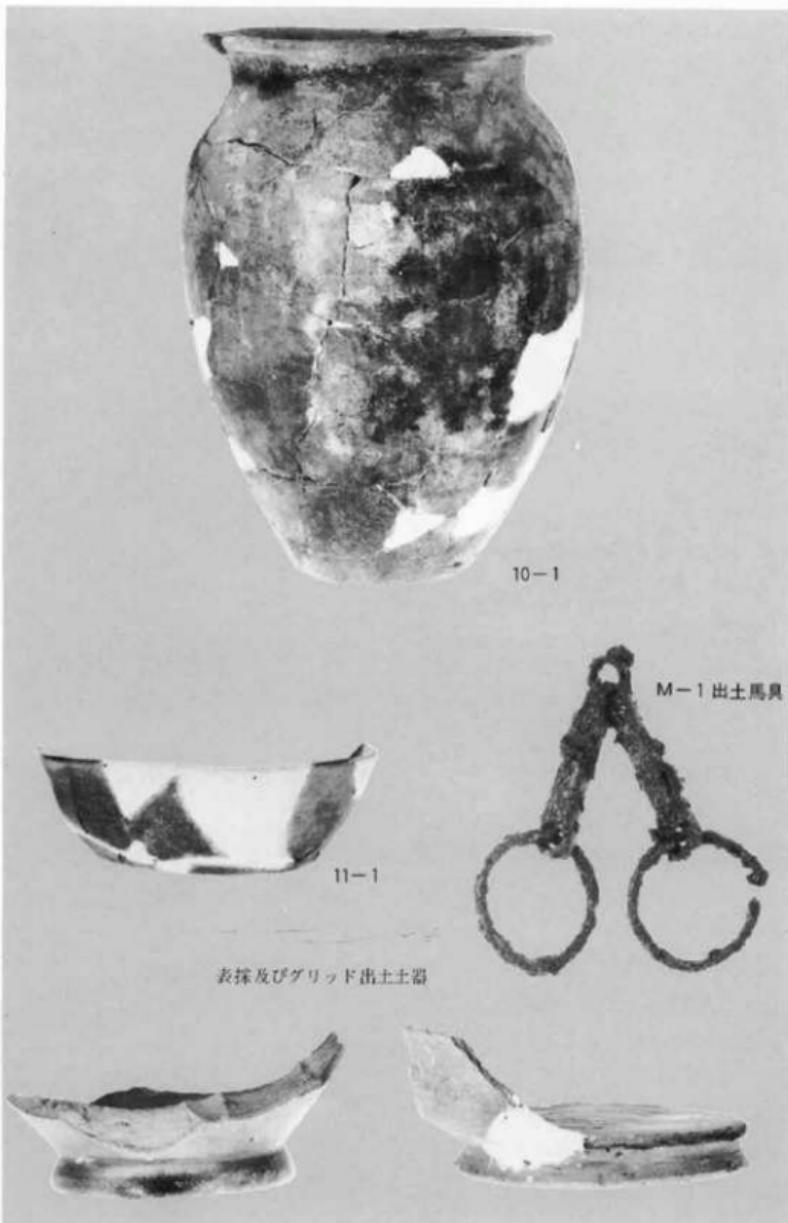
5-4

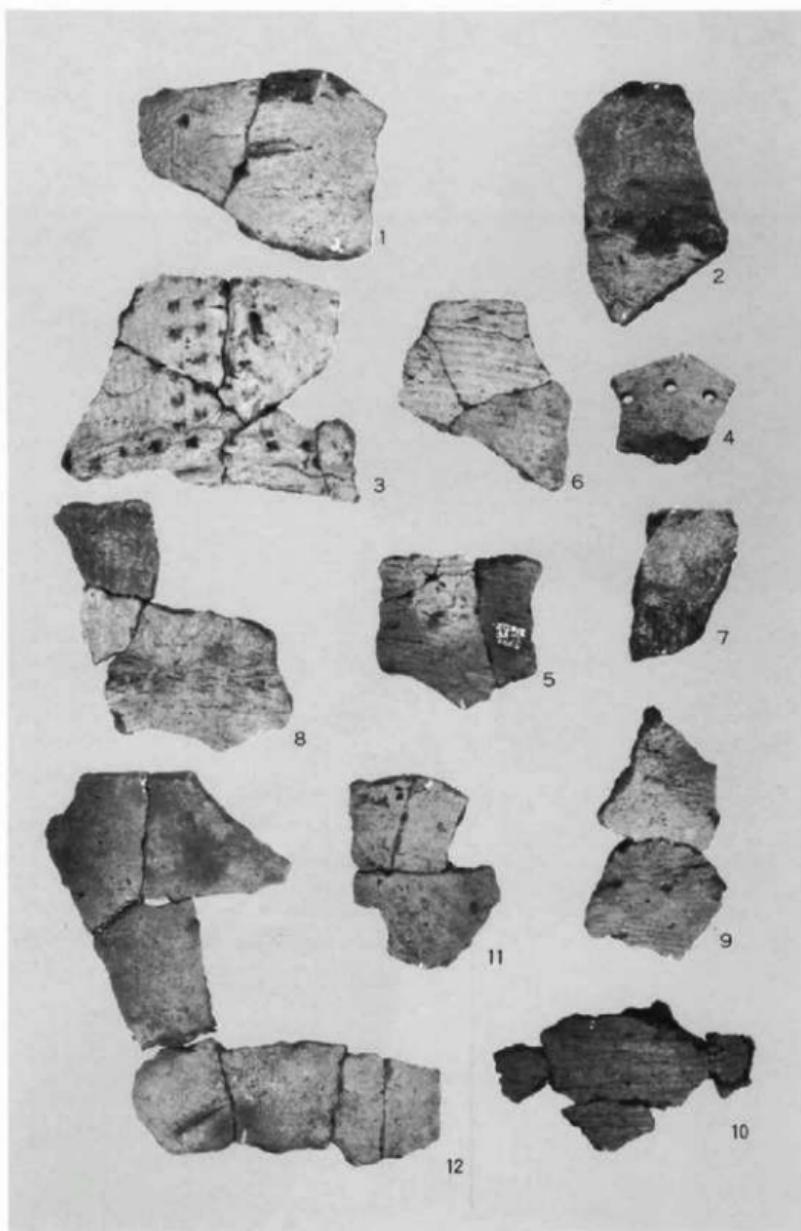


5-7









PL. 24(内山遺跡)



道路近景



1・2号住居跡全景



3 号住居跡全景



4 号住居跡全景

PL. 26(内山遺跡)



5号住居跡全景



6号住居跡全景



7号住居跡



6・7号住居跡切り合い状況



8号住居跡遺物出土状況・西より



8号住居跡全景東より



9号住居跡全景



10号住居跡全景



M-1 全景



柱列 (P-3)



M-2(全景)



火葬跡No.1

口馬仕居跡



火葬跡No.1(全景)

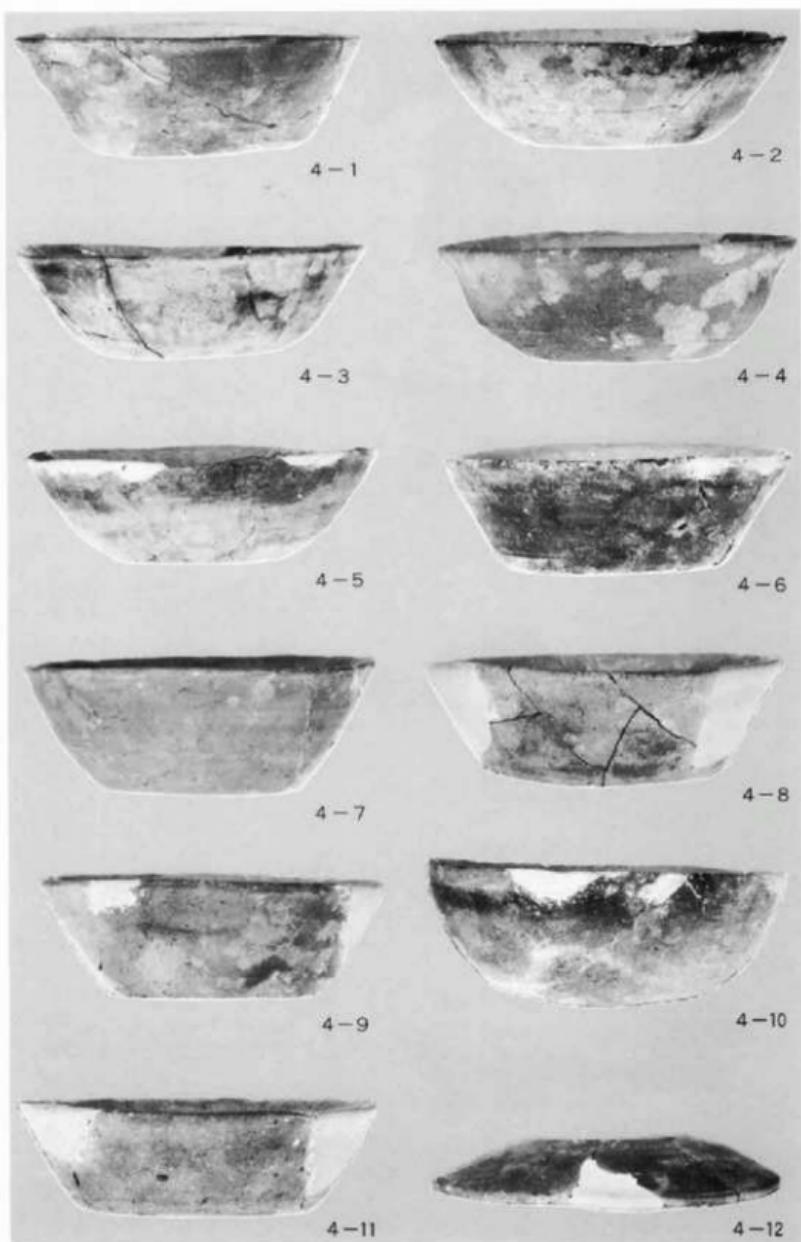
PL. 32(内山遺跡)

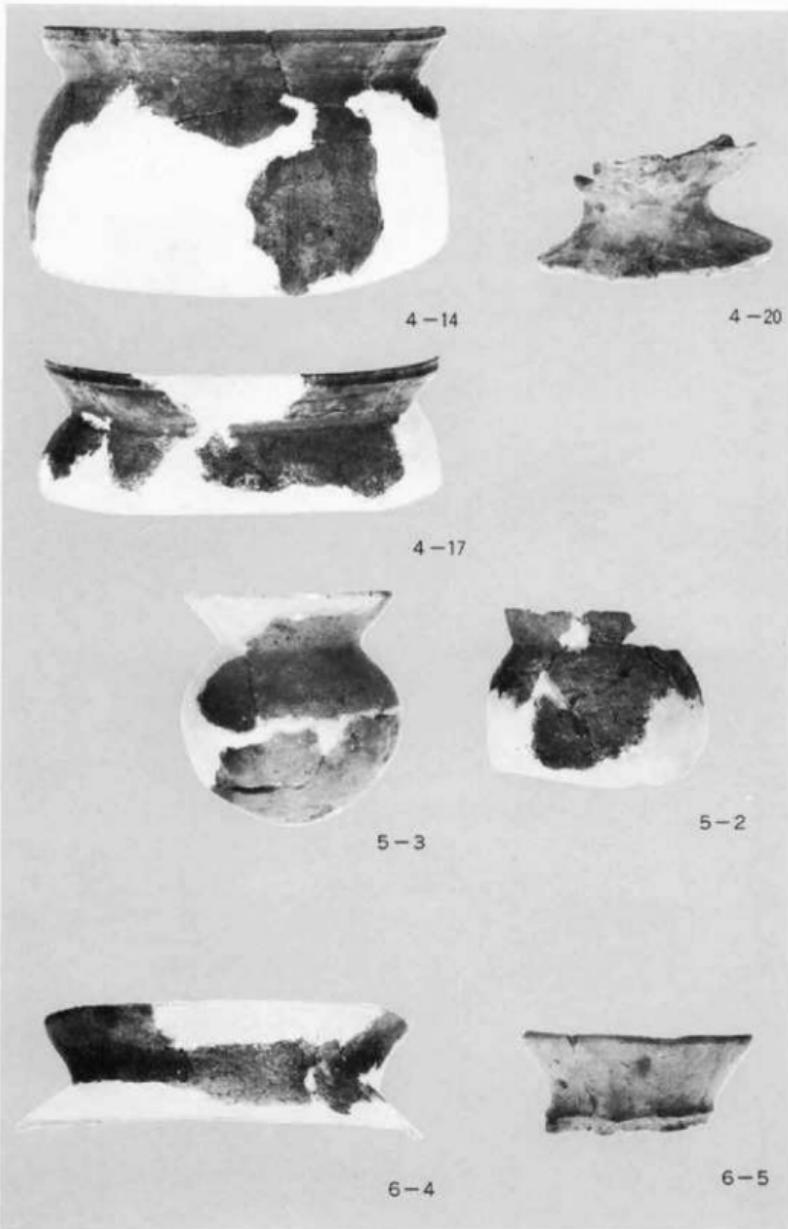


井戸状造構



井戸状造構







PL. 36(古沢遺跡)



遺跡近景



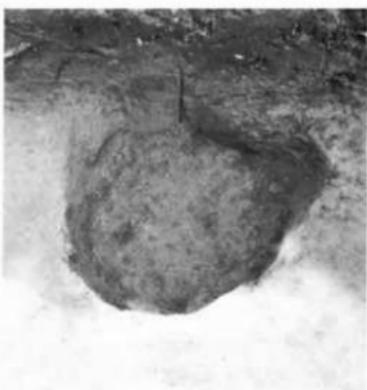
調査地点(調査前)



001号路



002号跡(遺物出土状況)



002号跡(完掘時)



002号跡出土石器



003号跡



004号跡

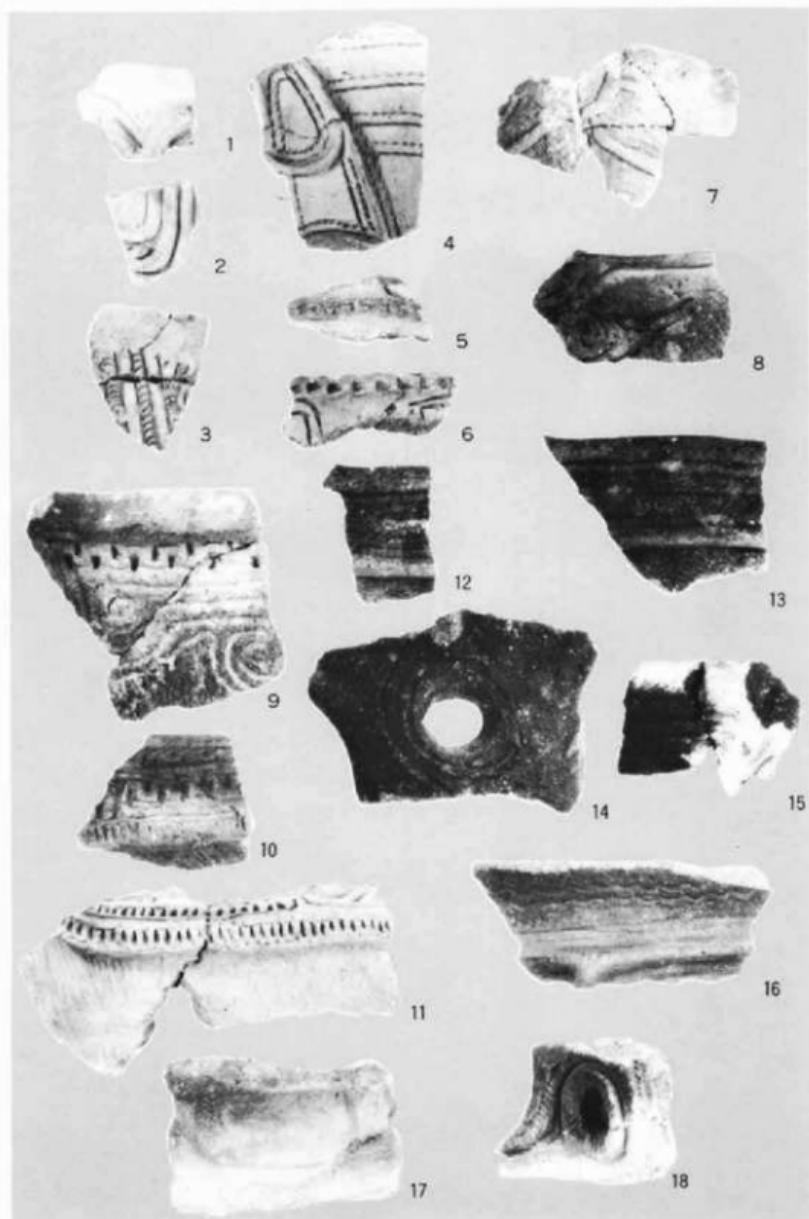
PL. 38(古沢遺跡)



005号跡(住居跡)



006・007号跡



005号跡(住居跡出土土器)



遺跡及び周辺表採石器



道路調査地点(写真左側高速道路部分から前方陸橋にかけて大塚塚遺跡、右手は太田・大塚塚遺跡)



(写真左側荒地が太田・大塚塚遺跡)

PL. 42(新開遺跡)



調査前状況

M-1



M-1、M-2
掘り上り状況



土手(A)断面



土手(B)断面

PL. 44(高堀遺跡)



調査状況



昭和56年3月20日 印刷

昭和56年3月31日 発行

パイプライン

—新東京国際空港航空燃料パイプライン

事業用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

新東京国際空港公団

東京都港区虎ノ門2-2-5

発行 財團法人 千葉県文化財センター

千葉県千葉市亥鼻1-3-13

印刷 依田印刷株式会社

東京都江戸川区西小岩3-6-3

TEL 659-0123(代)
